るところに咲いてゐた。いよ〳〵登りにかゝらうとするあたりで水を飲まうと谷ばたに降りてゆくと、其處の澱みには大きなやまと鰌が四五疋、影も靜かに浮んでゐた。谷のいよ〳〵細くなつたあたりの岩の蔭にはあぶらめといふ魚が遊んでゐた。幼い時、三尺か四尺の釣竿でこれらの魚を釣つて歩いた故郷の山奥の溪が思ひ出された。空は昨日と同じく晴とも曇ともつかぬ梅雨の空であつた。

陣座峠は遠江と三河との國境に當つて居る。國境の山といふと大きく聞えるが、僅か一千五百尺ほどの高さ、登りも下りも穩かな傾斜で、明るい峠であつた。ことに遠州路の方は木立が深くて登るに涼しかつた。その深い木立の下草に諸所木苺の實がまつ黄に熟れてゐた。いゝ歳をした二人、ことに一人は半白以上の白髪、あとの一人にもこの頃めつきりそれが見えだして來たといふ二人はわれさきにとその小さい粒の實を摘みとつてたべた。

八合目ほどの所の路ばたによく囀る眼白鳥の聲を聞いた。見れば其處の木の枝に籠がかけてあつた。見廻すと近くの木蔭に壯年の男がしやがんで險しい眼をして我等を見てゐた。聲をかけて通りすぎると程なく峠、丁度時間もいゝので用意の握飯を出して晝にした。私は半僧坊で二合壜を仕入れて來てゐたので先づそれにかゝつた。するとY――君も亦た一本とり出して、とても一本では足るまいと思つて……、と笑ひながら差出した。松の蔭で、あたりには遲い蕨などが萠え立つて居り、三河地の方から涼しい風が吹きあげて來た。

其處へ先刻の男が眼白籠を提げてやつて來た。そして變な顏をして立ちどまつてゐたが、其儘其處に坐つてしまつた。Y――君は持つてゐた盃をさしたが、酒は大嫌ひだとて受けなかつた。三十前後の屈强な身體で、眼尻のたるんだ、唇の厚ぼつたい男であつた。話好きと見え、ほゞ三四十分の間、一人で喋舌つてゐた。おめエたちは一體何處で何の身分で、何をしに斯んなところに來たのか、といふのが彼の話題の第一であつた。根掘り葉掘り訊いた上、

『どうも、さつぱり解らねエ。』

と諦めた。そして代りに自分自身の事を語り始めた。何處何處の生れで、何處其處とさんざ苦勞をした揚句、今では斯んな所に引つ込んで何とか線の線路工夫をしてゐると語つた。

『線路工夫……？』

と聞きとがめると、Y――君が、

『い、エ、電燈線の線路工夫でせう、此頃この邊に引かれた電燈線があるのです。』

と說明した。

眼白でも飼はねばなア、斯んな山の中では何の樂しみもねエ、と言ひながら彼は立ちがけに、私のところがして置いた空壜を取りあげて、これ、貰つて行くよ、酢を入れとくにい、からナ、とどんぶりに入れた。

我等も程なく其處を立つた。するとまた眼白籠が路ばたの枝に懸けられ、鳥ばかりが高音を張つて、見廻してもその主人公はゐなかつた。

『ア、あんな所に！』

見れば成程、路から一寸離れた櫟や小松の雜木林の中に立ててある眞新しい電柱の上に登つて彼は何やら爲しつゝある所であつた。

下りつけば其處は幾つかの小山の裾の落ち合つた様なところで、狹い澤となつてゐた。片寄りに一すぢの溪が流れ、あちらの山こちらの山の根がたにすべて〻十二三軒もあらうかと思はるゝ藁家が見えた。それらの家に圍まれた様な澤はみな麥の畑で、黄いろくも黑くも見ゆるそれをせつせといま刈つてゐた。黄柳野村といふのであつた。

村に一本の路を急いで居るとソイ路ばたにすつかり戸障子をあけ放した一軒の家があつた。そして部屋の中にも軒端にもいつぱいに眼白籠が懸けてあり、とり〴〵に囀り交してゐた。部屋の中には酌婦あがりとも見らるる色の黑い三十年增が一人坐つて針をとつてゐた。友人と私とは相顧みて、微笑した。

狹い村を通り終れば路はまた登りとなつた。吉川峠といふ。

山は陣座峠より淺かつた。そして雜木の茂つた濃木林の中に澤山の黄楊が見かけられた。犬黄楊ら

しかつたが、殆んどその木ばかりの茂つた所もあつた。さつき通つた村の名もこれから出たのだと思はれた。陣座峠でも見かけたが、私には珍しい山百合があちこちと咲いてゐた。莖は極めて細く、花もしなやかで、色がうすもゝ色であつた。普通の、白い百合も稀に咲いてゐた。

勞れて來たせゐか、今度の下りは長かつた。自づと話がはずんだが、元氣のいゝ話ではなかつた。自分の爲事の不平、朝夕の暮しの愚痴、健康の不安、中にもこの友が自分の子供に對する心配などは身にしみて聞かれた。

やがて、麥刈り、田勦き、桑摘みの忙しさうな村に出た。埃の立つ道を急ぐともなく急いで、漸く豐川の岸に出た。偶然にも道はこの前同じく新城の友を訪ねて來た時散歩に出て渡つた辨天橋の上に出た。高い橋、深い淵、淵の尻の眞白な瀨、私たちは暫く橋の上に坐つて帽子をぬいだ。

ともするとその枕許に坐つて話をする事になりはせぬかと氣遣つて來た新城町の友K——君は幸にも起きてゐた。而かも私の訪問がだしぬけであつたので、呆氣にとられながら小躍りして喜んだ。然し、いつもながら聲はろくに出なかつた。結核性の咽喉の病氣にかゝつて六七年も私の沼津に來て養生してゐたのだが、この數ヶ月前、其處を引上げて鄉里に歸つてゐたのである。その姉も、その父も、友に劣らずこの突然の訪問を喜んだ。姉も、父も、この病人のために全てを犧牲にしてゐると謂つた様な境遇に在る人たちなのである。

突然ではあり、時間ではあり、ことに初めての氣賀町の客人のために町の料理屋に出て夕飯をとらうといふ事になつた。それを聞くとY——君は驚いて、イ、エ私は歸りますといふ。これからどうして歸れます、それに折角の事だから、と家の人たちも總がかりで留めたが、一日はまだしも二日とはどうも學校が休めない、と言つて立ち上つた。なアに四五里の道だし自轉車ならわけはありません、と私の顏を見て笑ひながら言つた。私にはいま漸く彼があの乘れもしない山坂路を一生懸命になつて自轉車を押して來たわけが解つた。歸りは無論その山坂路でなく、他にい、道路があるのださうである。そしてその車のベルを鳴らしながら、たけ高いうしろ姿を見せて彼は歸つて行つた。夏のことだで、まださつと二時間は明るいが、樂ではないぞなど此處の老父はそれを見送りながら言つた。

然し、夕飯には町へ出る事になつた。たつて止めたが早や立ち上つたこの友の、兩手を振りながら出もしない聲を絞つて、先生、後生ですから私のために出しになつて下さい、私だつてたまには明るい所へ出て行きたいですよ、といふのを聞くと、矢張りいなめなかつた。その父と姉と友と私と、わざと町裏の田圃路を通つてこの前來た時も行つた事のある遠い料理屋へ出かけて行つた。新城町は桑畑の中に在り、兵兒帶の樣な長いながい一筋町である。

杯をなめながら、席に出た藝者たちから私は意外な事を聞いた。鳳來寺山の佛法僧聽きが近來急に流行り出し、なほその宣傳のため土地の有志に招かれてわたしたち一組は昨夜出かけ、殘る一組は今

夜鳳來寺に佛法僧聞きに行つてゐる、といふのだ。呆れながら、お前たちがあの鳥を聞いて何にするのだ、と言へば、い、え、お客樣ごとにその事を吹聽して勸めるのですよ、といふ。その代り佛法僧は近來頻りに啼くのださうだ。この前、私の聽きに來た時は山の上の寺に九晩泊つて辛うじて二晩だけ聽き得たのであつた。今は行きさへすれば毎晩聞けるといふ。聲を絞つて友人は言つた、佛法僧もえらく商賣氣を出したもんですネ、と。

『それも先生のおかげサ。』

早や醉つて顏は眞赤に、豐かな頰鬚のつや〳〵と白い老父は笑つた。この前來た時、私は『鳳來寺紀行』にこの鳥の事を書いて雜誌『改造』に出した。それが今まで殆んど無關心であつたこの附近の人たちに意外な反響を喚んだのださうだ。現に主要な停車場には佛法僧の繪をかいたポスターが張られ、私の文章の中の文句が大きな字で引かれてあるといふ。

六月二十三日。

私の居る事はこの友人の身體によくない樣に思ひながら晝過ぎまでも愚圖々々してゐた。その間、私の膝の側には朝からずつと盃と德利とが置いてあつたのである。豐川の鮎の蓼酢など、近來になくうまいものであつた。

昨夜の藝者の話で鳳來寺行きはかなり興が醒めたが、然し每晩啼くといふ佛法僧を樂しみに矢張り

出かくる事にした。電氣に變つた豐川鐵道で長篠驛下車、驚くべし其處には鳳來寺行乘合自動車が出來てゐた。沿ふて走る寒狹川の岸の岩には、昨日名も無い溪で見て來たと同じく岩躑躅が咲きこぼれてゐた。

直ぐ鳳來寺の山に登り、寺に一二泊を賴まうかと思ふたが、今では其處にも每晩十人位ゐの泊客があると聞いたので遠慮され、とりあへず麓の宿屋に一泊することにした。この宿屋もこの前の紀行には『これも廣重の繪などに見るべき造りの家である』と書いてある通り、曾木板葺きの古び果てた宿であつたが今は一枚ガラスの大戸を玄關に立てた立派な宿館に新築されてあつた。通された二階はまだ荒壁のまゝで、唐紙もろくに入れてなかつた。やう〳〵疊だけは入れました、と宿の者は言つた。

一ぷく吸つたまゝ、私は宿から二三軒先の硯造りの家に出かけて二三の硯を買つた。この山から出る鳳鳴石といふのでその質のいゝ事をばかねて聞いてゐるながらこの前は荷になるのを恐れて買はなかつた。今度は自動車電車だから大丈夫である。

恐れてゐた相合客は夜に入るまで來なかつた。不思議なことです、と宿の主婦は呟いたが、私はほつかりした。取り寄せた晩酌の酒のさまでゝないのも嬉しかつた。此處にも豐川の鮎が入つてゐた。

窓から見る宿の前の溪端に一つ二つと飛ぶ螢が見えだした。それまでに山の方で啼いてゐたいろいろの鳥の聲も靜まつた。軒を仰ぐと、曇つてゐるが月明りのある空である。その空を限つて嶮しく聳え立つた鳳來寺山の山の端は次第に暈色深く見えて來た。

其處へ、心おぼえの啼聲が聞えて來た。佛法僧の聲である。月を負ふた山の闇から、闇の底から落ちて來る、とらへどころのない深い〳〵聲である。聽き入れば聽き入るだけ魂の誘はれてゆく聲である。玉をまろがすと言つては明るきに過ぎ、帛を裂くと言つては鋭きに過ぐる。無論、佛、法、僧などの乾いた音色ではゆめさら無く、郭公、筒鳥の寂びた聲に較べては更に數段の強みがあり、つやがある。眼前に見る大きな山全體のたましひのさまよひ歩く聲だとも言ひたいほど、何とも形容する事の出來ない聲である。

『ア、啼く、啼く、……』

私はいつか窓際にすり出て、息を引きながら聽き入つた。相變らず所を移して啼く。一聲二聲啼いては所を變へる。暫くも同じところに留らない。ともすれば、山そのものが動いてゐるかとも聞きなさるることすらある。

私は膳を窓側の緣に移した。一杯飲んでは耳に手をあて、一杯飲んでは眼を瞑つた。二三本も飲んだが、一向に醉はない。

『よう啼きますやろ』

宿のお婆さんが笑ひながらお銚子を持つて來た。流石に私もきまりが惡くなり、それを濟ますと床

についた。

この鳥の啼聲を文字に移し得ざる事を憾む。内田清之助博士著『鳥の研究』の中に「高野山中學校教諭榎本氏が幾年かに渉つて聞かれた所によれば次の如くである。」として、

この鳥の啼く聲はギヨブツコー、ギヨブツコー、或はグブツクオーと聽えるものを凡そ一秒弱の間を挿んで繰返し、時々はギヨブツクオー、コー、或はギヨブツ、ギヨブツ、クオーを加へる。ギヨブツクオー、コー、の場合には第二音クオーと第三音コーとの間に、第一音と第二音との間よりも、少し長い間を置き、且つ第三音コーは第二音よりも調子低く、またギヨブツ、ギヨブツ、クオーの場合には各間隙に長短はなく、殆んど三音を連唱する。下略。

云々と書いてある。流石によく調べてある。強ひて書けば先づ斯うであらう。が、本物（ほんもの）とこれとの差は雀と佛法僧との差に相等しい。

枕許の水を飲むために眼を覺す。

啼いてゐる。

夜の更けたゝめか、或は麓近く移つて來たか、宵の口より一層澄んで聞える。

起きて窓に凭ると、月も曇を拭つて照つてゐた。山の森の茂みにも月の光があつた。そして、宵の口は多く右の、ギヨブツコー、ギヨブツコー、の二聲づつを啼いたに夜の更けてからは、ギヨブツ、ギヨブツ、ギヨブツ、コーの三聲を續ける啼きかたをしてゐた。この啼きかたは非常に迫つて聞える。

六月二十四日。

朝、洗面所で顔を洗つてゐると、その横の部屋から一人の泊客、痩せた青年が出て來て私を見てゐるらしかつたが、不意に牧水先生ではないか、と言ふ。君は、と問ひ返すと意外にも前のY——君やK——君たちと同じく我等の創作社々友T——君であつた。この人は入社して何年にもならぬが、歌に異色があり、印象の深い人であつた。同じく昨夜佛法僧聞きに來てゐたのであると。彼は名古屋の八高の生徒である。

朝食を共にし、一緒に山に登つた。實は昨夜よく聞いたには聞いたが、耳の悪い私には、もう少し近かつたら、の慾が出たのである。そして山の寺に一二泊を頼まうと思ふたのであつた。寺にはこの前の時の知合の僧侶がゐた。

彼も少なからず驚いて上へ招じて呉れた。そして、朝から酒ばかり飲んで何をする人かあの時はさつぱり解らなんだが、といふ四年前の回顧談などが出た。あの時は三度々々梅干ばかりさしあげたが、今では寺でも相當の用意がしてある故、どうぞゆつくりして行つて呉れ、と勸められた。實は梅干すらその時は出し惜しまれたのであつた。そして明けても暮れても麩ばかりであつた。天氣も悪く、寺は毎日雲霧に包まれてゐた。で、私は麩化登仙の熟語を作つて自ら慰めたものである。人に眼だたぬ

廊下の隅がその時の私の居場所であつた。その隅を眺めつゝ、四年の昔を戀しく思つた。

寺の中もすつかり綺麗になつてゐた。それとなく聞いてみると今夜豐橋の實業家たちが登つて來て佛法僧を聞き乍ら寺で謠曲會を開くのだといふ。T——君と相顧み、麥酒など勸められるのをも辭して別れた。東照宮の方に行く途で、見覺えのある老爺に出會ふた。寺の寺男である。毎日私のために飲料を籠から運んで呉れた恩人であつた。銀貨を紙に捻り、不審がる彼に渡して別れた。

宿屋に歸り、折柄の自動車に飛び乘り、長篠に出で、折角の奇遇をこのまゝ別るゝも辛く、其處より二三驛上手（かみ）の湯谷溫泉まで行つて共にゆつくり話さうといふことになり、電車に乘つた。車內は相當にこんでゐたが、湯谷驛に近づくやみな降り仕度をし始めた。名古屋邊から來た所謂散財の客らしい。また相苦笑して其處を乘越し、終點驛川合まで出てしまうた。そして其處に唯だ一軒の宿屋二木屋といふに荷物を置き、行く所もないまゝに百間灘などといふ邊を散步した。このあたり豐川ももうほんの溪谷となり、下駄ばきのまゝ徒涉出來るのであつた。岸の岩には相變らず鄽躅が咲き、河鹿が頻りに鳴いた。

夜、柄にもなく旅愁を覺え、この病身の初對面の友を相手に私は酒を過した。そして終に藝者と名乘る女をも呼んで伊奈節を聞いたり唄うたりした。宿屋の前の往還が信州伊奈に通ずるものであることを聞いて思ひついた事であつたらう。

『先生、いつそ伊奈まで行きませうか』

四五杯の酒に醉うた年若い友はその痩せた手を擧げて言うた。

六月二十五日。

頭をよくするどころか、へと〳〵になつて、夜遲く沼津に歸つた。靜かにならう、靜かにならうと努めつゝいつか知ら結果はその反對になる、いつもの癖を身にしみじみと感じながら。

硯はよき土產であつた、机の上に靜かである。鳳來寺の山よ。希くは永久に靜かな山であつて呉れ。

北海道行脚日記

九月二十一日。

午前二時起床、やがて子供たちも起し、家族打揃うて赤飯をいたゞき、午前四時夫婦して家を出たり俥にて驛に到り、乃ち乘車、車内はなか〳〵こんでゐたが、その窮屈のなかに在つて發車と共にわたしは眠つてしまつた。此處數日の不眠不休の爲事が祟つてゐたのである。近年少し長い旅に出ようとするとその出立前にこの忙しさを繰返さねばならぬのが癖となつてゐるのだが、そゞろになさけない氣持である。暫しの別れの富士をも見ず箱根も知らず、眼がさむれば大船驛であつた。

東京驛には菊池知勇君が出てゐてくれた。そして改札口を出ようとするとわたしを呼ぶ人がある。もとの坂本靜子さん今の石橋さんの夫君健也君であつた。其處で丸ビルで買物をするといふ妻の案内をば菊池君に頼み、わたしは石橋君に伴れられて北海炭鑛汽船會社に到り、其處の重役平田學氏に逢うた。夕張方面にて揮毫會を行ふ際、この人の紹介を持つて行けば大いに都合がよいとの注意を受けてゐたのでその紹介狀を貰ひに、同氏と緣故ある石橋君を煩はしたのであつた。老紳士平田氏は快く

この依頼を聽いて下された。

會社を出ると石橋君に別れ、通りがかりの自動車を呼んで池之端に走らした。其處の書畫材料商心正堂に用事もあり、妻たちも其處に居るかと思はれたからであつた。既に用事は足りてをり、妻たちは第二の豫定場所「あげだし」に移つてゐる事を知つた。あくせくとあけだしに駈け込むと早や既に其處には和田山蘭、越前翠村、菊池知勇、長谷川銀作の諸君が赤い顔を並べてゐた。その中に坐り込むと同時にわたしはもう酒を食ふに先立つて醉ひの發するのを覺えた。そして無闇に喋舌つた。和田君とは久し振であつた。三年目位ゐにもなるであらう。手紙では不景氣の事のみ書き合うてをるが面つき合せて逢うてみればお互ひにまだなかなかの元氣である。僅かの時間に追はれつつ且つ飲み且つ語つた。

午前十一時四十分、諸君に送られて上野驛を立つた。車内に入れば、また型のごとくうと〳〵と眠る。眠りつ覺めつ、ゆめうつゝの間に關東平野を通りぬけ、黒磯あたりから漸く心が醒めて來た。そしてこの邊、既に、秋色深きに驚いた。出たばかりの芒の穗のふくむうす紅の美しさ、草原から雜木林の下草に咲き混つてをる松蟲草の鮮かさ、折々眼につく櫻の紅葉、漸く此處は奥の國の入口にさしかかつて居る事が思はれた。

午後七時、夕闇の郡山驛に着くと天野多津雄君が車内に入つて來た。妻は同君と二三回も逢つてゐ

るのだが、わたしだけは初對面であつた。同君は三春町からこの郡山に出てこの汽車を待ち、我等と共に福島市まで行つて吳れることになつてゐたのである。二本松驛では同じく社友渡邊多智雄君がその友人を伴れて出てゐてくれた。闇の中に僅かに數語を交はして相別れた。

八時十八分福島驛着、十年振の舊社友中目野雨君、同じく十二年振だといふ鈴木默哉、齊藤巴江君等其他に迎へられてこれも十二年振に當る福島ホテルに入る。丁度明日が土地名物の競馬なのださうで宿はひどくこんでゐたが、中目君たちの世話で離室二間を占め、早速靜かな懇親會が開かれた。今夜、仲秋明月の夜に當るわけだが、樂しみ待つても終に空は晴れなかつた。十二時散會。

九月二十二日。

未明に起きて三春に歸る天野君を見送り、そのまゝ床を離れてお膳を待つ。中目君來りゆつくりと歌の話世間話をし九時乘車出發。驛前にて名物の梨を買ひ早速玩味するに成程おいしい。

仙臺近くなつた頃、汽車の右に左に見ごとな赤松の並木が見え出した。幹も枝葉もまたその一列に並んださまも誠に美しい。昨年の秋見て來た肥後阿蘇街道加藤清正の遺したといふ杉並木などを思ひ出し、これも恐らく伊達公の遺業の一つだらうと話し合ふ。宮城野の原に入つたせゐか、急に萩が多くなつて來た。花もまさかりで、汽車の風にあふられながら崖に野邊に咲き亂れてゐる。

仙臺驛に社友高橋勝衛君が出てゐた。學校の休み時間に出て來たとかで、醫科大學の制服のまゝで

あつた。五六分間話して別れる。仙臺を出て二つ三つの驛を過ぎると全く「東北」に入つたといふ感じのしたのをこの前こちらを——と云つても十二年前——通つた時に覺えたのであつたが、今度もまたさうであつた。次第に進んで一の關附近にかゝると折柄夕方の煙がこの高原の四方を取卷く山々の根がたに見え出して、そゞろに襟をかき合せられた。

花卷驛から福地房志君が同車して暮れた。淋しくてしやうのない時であつたので、大いに嬉しかつた。夕闇に中津川雫石川など昔なつかしき名の川をさし示されながら夕方六時、盛岡驛着、遊佐良雄君、細越富久子さん初め舊い社友の岡田文一、吉田安太郎の諸君が出てゐて吳れた。盛岡の町は驛から遠かつたのを覺えてゐたが、今もまたその通り、其處を自動車で走り、齋藤旅舘といふへ落着いた。小さいが、靜かな宿であつた。一浴後、膳を並べて懇談中、名前は久しい馴染の小田島孤舟君が見え、他の人も見えた。福島が十二年目と聞いて驚いたが、當然此處もまた十二年目なのである。その十二年前は菊池知勇君が全岩手縣下の歌人を糾合してゐた時代であつた。一昔前の話に花が咲きつゝ夜が更けた。

九月二十三日。

朝一しきり時雨れてゐたがやがて止み、なつかしい岩手富士の裾野が雲の間から見えて來た。それこそ一昔前、菊池君の宅に滯在しながら朝晩に眺め仰いだ高原の中の孤つ山であるのである。一足先

に福地君は花巻に歸り我等は昨夜の諸君に送られて九時盛岡驛發。

驛を出るとから汽車は荒漠たる高原の中を走る。中に石川啄木によつて聞えて居る好摩が原澁民村もあるのである。昨夜誰かに注意されてゐたので氣をつけてゐると、まさしく北上川の對岸に彼啄木の碑の立つてゐるのが眼に見えた。妻にも敎へ、默禮して通りすぎた。

この前の時の記憶にもあつた樣に、この岩手山の裾野の原はおほかた柏の木の原である。昔は大木がたち並んでゐたのであらうが、今はおほく若木である。それだけに葉も廣く色も深く、いま薄紅葉に染まらうといふところであつた。木立が少し深くなれば、隨所に野葡萄の蔓がからみ、これもまたうすくれなゐに染みつゝあつた。

暫時にして人里が絶え、驛と驛との間が遠くなつた。程なく國境邊の分水嶺を越えたらしく、汽車は下り坂になつた。而して三戸驛に着く。この邊に來ると土地名物の林檎の畑が其處らに見える樣になつた。丁度今を盛りの熟れどきで、紅美しく枝垂れてゐた。山を降りつくした所が野邊地驛、この前此處を通る時は實に烈しい吹雪であつた。その中から黑マントを被つて忽然と現はれて來たのが青森から出迎へて呉れた藤野草明君であつた。その人逝いて早や七八年は經つたのであらう。久し振で見る氣持の海が、右手車窓に見え出した。

浦町驛に着くと原むつを、田浦荒波の兩君が迎へてゐてくれた。そして青森驛に降りれば藤原柯芳

老を初め高田螢汀、船水公明の諸君が立つてゐた。

やと握るその手この手のいづれみな大きからぬなき青森人よ

はこれまた十二年前この驛頭で詠んだ歌だが今でもその時の通りの顏つきなり身體つきなりでみな立つてゐた。揃つて驛を出やうとする所へ『ヤ、若山さん』と云つて人ごみからのつそりと現はれて來た人がある。これまた昔どほりの萬年新造加藤東籬君であつた。我を忘れて手を握る。藤野君のなくなつたほかに當時の人で木村横斜さんが矢張り缺けてゐた。途すがら永い間彼が編輯長をしてゐた東奥日報社に立寄つて故人を偲ぶの情の今更なるものがあつた。

加藤君はよんどころなき用事ありとてその足ですぐ汽車に乘つて五所川原へ歸り、あとは自動車で郊外の船水君の宅に赴いた。自分の好みで建てたとかいふ家で、豆畑と玉蜀黍畑の中に在り、遠く八甲田山が仰がれた。直ぐ酒になり、夜深くまで及んだ。かなり更けてから飛び込んで來たルパシカ服のたけ高い立派な青年があつた。淡谷悠藏君である。福島であれ、盛岡であれ、此處であれ、今ではなどやめてしまつた樣な人たちが昔に變らぬ友情で接して呉れることをおもふと、酒の上ばかりではない喉の熱さを感ぜざるを得なかつた。わたしは多勢の騷ぐのを眺めつゝ、ひそかに幾度か眼尻を拭うた。

九月二十四日。

午前七時の連絡船に乘る。堂々たる船である。今まではとにもかくにも曾遊の地、これからが全くわたしにとつての處女地である。心おのづからときめく。啄木の歌の思ひ出さるゝ、津輕の海は黑く重たくたひらかに凪いでゐた。心のやり場なく、一人ひそかに食堂に入つて盃を擧げむとすればにやゝ〳〵のそりと細君もあとからついて來た。

折々甲板に出て浪を見、陸を眺めたが、要するにゆうべ青森のノミスケどもにもりつぶされた形があつて、大半は眠りつゞけていつの間にやら函館に着いてゐた。苦笑しながら埠頭に降り立てばこれはまたうすら寒い雨が降つてゐた。午前十一時五十分、先づ確實に北海道の地を踏んだわけである。

昨日の午前六時から書き始めて、えんやらやつと右だけ書きました。一昨日、創作社便を書いた時には、とても書けまいとおもはれてゐたのに、とにかくこれだけでも書けて、先づよかつたといま筆を擱くところです。このあとはまた何處か途中で二三日身體を休めて書きつぐことになるでせう。紀行文とはいふもの、、これは主としてわが社友諸君へ對する手紙代りの報告書ともいふべき性質のもので、普通他の雜誌などに書くときの紀行文とは自づと違つてゐるとおもひます。讀み返す勇氣もなく、誤字脫字の補充は大悟法君にたのみます。いづれにせよ、この前の九州記の樣に尻切れとんぼにせず、拙くもおしまひまで、じんねりむつつりと書いてゆきます。北海道の自然は考へてゐたよりもつと自然であり荒涼であり複雜でありました。わたしはこれを出來るだけこくめいに、自分自身の記憶のためにだけなりと、書いておきたいとおもひます。「人」と「酒」とに攻められながらもそれらのノートだけはとつてあります。それをたよりに沼津に歸つてからも書いてゆきます。細君もせつせとノートをとつてゐます。

おばけやどやと此處を言つたが、二三日過してみるとそのおばけぶりも寧ろなつかしい。今日で五日間、他に相客といふものなく、森閑とした三十二疊に夫婦して過して來たのである。第一、天氣がよかつた。紅葉と落葉と枯木と樫鳥と啄木鳥と霜と月明との間に過して來た。けふこれより帶廣に出で一泊、明日は石狩の炭山地方に入り込み、また稼ぎの事だ。（十月廿一日午後一時途別溫泉黑田館にて）

九月二十四日。

連絡船から降りて札幌行の汽車を待つ函館驛の一時間は誠に所在ないものであつた。驛外に出て見やうには、見るからにうすら冷たい雨が降つてゐた。

『あなたもあ、いふもので我慢が出來るとい、んですがねエ』

や、おなかの空いたらしい妻が低い聲でさ、やいた。見れば驛構内の一隅に簡易食堂風の仕掛が出來てをり、大勢の人がふう〳〵息を吹きながらどんぶり物をたべてゐた。出さぬ規則らしく、其處には一本のお銚子も出てゐなかつた。

漸く汽車の出るや否や食堂に入つた。と、また例の海軍々人が入つて來た。不思議に彼とは東京以來船車に乘り合せて來た。東京から福島まで、室は違つてゐたが食堂では常に一緒になつた。そして彼はきまつて二本の麥酒を飲んだ。その二本を約三分から五分の時間に飲み干すのである。型の如く彼は二本を飲んで引上げて行つた。(十數日後、十勝あたりで見た新聞に彼の肖像が出てゐた、新たに大將になつた何とかいふ人であつた)が、わたしはさうは行かなかつた。夙くに食事を濟まして妻が車室に歸つたあと、獨り殘つてちび〳〵と盃を嘗めてゐた。『北海道に入ると急に淋しくなりますよ、あなたなんかは二人連だからまアいゝが、僕は全く泣き出したかつた』と今度東京を立つ時しみ〴〵長谷川君が言つたのであつたが、わたしは窓に倚りかゝりながらそれを思ひ出してゐた。そしてまつたく身體のまへうしろの見廻さるゝ樣な氣味のわるいうすら冷たさを感じてゐた。もつとも窓に降りかゝる荒々しい雨のせゐもあつたか知れない。兎に角、野ともつかず林ともつかぬ丘陵がうす黃に染つて雨や霧に煙り乍ら遠く起伏して居る樣が、よしそれが他處で見受くる景色と大差ないとしても何といふことなしに目新しい、親しみ難い感じを與へるのがほんとに不思議の樣であつた。

名代の大沼公園をば醉眼朦朧と見て通つた。心あてに仰いだ駒が岳は雲で見えなかつた。地圖で見るとこの邊さぞ景色のいゝ所であらうと想はれた內浦灣に沿ふ海岸線にかゝつた頃は食堂で常より量を過したせゐもあり早や他愛なく眠つてしまうてゐた。

何といふ驛であつたか、名にも氣がつかなかつたが、わたしは一人の青年に起された。社友吉岡一郎君であつた。わざ〳〵小樽から出てゐて呉れたのであつた。程なくこれもまたなにがし驛で恐しく背の高い男が入つて來て挨拶した。その頃は電燈がついてゐた。札幌の舊社友谷口波人君であつた。小樽に行くと其處には同じく千田迅一郎君が待つてゐて呉れた。共にみな初對面の人たちである。

午後九時三十分、札幌驛着。驚いたのはそとは凄じい風雨であつた。車內でも感じないではなかつたが、斯うまでだとは思はなかつた。それにも係らず、多くの人が出てゐて下された。殘念にも、お互ひに風雨に氣を呑まれて挨拶もあとやさきといふ有樣であつた。不取敢とて我等夫婦だけ俥で山形屋といふへ行つた。かねて其處にきめてあつたのださうである。

あとすぐ以前車內の三君に帝大醫科生の山縣汎君、これはまた十數年來創作社と緣故のある醫學士山下秀之助君たちその他が見えた。大いに嬉しく、引き留め〳〵夜遲くまで話した。氣の毒に、諸君の歸らるゝ頃も相變らずの時化降りであつた。

九月二十五日。

朝早く山縣汎君、程なく北海タイムス社の社會部長河合裸石氏來訪、ともに今日札幌を案内せむとのことである。談合の末午前を山縣君に午後を河合氏にお頼みすることにして先づ山縣君と植物園に向うた。

北海道行きを思ひ立つたころからこの札幌の植物園はわたしの樂しみの一つとなつてゐた。端なくも土地着早々それをみることになつたのである。自動車を降りて眼前にその森を望んだ時、そしていよ〳〵鬱然として茂つた名も知らぬ珍しい北の國のもろ〳〵の樹木の並び立つたなかに歩み入つた時わたしの心はまつたく子供の樣に躍り立つた。廣い園内にこまかに池が、堀がめぐらしてあつた。水と水との間は、多く芝生となり、芝生のなかにおもひ〳〵にいろ〳〵の樹が聳え立つて居るのである。まだ葉は青かつた。そして瑞々しく茂つてゐた。たまに老幹の曲りくねつたものもあつたが、多くは眞直ぐに伸び聳えた種類であつた。殘念なのはいまこの紀行を書きながら其處の樹木の品名を書き上ぐることの出來ない一事である。見とれてしまつて、それ〴〵の根がたに立て、ある樹木の名をノートに書きとめて來るのを忘れたのである。氣はついたが、先づそれよりは仰ぎ驚く事の方が主となつたのである。いづれあちらに問合せて來號にでもお知らせする事が出來るであらう。概して内地の樹よりは木肌は荒く、幹直く、葉が大きい。そして枝幹の色が大抵白みを帶びてゐる。

昨夜のあらしのあとで、空は寧ろ氣味のわるい藍色に冴えてゐた。そしてその中のところ〴〵に淡白い雲が早脚に走つてゐた。おもひもよらぬ雨の粒が折々空からこぼれて來た。日のさしてゐる高い梢荒々しい葉、それらに降り注ぐ雨の音はこれもまた我等にとつて珍しいものであつた。

『時雨ですゝ』

『さうです』

これも昨夜の名殘で、瑞々しい枝の折れたのが諸所に落ちてゐた。

我等三人肩を並べて歩いてゐる間をつゝと突き抜けて通り過ぎたたけ高い老紳士があつた。

『山縣君、だいぶゆつくりだつたナ』

『アッ、先生！』

山縣君が惶てゝ、何か言ひかけようとするのに返事もせず見返りもせず、何か自分で大きな聲で獨りごとを言ひながらさつさと大股に歩いて行つてしまはれた。

この植物園の中に博物館があり、その館長をして居らるる八田博士といふ札幌大學でも變り物の評判の高い老教授であるといふ。今日植物園にゆき博物館を見せて頂きたいと山縣君から博士に頼んであつたのださうだ。そしてその約束の時間が少し遲れたのださうだ。

『先生、授業時間か何かあるのに今まで僕等を待つてゝ、吳れたのでせう』

山縣君は笑ひながら言つた。それは濟まぬことをしたとわたしが狼狽へれば、なアに　そんなことを氣にする先生ではありませんよ、なんとも思つてはしませんよといふ。成程、とりやうによればかなり皮肉に聞える先刻の言葉にも厭味の調子はなかつた。いかにも氣持のいゝ、からかひ氣味の口調であつた。

およそに歩き廻り、引返してその博物館に入つた。多くこの北海道を主としての種々珍しいものが集めてあつた。これも詳記し得ぬのを悲しむ。わたしにはアイヌの製作品などが最も頭に殘つて居り妻は何月何日何處で馬を何頭倒した、何月何日人を何人喰つたと說明のつけてある大きな熊の剝製が一番眼についたさうである。そしてその後幾度となくそれらの熊を夢に見たといふ。

待たしてあつた自動車で農科大學附屬の第二農場といふに赴いた。街中ではさほどにも感じないが少し街を離れるとこの札幌といふところが如何に廣漠たる原野の中に作られた市街であるかといふ事が解る。街と野と接したところに農場は在つた。既に收穫の濟んだあとなので何も見るものはありませんがせめて牛でも見てゆきませう、とてその方の係りの人に案內を賴み、牧場の方に行つた。なるほど牛がゐる。さかんにゐる。これがホルスタインですと言はるれば自づと獨歩の『牛肉と馬鈴薯』が思ひ出され、これがゲルンジイといつて一番上等の乳のとれる種族ですと說明せられてはその一疋の値段の高價なのに驚かされた。そしていづれも實に立派な姿をしてゐるのである。

小さな燈臺かとおもはるる圓筒形の煉瓦の建物があり、建物の下に大型の荷馬車が止つて居り、荷馬車には刈りたての枯草が山の樣に積んであつた。草の山の上に一人の男が乘つて柄の長さ一間半もあるであらうフオーク樣のものでその枯草を挾んでは圓筒の上部にあいてゐる窓を眼がけて放り込む。實に巧妙なものである。一かたまりの草は圓いかたまりのまゝに飛んで行つてうまくその高窓の中に入つてしまふ。この圓筒一杯枯草を詰め込んで置けば、或種の裝置で來年の夏まで刈りたてのまの草として保存出來るのだ相である。感心しながら草の塊の飛んでゆくのを仰いでゐると酸い樣な香ばしい樣な枯草の匂が身體にしみ込むのを覺えた。

別る、時、牛乳を御馳走になつた。例のゲルンジイ君の產するところのものといふ。いかにもうまい。わたしは元來牛乳黨でないのだが、ツイ我を忘れて巨大なコップで二杯いただいた。

大急ぎで大學の構內に入つた。札幌自慢の大きな樹木が校內いつぱいに茂つてゐるのである。そのなかの一本の枝に一つの鐘が吊つてあつた。そして細い綱がついてゐて、それで授業の時間を知らすのだといふ。折しも何時であるかその鐘が鳴り出した。い、音色の鐘である。樹木の蔭、芝生の上には黑い服を着た學生たちが蟻の樣に散つてゐた。

校內の食堂で晝餐をいただいた。十人ほどの教授たち、二十人ほどの學生たちと一緒にである。中で新島博士といふが一番年長に見えた。林學部々長だとかで、樹木好きのわたしには先生のお話が非

常に難有かつた。札幌から旭川に行く途中に野幌といふ所があり其處に眞實の原始林が保存してあるから是非見てゆく様にと勸めて下された。この老博士はその夜の講演會にも翌日の歌會にも出席せられ、また二度目にわたしが札幌に出て今日小樽に立つといふ日の朝わざ〳〵訪ねて來て下され小一時間も歌の話をして行かれた。難有いことに思はざるを得なかつた。

この食堂でまたわたしは意地きたなをやつた。まだ授業中のことで、食卓には酒は出なかつた。たゞわたしの前にだけ麥酒の壜が置いてあつた。麥酒の壜といつても其處等の酒店に並んでゐるのでなく、白鶴だの櫻正だのゝ詰めてあると均しい一升壜で、これも此處自慢のサツポロ麥酒のなまが詰めてあるのである。わたしは元來ビール黨でない。ことにこの一二年殆んどビールといふものを口にしなかつた。それがその日ツイ一杯口つけたのが因果で、あまりのうまさに人前をも憚らずその大壜を殆んど獨りして空にしてしまつた。もつとも唯だ一人或る年若い醫科の敎授が矢張り好きと見えて二三杯相手をされたが、先づわたしだけであつた。

食事が終つて玄關に出ると其處には既にタイムス社の河合氏が自動車で待つて居られた。

中之島遊園地を經て圓山の札幌神社に詣で引返して豐平橋を渡り市街を走る事暫く、車は郊外に出た。かすかな傾斜の登りとはなつてゐるが道路が眞直ぐで、且つ四顧際涯のない高原の中を走ること

程なく月寒（ツキサップと讀む）の牧場に着いた。道ばたの門から事務所までの距離が約六七町はあるであらう。それこそ一直線の廣い道で、兩側には見ごとな並木が植ゑてあつた。事務所前にて車を降り、許可を得て牧場の方へ歩いた。

丁度もう夕づいたころであつた。見渡せばたゞ雜草のうら枯れた野つ原で、眼に映るものもない。うすら寒い靜けさを身に感じながら、わたしは何をしに來たのかをも忘れ、何を見るともなく、路らしいものもない枯野の草を踏みながらたゞ茫然と河合氏のあとに從うた。

『ア、ゐましたく、、あそこに』

河合氏の聲に寧ろ驚きながら、その指ざされた方へ眼を向けた。が、何が何處にゐるのだか見當がつかない。

『それ、ずつとこの野のはづれの所に黑い樣なものがかたまつてゐるでせう、あれが羊です。』

『アツ！』

わたしたちは思はず聲に出しながらその驚くべき對象に眼を凝らした。

どん栗位ゐに小さくとも、また馬鈴薯ほどの大きさにともいへるうす黑いまん丸い樣なものを其處にぶちまけた樣に、一かたまりにかたまつて、ぢつと見詰めればその一つ一つがかすかに蠢きつつ、そしてまたかたまりのまゝにも押し移りつゝ、枯野のなかをこちらに動いて來るものがあつた。

かすかな〳〵鳴き聲が聞えて來た。わたしたちは河合氏を促し、その近づくのを待ちかねてこちらから向うの方へ急いだ。

夥しい緬羊の群がいまは親しく我等の眼前に在つた。むく〳〵と石鹸の泡の樣にふくらんだ柔毛の身體、あるかないか解らない樣な短い足、それで僅かに動きながら折々それこそありなしの細い目をあげて、ほのかに澄んでメエーンと鳴く。メエーン、メエーンの聲は四邊に何一つ無い枯野の原に相次ぎ相次いで起つては消えてゆく。百二三十頭も其處にゐたであらうか、二人の青年がそれを追うてゐた。この野の何處にか斯うした羊のかたまりがまだ幾つかある筈なのださうだ。不圖見ると妻はハンケチを取り出して兩眼に押しあてゝゐた。

『馬鹿ナ、お前まで泣かなくともいゝだらう』

我等二人は笑つた。

歸りの疾驅は更に痛快であつた。と共に寒かつた。市街に入り、明治大帝御渡道の時御宿泊のためにわざ〳〵造られたといふ建物で、今は市の倶樂部となつてゐる豐平館といふへ案内せられ、手厚い夕飯をいたゞいた。

夕飯終つて河合氏に別れ、我等は時計臺といふへ急いだ。講演會の時間が迫つてゐたからである。會は既に開かれ、聽衆は堂に滿ちてゐた。そして札幌大學水產學敎授西村眞琴氏の講演『一枚の木

の葉』が始つてゐた。氏は山下秀之助君と共に今夜のわたしの講演をすけて下されたのである。氏のをばわたしは、ひととの挨拶や何かで、終に聞くを得なかつた。次いで山下君の『明治大正短歌史』があつた。これは一時間半にもわたる、そして實に充實したものであつた。最後がわたしの『歌に就いて』であつた。久し振に大勢の前に立つ事ではあり、氣を揉んだが幸に大蹉なく、小一時間もしやべつて壇を降りた。

會果て、二三の人と宿に歸り、小飮して就床、十二時に近かつた。

九月二十六日。

一二時間も眠つたかとおもはる、頃からわたしは腹具合がわるかつた。鈍痛と下痢が續いた。卽ち昨日の牛乳と麥酒の飮みすぎが出て來たのである。

午前は西村氏夫妻、山下君夫妻其他の來客で賑つた。幸に醫者にゆくほどでなく、わたしの腹痛も鎭つて呉れたのである。驚いたのは西村氏の奥さんが喜志子と同鄕、而かも小字まで同じであることであつた。それも其場で偶然に解つたことであつた。

午後一時より新善光寺といふ寺で歌會が開かれた。札幌初めての會衆の多さだとかで、加之、土地にめづらしい靜肅な緊張した歌會であつたといふ。その間、千田君、谷口君を初め小樽の吉岡君、岩見澤から出て來た太田凍影君、新琴似村から來た白水春二、渡邊欽次郎、吹田普平諸君社友たちの骨

折は一方ならぬものであつた。

歌會が終ると一たん山形屋へ引上げ、その夜から市外の藻岩館といふへ宿を移す事になつた。市内では自然來客も多く、且つ藻岩館の主人といふは千田君の知合でまだ表向きには開業してゐない程の新しい宿屋で多分相客も無からうから、との事で急にさうしたのであつた。

市街を離れ、既に暮れた坂道を登つて自動車は停つた。かなりの山の高みに藻岩館は在つた。

九月二十七日。

藻岩館の筋向うに札幌溫泉といふ立派な建物があつた。浴場の外に賣店食堂まで備はりさう盛つてはゐないらしかつたが、便利であつた。朝晩入浴が出來た。

豫想どほり、この宿屋には我等の外に客はなかつた。朝日のさす二階裏手の緣側に出て見ると、其處は直ぐ岡の傾斜となり、野葡萄の紅葉、いろ〳〵名も知らぬ雜草の花が見られた。何だか思ひがけない所へ來た樣で日向ぼつこをしてゐると、また例の時雨がやつて來た。風も出た。表二階へ引返して見ると、二三町を距てた向うにまた一つの岡が起り、その岡にはどろやなぎ、白樺、胡桃の木などの林があり、雨風を受けて白く青く靡いてゐた。この二階からは遠く札幌の市街が見下された。

午前、午後、ともに揮毫に從うた。空は晴れ、降り、曇り、一向に定まらなかつた。虹を幾度か、仰いだ。

宿の附近に鴉が非常に多かつた。朝、眼覺めてゐると板葺の屋根の上をがつさ〳〵と物凄い音をたて、歩いてゐたのもこの鴉であつた。緣先の庭では何處からくはへて來たか野葡萄の大きな房を二三羽して爭うてたべてゐた。

九月二十八日。

揮毫に費す。昨日も今日も數日來の人たちの來訪があつたが、一向に騷々しくなく、靜かに賑かに過ごすことが出來た。

九月二十九日。

昨夜々半よりまた暴風雨であつた。が、朝出立間際になつて止んだ。宿の主人と千田君とに送られ、八時五十分發の汽車で立つた。あらしのあとの石狩平野にはみづ〳〵しい日光が流れてゐた。程なく石狩川が車窓左手に見えた。「日本第一の長流」といふので小學時代からお馴染の河である。

岩見澤驛に着くと太田凍影君夫妻が迎へてゐてくれた。細君はまだ娘々した美しい人であつた。連れられて同君宅に赴く。同君宅は市街のはづれに在り、前もうしろも廣々しい畑であつた。ことに裏手の緣側から見る畑には玉蜀黍と大豆とがいちめんにうち續いて、暖い日を浴びてゐた。久し振に見る明るい景色であつた。

午後一時より太田君の勤むる岩見澤中學校にて講演會が開かれた。歌の面白さと歌を柔弱なものと

思うてはいけないといふことを語つた。會終り校長室での座談中、偶然にも此處の校長江原玄次郎氏がわたしの中學時代の校長で、わたしに西行法師や香川景樹を敎へ朧ろげながら初めて歌の道を示して呉れた山崎庚午太郎先生と中學時代が同級であつた事を聞き、なつかしい思ひをした。

夜、空知會館といふにて歌會が開かれた。札幌よりわざ〳〵谷口、千田の兩君來援、また賑かな會であつた。當地の社友、田邊冬影君、廣瀨すわ子さん、及び舊い社友である西丘はくあ君等に逢うた。歸りの自動車の寒さ、そしてこの曠原のうへに氷りついてゐる樣な星空の美しさ、それから歸りついて太田君ところでとり圍んだ圍爐裡の親しさ、とりあげた杯のうまさ、何だかわたしはその日は終日昂奮してゐた。晴れて呉れたせゐであつたらう。夜も實によく眠れた。

九月三十日。

難有し、今日も快晴。

玄關を入つて直ぐの部屋にわが親しい圍爐裡はあつた。赤々とおこつた火に手をかざしてゐると、日のさしたガラス戸の向うを頻りに野菜賣がふれて通る。八百屋でなく、近在のをばさんや娘さんたちがふれて通るのである。いかにも親しい氣持でわたしは表の通りに出てそれらを見てゐたが、終に一人を呼びとめて一二の野菜を買はうとした。どうして見附けたか文子さん（凍影夫人）が飛んで來てわたしを押しのけ、わたしの言ふまゝのものを買うてくれた。日くたうもろこし、日く枝豆、日くトマト、日くまひ茸。まひたけといふ茸はわたしは信州の山奥で一度たべた事があり、味はないが齒切れのいゝものである。

午後一時より農學校にて講演會、『晴耕雨讀』を說く。終つて螟崎校長の案內にて校內を參觀した。先づ高山植物を見せて貰うた。この學校に古川氏といふ老理學士が居り高山植物通で、その人の手で既に五百種からのものを採集し校內に移植してあるのである。この說明は古川氏自身して下された。殆んど眼に見えぬ樣な微細なものもあり鑛物化した樣な異樣なものもあつた。三分一位ゐを見るうちにわたしの心はまた昂奮してゐた。そしてその心のうちには遠い遙かな何處かの山のいたゞきの景色や匂ひが漂うてゐた。斯ういふもの、何でもないと見れば何でもないが、少し立ち入つて見たり考へたりすると實に不思議な力を其處に感ずるものである。

幾つかの標本室には北海道產の農產物、農具其他が滿してあつた。中で可笑しい樣だが妙に炭火を熾すことに興味を持つわたしには何の木からはこの炭、何の木からはこの炭また何といふ燒きかたでは斯んな炭が出來るといふ風に陳列してあるのが甚だ面白かつた。

そとに出ては牛や馬や羊の小舍、牧場、乳搾り場等を見、最後に畑に入つた。樹木林が見たかつたが、あまり長くなつたので辭して太田君所に歸つた。單なる農學校ではありながら矢張り北海道式に大掛りなものだと思うた。

歸りの野路にも日光は鮮かに落ちてゐた。やゝ夕づいた西の空に樽前火山の煙がくつきりと眺められ、連れ立つた太田君すらまだ氣のつかなかつたといふ雪が夕張山の頂上を白く染めてゐた。ぶらぶらと歸りついた所へ農學校の小使が偉大なものを擔ぎ込んだ。まさかり南瓜といふ鉞でなくてはわれないといふ固さを持つた巨大なものである。

夜は田邊君來り、三人爐を圍んで遲くまで歌話に耽つた。

十月一日。

朝、冴えた寒さであつた。獨り岩見澤神社に詣で、附近を散歩した。近くに牧場でもあるか、牛や馬を引いて通る人が多かつた。この朝、夕張山とは反對の北のかたの空に雪をいたゞいてゐる山を見出でた。歸つて訊くと增毛山だといふ。斯うして一つ〳〵この國の山は白くなつてゆくのである。

札幌の谷口君が佐久間信吉君といふを同伴して來てくれた。この五十歳あまりの佐久間君には夕張から空知附近の炭山地方で催すべき揮毫會の世話を賴んであるのであつた。谷口君にもいろ〳〵と世話になつた。札幌にゐた四五日間、同君方には危篤の病人あり、終にわたしの立つ前夜永眠せられたといふ樣な場合にも係らず、それを秘しながら實にこまぐ〳〵とわたしたちの面倒を見て呉れたのであつた。

晝かけて雨降り、次第に惡くなつた。其雨を聞きながら揮毫。終つて北海タイムス岩見澤支局の名

島氏を訪ひ、轉じて停車場前の廣瀬すわ子さん方を訪うて、馳走になつた。この頃雨は土砂降りとなつてゐた。

十月二日。

夜が明けても降り且つ吹いてゐた。その中を出立、太田君たちはヅイ二三ケ月前に結婚したばかりであつた。太田君は直ぐ手紙を寄せて、自分等は斯うした庭を作つた。其處はわたしたちの北海道行がきまつた。同君は直ぐ手紙を寄せて、自分等は斯うした狹い家に住んでゐるがどうかしてあなたゝちをお泊めしたい、斯んな家にでも來て呉れるかと言つて來た。喜んで厄介になりたいとわたしは返事した。そして愈々來て見ると一間ふえて三室の家となつて居た。わざ〳〵わたしたちのために家を借りかへてゐてくれたのだ。

汽車は概ね石狩川に沿うて石狩平原の中を走るのであるが、雨風のせゐか、いかにも遠近の眺めが荒涼として感ぜられた。車窓から見ゆるほどの山には殆んど樹木といふものがなかつた。あるにまかせて伐り拂うたゝめもあらう。また、ろくに作りもしないでゐながら畑にするとてどん〳〵燒き拂うたゝめもあらう。その燒き拂うた跡の木の株がみな黑い杭の樣になつて立ち散らばつてゐるのである。それがいかにも寂寥のおもひをそゝる。山の姿もまた內地、といふうちにも關東以西の山と違つていかにもおほまかである。山の形に變化、うまみといふものなく、間の拔けた姿で波浪の樣にうねりつ

づいてゐるのである。そしてそれらがみな裸體となつて雨風にさらされてゐる。

深川驛を過ぎて程なく今までの平原が石狩川を挟んだまゝ、急に迫つて思ひかけぬ深い峽間を作つてゐるのを見た。有名な神居古潭である。岩を嚙む溪流とそれをさしはさむ斷崖と森林、久し振に見る景色であつた。

晝近く旭川驛着、多勢の人に迎へられたが先づその中に心あてにして來た齋藤瀏大佐の軍服姿を見出した。巨軀に參謀の金モールがよく榮えた。同氏の紹介で酒井廣治君と挨拶した。同君には例の揮毫會のことでひどく世話になつてゐたのである。其處へ、やァ若山君、と云つて出て來た一人があつた。十二三年も前、わたしが小石川の大塚窪町にゐた頃親しくしてゐた榎本繁君であつた。

用意してあつた自動車で旭川の市街を横切り、第七師團の兵營のある郊外に向うた。そして齋藤氏の宅に入つた。夫人や令孃とゆつくり挨拶してをるひまもなく、酒宴が開かれた。そして、ずつと夜まで續いた。

十月三日。

朝、齋藤氏とお孃さんとに誘はれて附近の岡、春光臺といふへ散歩した。陸軍の官舍地を抜けると北海道でよくいふやちに出た。やちとは荒蕪な沼澤地の事である。蒲や雜草の密生してゐる中におもひもかけぬ酸漿の野生が幾つとなく熟れてゐた。

截然たる角度で春光臺の大きな丘陵はそのやちから起つてゐた。朝露の深い徑を登つて行けば其處にはまた驚くべき曠野が開けてゐた。丘陵といふより確に曠野である。高原である。その高原の一部分はまた見ごとな柏の木の林となつてゐた。柏といへばわれ等は先づ庭木としてのそれを聯想しやすいが、どうして〳〵、一抱へ二抱への巨大な幹が廣いゆたかな葉を茂らせて見る限りに立ち並んでゐるのである。密ならず疎ならず、並び立つた姿は實に靜かでゆゝしかつた。此處はすべて陸軍用地であるといふ。

臺の端に立つと、旭川の市街が隈なく見えた。朝霧がうすくその上に流れ、何ともつかぬ雜音がその中にあつた。また、此處からは遠く大雪山の連山を展望する事が出來るのだざうだが、その日は曇つてゐて駄目であつた。

五人は柏の林のなかへ隨分と深く入つて行つた。一帶に平かだが、ところ〴〵におほらかな窪地があつた。其處には柏の代りに種々の灌木が茂り、白膠木の紅葉が美しかつた。それにもまして眼にたつのは野葡萄の紅葉であつた。野葡萄の葉といつても、先づ團扇に似た廣さを持つてゐるのである。或る窪地からひよつこりと一人の老婆が籠を負うて這ひ出て來た。見れば野葡萄の黒紫のみづ〳〵しいのを入れて居る。十錢銀貨を出して所望すると、五人の手に分けてなほ餘る程であつた。

野は一帶に霜どけの濕りを帶びてゐた。そして柏の枯葉が落ち散り、落葉の間にはそのどん栗の愛

らしいのが散つてゐた。どん栗の落つる音は、われらが歩いてゐる間にも斷えず聞えてゐた。落葉の上にも落ち、熊笹のうへにも落ちた。すべてがいかにも靜かなのでお互ひにあまりものも言はず、たゞむき〳〵にひつそりと歩いてゐた。ひとつは道のわるいせゐもあつた。その間にお孃さんの史子さんがお父さん似の身體をいかにもしなやかにしこなしてぬかるみを避けながら落葉や枯草の間をぴよい〳〵ぴよい〳〵と跳んで歩かるゝ姿が何とも言へず優しく美しかつた。

枯野原霜どけみちを行く時し君が手のふり美
しきかな

午後一時より旭川市商業會議所にての講演會に出席、途中、この附近に殘つてゐるアイヌ部落に廻つて重な家などを見せて貰つた。話に聞いてゐた熊祭に使ふ熊の仔の飼はれてゐるのなどあはれであつた。今日は齋藤大佐が前座をつとめて下された。今日の聽衆は年輩の人が半を占め、婦人も多かつた。會場から直ぐ酒井君の邸に案内せられ、立派な座敷で夕飯をいたゞいた。そして其處より公園内頓宮社務所なる歌會に出席。廊下に立つ程の出席者であつた。汽車で二三時間もかゝる所から出て來た人もあつたといふ。

會果てゝ後、十數人の人は一松といふ旗亭に移つて杯を擧ぐることになり、旭川自慢の美人たちも數名座に並んだ。悉く醉ひつぶれたわたしや太田君が自動車の中に擔ぎ込まれたは午前の二時ごろであつたであらう。

その深夜の自動車が素敵であつた。その夜は土地にも珍しいといふ深い霧で、市街を離れて師團部落に入ると、平常通ひ馴れてゐる運轉手にも方角が解らなくなつてしまつた。わたしたちもわざ〳〵車から降りて見た。それこそ鼻をつまゝれても解らぬ深さであつた。

十月四日。

眠るの飲むのと我儘を言ひながら午前午後と揮毫を續けた。太田凍影君、今日岩見澤に歸る。夜、史子さんの友達が二人見え、歌の話をする。

十月五日。

朝、わたし一人早く眼が覺めた。こつそり玄關をあけ、未練の殘つてゐる春光臺に出かけた。朝闇の殘つてゐる草原には蟋蟀の聲が澄んで、親愛なる柏の木の梢には淡い霧が迷うてゐた。めづらしく歌ごころが湧いて二首三首と作つて歩いてゐるうちに、霧晴れ、日光がさして來た。そして一昨日見ることの出來なかつた大雪山の大山塊が巍然として旭川平野の向うに見えて來た。思はずも頭を下げたい位ゐの嚴かさが、その立ち並んだ高山のいたゞきからいたゞきかけて漂うてゐた。ましてや數日前に降つたであらう新雪がそのいづれにも輝いてゐるのであつた。

午前、午後、また揮毫。何彼と忙しく、床屋に行つてる暇がない。奥さんが師團の理髮師を呼んで

下さる。もう電燈のついた史子さんの部屋で約五分間で彼はわたしの頭を坊主にして行つた。夕餉の時、二三人の來客と一緒に頂いたのであつたが、客歸り去つた後、主人とわたしとは改めてまた二三時間も盃を戰はせた。

夜、あらしめいて風吹き荒ぶ。

十月六日。

今朝もわたしだけ早く、また例の岡の上へ出かけて行つた。が、不幸にも登りつくと直ぐ時雨がやつて來た。傘の用意なく、それに北海道の時雨は變化が烈しいので恐しく、澁々と歸る。門前に辛夷の老木あり、昨夜のあらしにすつかり葉を拂つてゐた。溜つた落葉の美しさは踏むに惜しい樣であつた。歌二三首出來る。

殘つてゐた揮毫を片附け、果して本降りとなつて來た雨の中を出立。初對面であり、年長者であり、地位のある人の宅に押しかけて來て散々我儘を働いて、サテ出立となると流石に恐縮せざるを得なかつた。謹んで奥さんたちの前に頭を下げた。

驛にはまた澤山の人たちが出てゐて下さつた。中で齋藤氏と酒井君は深川驛まで見送らうとて、同車。けふはこの雨と、三四日のうちにめつきり深くなつたもろ〳〵の木の紅葉とで神居古潭の眺めがひとしほであつた。先日見て通つた時も面白い景色とは思うたが、何だか其處に落ちつきの無いのが

感ぜられた、乾いてゐた。

深川驛下車、醫師にてみやびをなる鬼川俊藏君に迎へられて同君方に到る。既に用意が出來てゐて早速お膳が出た。同君も酒を愛する人である。

頻りに留められ、留まりたくもあつたのだが打合せがしてあつたので興醋はなる三人を殘し、夫婦して增毛行の汽車に乘る。わたしたちの汽車に乘る時に土砂降りでないことはない。

乘車と共にわたしは眠つた。二時間も眠つたか、恐しい寒さに眼が覺めた。妻に訊くと彼女も急にそれを感じたのださうだ。あとで聞くとこれは丁度石狩と天鹽との國境の山を越えた所であつたらしい。峠下といふ驛のあたりから汽車のガラス窓が折々烈しい音を立て始めた。霰が吹きつくるのである。

夜、九時、增毛驛着、雨は弱くなつてゐたが吹きつくる風の冷たさ痛さ。今泉辰之助君が其處に待つてゐて呉れた。同君とも初對面であり、別に社友關係も無いのだが、非常に親切に久しい前から我等を待つてゐてくれたのである。伴はれて岡の上なる增毛醫院といふに赴く。其處の院長今川六郎君といふが歌好きで、かねて今泉君とさうする樣に打合せてあつたのださうだ。

別しても其夜のわたしは饒舌で、一人飲み一人しやべつた。更けて就寢、屋を撼かす風である。そして折々凄じい響をたて、霰が降つて來た。岡の眞下に狂つてゐるであらう怒濤の音も終夜枕を襲う

てゐた。

十月七日。

診察室から見る眼下の增毛の海は一面に怒濤の渦となつてゐた。風相變らず荒び、雨狂ひ、霰飛び、身ぶるひの出る寒さである。氣の毒にも今日この增毛港には築港起工祝賀會が開かれるので、數日前から土地を擧げて用意してゐたのであるといふ。その式場が同じく診察室から見下されたが、天幕も旗も提灯も無慘に風に弄ばれてゐるのみであつた。

やがて小學生徒の旗行列が醫院の前を通つた。俄かの寒さにみな頭から何やらの布をすつぽりと被つてゐるので、さながら達磨の行列を見る樣にも思はれた。可哀想に、それでもせつせと祝賀の歌を歌うて行つた。

その小學の若い先生である今泉君は非常に忙しいわけなのだが、間を見ては飛んで來て呉れた。そして、一寸でもいゝから其處の林檎畑を見に行きませうといふ。前から同君は增毛の林檎が自慢であつた。北海道で林檎といへば誰もが余市を言ふが增毛のものも決して余市に劣らない、と。今が熟れどきであるその林檎畑を見たい心はいつぱいだが、何しろこの風ではわたしには歩く力が無い。諦めてそれをいふと、彼はとつかは身をかへして黒マントを尾に引きながら何處かへ飛んで行つた。そして抱へて來たのが、その林檎であつた。風で、畑には落ち溜つてゐるといふ。

見ごとなる林檎よ、氷の樣なその感觸よ、わたしはストーブの側に坐りながら飽くなくそれを弄び樂しんだ。

書過ぎから歌會が醫院内の一室で行はれた。會者は祝賀會と天氣とで少なかつたが、思ひがけない十人あまりの娘さんたちが中に加つてゐた。歌會の間にも霰はさんざと降つてゐた。ガラス窓を透して見る庭先の落葉松は忽ちにして白くなり忽ちにして黄いろくなつた。黄色はまだ落ちやらぬその枯葉である。

夕方、出立。今泉君は深川近くの驛まで見送らうとして同車した。增毛、留萌の海が直ちに車窓の左にあつた。相變らずの怒濤狂瀾である。暫く見てゐると自づと眼の險しくなるのを覺えた。單に浪が荒れてゐるからさうであるのみでなく、海岸そのものが既に荒涼としてゐるのである。海に沿うた岡にも突き出た崎にも樹木といふものがない。たゞ狐色に枯れ伏した茅萱風のものがあるばかりである。而して浪に接する部分はその茅萱の生えた土地すらがきれいに剝脫されてあらはな岩面となつてゐるのである。この狐色の岡と灰鼠色の砂丘とに圍まれて危く埋沒しさうに見えてゐた留萌の町の印象は、永くわたしの記憶にあるであらう。留萌も增毛も、昔は北海道一流の海港であつたといふ。

石狩沼田驛で今泉君は降りた。すれ違ひの汽車に乘つてまた增毛まで歸るのだ。吹きさらしの歩廊に立つてゐた丈高い黒マントの姿が眼に浮ぶ。

深川驛下車、鬼川君方に行き、一昨日の讌みを晴らすべく早速爐邊にて一杯頂く事になる。そのろりばたにはまた見ごとな栗がゆでてあつた。

充分に醉ひ、サテ眠り度いといふと、北海道に來て追分を聞かないといふ話はないとて遮二無二引つ立てられ、江差屋といふ料理屋に赴き、道内でも一二の名人と呼ばるゝ其處の老主婦の追分を聽くことになる。風邪氣味なりとて最初固辭してゐたのでその高弟園八姐さんに先づ唄つて貰つてゐるうち小母さんも終に浮れて唄ひ出す。折柄降り出した寒雨のなかにこの絶ゆるが如くにして絶えず高まるが如くにして沈みゆく海の唄を聽いてゐると心身自づとその調べの裡に在るのを覺えた。而してわたしは昨年福岡で聽いた老妓お秀の博多節をも併せて思ひ浮べてゐた。

十月八日。

鬼川醫院の前に鍛冶屋があるらしく、夜の明けがたから、テンカーン、テンカーンと鎚の音が冴えてゐた。昨夜料理屋から歸つて寢たのが一時か二時、もう少し眠らうと力めても一度眼が覺めるとなかなか眠れない癖である。終に妻をも搖り起し、廊下で出會うた看護婦さんに水を汲んで貰つて顏を洗ひ、朝寒に襟を縮めながら兩人して散歩に出た。

深川町は出來てからまだ舊くないらしく、いかにも新開地らしい新しさ粗々しさがあつた。そして少し歩くとどの方角でも直ぐ町はづれに出られた。出た所には必ずまた例のやち地帶があり、蒲やガ

ブラが茂つてゐた。そしてその町はづれからは町に不似合な大きな道路が野方途もない曠野の果てに向つて一直線に走つてゐるのである。あちこちと歩いてゐると、また、はらはらと降つて來た。

立ちがけの草鞋酒がまた長かつた。本降りらしい音をたてゝ來た雨の窓邊の圍爐裡に火を山の樣におこしてうつとりと飲んでゐると何やら窓さきをふれて通る物賣がある。訊けば澤梨といふものだといふ。珍しく、呼びとめて買つて貰ふ。蔓の樣になつた枝にはどん栗の粒ほどの大きさの眞紅な實が澤山ついてゐた。

呼賣の澤梨を買ふや草鞋酒

呼んであつた寫眞師の前に立つひまもなく汽車の汽笛に驚いて飛び出し、辛うじて乘車、しみ〴〵と別れの言葉をも述べないで深川町を立つた。三度び神居古潭を見、なつかしき旭川市を過ぎ、例によつて燒け殘りの黒い木の株の打ち續いてゐる平野と裸山との間を走つて、うと〳〵と眠りつ覺めつしながらやがて乘換驛の名寄（なよろと讀む）に着いた。

午後二時であつた。寒い雨に濡れた停車場に二三十分待たねばならなかつた。何とも言へぬ心細さが身體のそちこちから浸み出て來た。それとなく妻の方を見ると、今にも泣き出しさうな顏をして立つてゐる。其處でわたしは急に豫定外の其處に一晩だけ泊る事に決心した。今日行く筈になつてゐる紋別の人たちには氣の毒だが、何ともう自由のきかない其場の氣持であつた。

あわて、構外に出で、紋別宛の電報を打ち驛員に訊いて我等の辿り着いた宿屋は富士屋といふので
あつた。斯うした名前すらがなつかしかつた。驛から少し離れた町中に在つた。そして女中番頭にけ
げんな顔をされながら何はおいても先づ床をのべて貰ふほかはなかつた。
あぶらがきれるとわたし自ら言つてゐるが、體内から酒氣が斷れるとわたしはもう殆んど全ての機
能を自分の身體から失ふといふ樣な狀態にあつた。その時が來ればどんなに勞れて眠つてゐても息苦
しくて眼が覺めた。その日もその通りであつた。かれこれ一時間も眠つたかとおもふと、何やらの惡夢
のうちに眼がさめた。眼がさめると盜汗が出て、床にゐられないのも癖である。ひそかに起き上つた
が、サテぼんやりと冷たい部屋に坐つてゐるのも苦痛である。降つてはゐるが、ぶら〳〵と町を歩い
て來ようと外套を着てゐると、眠つてゐるとのみ思うてゐた妻が聲をかけた。足駄を買うて來て吳れ、
といふのである。
なよろといふ地名からか、斯うして偶然降り立つたせゐか、凍み氷る手に宿の番傘をかざしながら、
わたしはたいへん親しい氣持でこの北海道式の幅廣い街路をあちこちと歩いた。そして爪皮が臺に釘
づけになつてゐる足駄はもとより、いりもしないやうな小さなものを二つ三つと買ひ込んだりした。
中には茹菜もあつた。チヨコレートクリームもあつた。おいしさうな干魚を買はうと思うたが火鉢で
燒いて宿の女中に嫌はるゝでもあるまいと我慢した。あとで考へるとこれは我々には珍しい魚のはた

はたであつたらしい。
入浴、食事、共に近頃にないしめやかなものであつた。風呂番の爺さんが誠によき爺さんで、斯う
した人をば何といふことなく忘れかねて、ともするとよく夢になど見るものであると夫婦して語り合
うた。

十月九日。

あてにしてゐなかつた好晴のうちに午前七時元氣よく名寄を立つ。例の曠野を走ること暫く、汽車
は今までにない山岳地帶にかゝつて行つた。そして一の橋驛あたりからは昔偲ばるゝ深山の老いさら
ばうた森の中に入つた。立木はさう茂くはないが、白々と骨を露はして立つてゐる立枯の木、または
横に倒れて朽ちてゐる大きな幹が次から次と眺められその間に今を盛りの、或はまた散り殘りの滴る
ばかりに紅葉したとり〴〵の樹木が見られた。あちこちと眺め廻して自づと眼の向けらるゝ山のいた
だきは左程遠くはなく、其處には鮮かに積み渡した白雪が仰がれた。この邊天鹽と北見の國境をなす
山らしかつた。山を登る時、山を下る時汽車のいづれの側にかいかにもこの山らしい溪谷も見られた
のであつた。同じく山中の驛、上興部（かみおこつべ）にはやまべ鮎といふを賣つてゐた。珍しくてあ
わて、買つた。やまべの魚には如何にも其處の溪をおもはす色香があつたが、飯粒はみなぼろ〳〵に
氷つたが如くであつた。

北見地に入り、斷えつ續きつする林の間を走つて、暫て興部から海に沿ふ樣になつた。これ生來初めて見るオホーツクの海である。空の一隅には密雲を藏しながら、日はよく照つてゐた。渚滑（しよこつ）驛あたりの海の色はこの日の光のためにわけても色濃く、寧ろ黑く、そして油のごとくにとろりと凪いで靜かに廣々と打ち開けてゐた。平かに低い濱が續いた。其處に密生する何やらの丈低い植物に、眞紅な實をつけてゐるものがあつた。はまなすかナ、とふつと思うたのであつたが、あとで聞くとまさしくさうであつた。これも初めて見るものであつた。

十一時、紋別着。社友橋本白潮君が多くの人を連れて迎へてゐて吳れた。中に舊社友松田靑志君もあつた。共に驛前の福井館といふに赴く。二階の我等の部屋の前の廊下からは間近に紺碧の海が見渡された。

二三の人と晝食を共にし、一休みして直ぐに揮毫に從うた。そして散步するひまもなく夕食、やがて報恩寺といふ寺で歌會が開かれた。夜は寒く凪いで、場所は寺の一室なり、集うた人の顏にも緊張があつた。彼一語我一語、語りかはす話にも身が入つて、いかにも北の邊土に於ける歌會らしい印象を得て、十時過ぎ、寺を出た。

宿屋で夕食の時、小川丑麿君といふに逢うた。この小川君が舊い創作社に在つて獨特の歌境を開いてゐながら今は何かに韜晦してゐる小川水明君の弟さんであると聞いて大いに驚いた。そしてその兄

さんに逢ひ得た樣な舊情を覺えたのであつた。當時彼はこの近海で取れ、主として米國に輸出してゐたたらば蟹の鑵詰を造る會社に勤めてゐたが、最近その會社も立ち行かなくなつて解散したゝめ、また〳〵流浪の身となつた、近く根室の方にでも行つて見ようと思うてゐますと語つてゐた。その小川君と我等夫婦とは會衆より一足先に寺を出て、あとから來る筈の橋本君等世話役の人を待つてゐた。濤の音が聞えてゐたかどうかを記憶せぬが、いかにも海近い所をおもはするしつとりした外氣で、そして實に深い闇であつた。三分か五分、立話をしてゐる所へ例の荒い時雨がばら〳〵と落ちて來た。失禮ですが走つて下さいといふ小川君について、深川や名寄と同じく手ざはり荒い此處の町の乏しい軒燈をたよりに我等も走つた。そして電燈や、明るく、少しばかりの植込をしつらへたとある門口へ走り着いた。三吉亭といふ料理屋であつた。

オヤ〳〵、此處は昨夜我々が解散式を擧げた部屋ですよと笑うて坐る小川君に添うて廣い部屋の一隅の火鉢を圍んだ。其處へ同じく濡れながら橋本君たちが駈け込んで來た。此處も先刻の歌會と同樣に、藝妓などもほんのお酌をするにとゞめた極めて地味な、そして打寬いだ席であつた。

十月十日。

因果と早く眼が覺める。

獨り二階の廊下に立つて見るともなく四邊を見てゐると、宿屋とすぢかひになつた向う側の小家の

軒下に一人の男がゐて、あかえの小さい様な魚に繩を通し、幾つとなく一本の竿にかけて乾してゐるのが見えた。小家のうしろはやちはんの木の茂みで、大きな木の赤茶けた枝葉を吹きちぎるばかりに烈しい風が吹いてゐた。その木立の左手横に、海が見えた。昨日には似もやらず眞白な浪頭が幾重となく押し寄せてゐた。

朝飯の膳に一杯始めてゐる所へそゝくさと階子段を飛び上つて來た小川君の手に一莖の花があつた。莖には見るからにとげ〳〵しいとげがあり、花はたゞ一輪、その莖から出て同じくとげ〳〵しい幾つかの小枝の先に露を含んだ眞紅の色に咲いてゐた。其處等の濱中を駈け廻つて漸くこの一輪だけを見附けて來たといふはまなすの花であつた。夙くに花期を過ぎ、實ならば幾つもあるが花はもう無いのださうだ。色も深く、匂も強い、北の濱邊の花であつた。

十一時出立、橋本白潮君は遠輕まで見送らむとて同車した。朝曇次第に晴れ、浪は白いが昨日どほりの海がまた暫く車窓の左にあつた。窓から射す日光の明るいなかで初めて橋本君とゆつくり話す事が出來た。昨日來、いろ〳〵の奔走で落着いて顏を合すひまもなかつたのである。背恰好から話しぶりなど、そゞろに增毛の今泉君を思ひ出させた。

小向沼あたりから汽車は海岸を離れてまた野原の間を走つた。遠輕（えんがる）も野と林の間にあつた。其處の驛に本間源治君が友人を連れて出てゐた。同君は神原克重君の網走中學にゐたころ歌の上

で親しくしてゐた人であつた。橋本君とも相識であつた。僅かに挨拶をかはしたのみで、同君とも橋本君とも其處で別れた。代つて橋本君の友人西野由夫君といふ青年が野付牛までとて同車した。

野付牛（のつけうし）の乘換驛では二時間餘り待たねばならぬ事を氣にしながら西野君と共に改札口を出ると意外にも其處に同地中學教師東茂三、桐原進逸の兩君、上杉醫學士夫人以久子さんたちが待受けてをられた。どうして斯う連絡がとつてあるかを審かりながら導かれて驛前の待合旅館に入つた。更に意外であつたのは桐原君が信州の出で、喜志子と遠い親戚に當つてゐる事であつた。前に札幌で西村夫人の事あり、世は廣くして狹しとてとりあへず一杯を擧げながら歡談した。三君は頻りに野付牛一泊を勸められたが、どうにも時間の都合つかず、たつて辭して時間どほりに網走行の汽車に乘つた。さればとて東、桐原の兩君は其處まで同車することになり、上杉夫人西野君とは其處で別れた。停車場前から起つた例の大きな街路は輕い傾斜を帶びた登りとなつて遠く野の中に入つてゐる。その末に野付牛の市街はあるのださうだ。新進の市街として活氣に滿ちてゐるといふ。

夕方の日ざしが四邊の野に殘つてゐた。どうしたものかこの邊の野の枯草は眼にたつて赤かつた。狐色などの寂びたものでなく、美しい野の色であつた。それも暫し、めつきりと寒い夕闇が汽車を包んでしまつた。深い林の中を邊る樣な氣配をも感じたが、よく見えなかつた。兩君に惡いと思ひつゝわたしは外套の襟を立てゝうと〳〵と眠り始めた。

妻に起されて眼を覺すと網走から迎ひに來たといふ原田泰、最乘孝顯、砂澤浪二の三君がわたしの前に立つて居た。女滿別といふ驛であつた。八時、網走驛着、其處には網走中學校長渡邊繁藏氏が出て居られた。自動車または徒歩にて一同松井旅館といふに向つた。

風呂から上ると膳が並んでゐた。直ぐ眠らして貰ふつもりであつたのだが、一つ二つと話してゆくうちに非常に賑かな席になつた。元來この網走にはわが社の同人神原克重君が昨年まで土地の中學の敎師としてゐたので、網走といふ名前からして既に久しい馴染であり、渡邊校長を初め他の諸君も神原君とは親しい間柄であつたので、自然わたしまでが初めての土地の樣な氣がせず打ち解け得たのであつたらう。話ははずんで十二時に及んだ。就中、渡邊氏のアイヌ、アイヌ語のことなど面白かつた。

十月十一日。

眼が覺めると枕もとのガラス戸にこつ〳〵といふ音がする。見れば鴨ほどの大きさで更に羽根の色の美しい鳥が戸の棧にとまつて、盛んにこつ〳〵とつゝいてゐるのである。大いに面白く、息をころして見つめてゐるとやがて其處の庭樹の枝に移つた。わたしも起き出てなほ暫く見てゐると、飛び去つた。青啄木鳥（あをげら）であつたらうといふことであつた。

早朝、野付牛の兩君は歸り去り、引き違ひに渡邊氏初め昨夜の三君が自動車で訪ねて見えた。そして誘はれて三眺山に向つた。

市街を離れると流の緩やかな河に沿うた。網走湖とオホーツク海とを繋ぐあばしり河である。對岸はやゝ嶮しき山となり、山は深い森となつてゐた。森は半ば紅葉し、半ば青かつた。此處二三日で全山燃ゆる樣にならうといふことであつた。車上、一時は重罪犯人をのみ收むるので名の聞えた網走監獄の對岸の河岸に寂然と建つてゐるのを見た。

走ること里餘、三眺山の麓に着き、立派な山路を徒歩して登つた。山は樹深く、路の兩側にも我等に珍しいものが數多あつた。幸ひ同行の原田君が山林署のお役人で樹木に詳しく、いろ〳〵と敎へて貰ふ事が出來た。曰く、とゞまつ、なゝかまど、みづき、おへうにれ（又の名、あつし）、めいげつかへで、など。

なるほど頂上の眺めはよかつた。眼下にあばしり湖あり、やゝ右手にのとろ湖あり。いづれも深く湛へて大きな湖である。ことにあばしり湖の中には呼人半島といふが浮き出で半島全部が密林であるため、さながら大きな影が水上に浮んでゐる樣であつた。而してその水邊一帶は鮮かに紅葉し中どころはまだ黑かつた。また遠く雌阿寒岳、藻琴山の高山が雲の間に望まれ、振返ればオホーツクの海が見渡された。

型のごとく時雨がやつて來た。頂上に設けられた亭に入り、その過ぐるを待つ。亭の周圍はおほか

た明月楓の木立で、その紅葉の美しさは時雨のために一層であつた。頂上の設備といひ、山道といひ、何年か前の網走監獄の某典獄が囚人を使役して造らしめたものだといふ。

下山し、待たせおきし自動車にて町の高等女學校に赴き、講演した。その歸途、あばしり河口に積まれたあきあぢの山を見た。秋味と書くなるべく、鮭の事である。味もよく、とれる事も今が盛りだといふ。腹部美しき赤を含み、かすかに青みを帶んで背に至つて黑く、大きさ三尺前後のものが、水邊に山と積まてゐる有樣は鮮かにもまた壯んなものであつた。鮭といへばこち〳〵と干乾び埃まみれに吊り下げられたものとのみ思ひ易きわたし達にとつては確かに大きな驚きであつた。

勞れたりとて一人別れて妻は宿屋に歸り、我等は町を横切つて桂が岡といふへ登つた。此處からは網走の町が一目に見渡された。北口が海に向つて開いてゐるほかは、三方すべて斯うした岡に取り圍まれた港町である。三方の岡はそれ〴〵に木深くてみなうすらかに紅葉してゐた。その岡の具合か、町がいかにも落ちついて、暖かくまた穩かに見えた。そしてその中に靜かな寂びがあつた。『海はあるけれど、何となく京都が思ひ出されますね』とわたしが言うと、渡邊氏は大いに驚いて『イヤ、前にもさう言つた人があります、さう似てゐますかね』と言ふ。すると他の一人は、『先刻自動車で河を挾んで見た山の景色は嵐山に似てゐると言はれてゐますが、さうですか』といふ問である。それはともかく、この北の果ての古びた漁港と日本の舊都と何處か似てゐるところなど面白く思はれた。なほ、こ

の岡の到る所にはアイヌのとりでの跡があるといふ。

急いで岡を下り、町なかを小走りに歩いて中學校に行つた。學校もまた小高い岡の上に在つた。此處は神原君が數年間教鞭をとつてゐた所である。默り屋の同君には初め歌の友達といふものも出來ず、たゞ獨りこの邊土に在つてオホーツク海の流氷を歌ひ、雪に埋れたわが家の家庭を歌うてゐたのである。そしてこの地になほ愛着を持ちながら老父の請から鄕里の中學に轉じて行つたのであつた。わたしたちが今度の旅に立たうとする數日前に新任地千葉縣の中學からわざ〳〵彼は沼津までやつて來て、どうか吳々も彼の中學の生徒たちによろしく傳へて吳れとの事であつた。講堂に集つて肅然と立つてゐる生徒たちの前に、いまわたしは彼のこの傳言を傳へようとするのである。そして妙に舌剛ばり胸迫るのを覺えた。

講演を終へて我等は學校の裏の高みに登つた。またもや降りだした微雨に濡れたもろこし畑の中を歩いてゐる我等を見附けた教室内の生徒の一人が、『ヤ、牧水先生が彼處を行くぞ』と叫ぶと二階も階下も、こちら向きの窓といふ窓にいつぱいに黑い頭が突き出て、わア〳〵といふ騷ぎである。わたしが帽子を振ると彼等もノートか書籍かを振り廻してこれに應じた。

岡の眞下は海であつた。そして右手に遠く斜里半島が眺められた。今日の空合で一層黑みを深めて見ゆる海のや、海岸よりの沖に二た所ほどかすかに白い波を上げてゐる所があつた。これが卽ち先刻

見て來た秋味の網のかけられた所であつたのだ。

雨、本降りとなる。神原君の住んでゐたといふ邊を通り、急坂を這ひおりて、目下築港中の工事を見、宿に歸つた。今日の行程、甚だかりそめならず、宿に歸つて直ぐ始めた揮毫の折、兩脚の痛むを覺えた。これ渡邊校長が兎に角此處で見すべき所だけは見せねば神原君に濟まずとての强行軍であつたのだ。兩者の間には餘程相容す所あつたらしく、去り行きし教師を惜むこの校長の心は何彼につけて現はれた。難有いこと、思うた。

夜、砂澤君の勤むる會社の樓上で歌會が開かれた。紋別と全く同じい感じの會であつた。中學生も數名出席してゐた。その會果て、屋外に出た時の空の輝きをわたしは忘れ得ない。空が星か、星が空か、若しくはねぢ切る樣な深い眞闇が斯う思はせたか、とにかく頭上いちめん滴る如くにきら〳〵と輝いてゐたのである。非常に嬉しくなつたわたしは諸君の先頭に立ち小躍りしながら街路を走つた。

北歸館といふ松井旅館近くの料理屋で宴會が催された。今夜はわたしは杯を見ない前から既に何やら醉心地であつたが、他もさうらしく一應酒の廻つたところで席は俄かに陽氣になつた。最乘君だかの心遣ひでわざ〳〵席に運ばれた秋味鍋を靜かに味はうといふよりも何か知ら心は先に走つてゐた。土地自慢の福壽姐さんの追分を皮切りに、甲唄ひ乙踊り部屋全體がくる〳〵と廻る樣な調子になつた。なかんづく土地の人すら初めて聞くといふ渡邊校長のガサラモサラ節に至つては全く殺人の妙

があつた。而かもなほくる〳〵と醉つてゐながらわたしの心の底にはこの家屋をかつちりと包んでゐるであらう黑光りの空、黑光りの海の輝きがあつた。寧ろそれがその夜のわたしのすべての背景をなしてゐたのかも知れなかつた。

十月十二日。

今朝は青啄木鳥はわたしのガラス戸を訪れて來なかつた。獨りひそかに起き出で、耳を刺す寒さの中を河口の方へ散歩した。何といふ鴉の多さぞや、自分の脚もとから見はじめて幾羽となく幾十となく、ともすれば幾百羽ともわからぬほどの鴉が其處に見られた。北海道の鴉は人間よりも大膽で狡猾だと謂はれてゐるさうだが、まつたく我等の臍にでも來てとまりさうな眼つきをしてゐるのである。子供はよく彼等から手に持つた菓子や果物を奪はれるといふ。いま彼等は引潮の河岸に群れて盛んに餌を爭うてをる。餌とそれを求むるものとの數量が一致せぬため、到る所に爭鬪が行はれてゐるのだ。その黑い騷がしい群を離れて靜かに河心に浮び、流れのまゝに徐ろに流れてゐる白色の鳥の一群があつた。ごめ（鷗）である。時にや、曲ることなどあるがずつと一列に連つて少しも亂るゝ事なく、次第に河口の方へ流れて行つた。

九時四十分出發、渡邊氏は折柄微恙でやすんで居られたといふ奥さんをも連れて見送りに來て下された。その他多くの人に送られてこの北の果ての港町を離れた、流氷の期節には是非もう一度やつて

來ようと思ひつゝ。原田君は役所の用をも兼ねて野付牛まで見送らうとて同車。

野付牛を離るゝと汽車は暫く平地の間を走つた。左右に田が見られた。稻は一尺ほどに伸びたまゝ穗先白々と立枯になつてゐる。或る所ではこの稻田のなかに馬が放してあつた。馬はのそ〳〵と田の中を歩き廻りながら自由に立枯の稻を喰つてゐるのである。北海道一帶に今年は不作であつたさうだがこの邊最もひどいのらしい。今迄もこれに似たあはれな稻を蟲の樣なりをして刈つてゐる百姓たちを見て來たのであつたが、馬を放つて田なかのものを貪食せしむる此處の人々の絕望ぶりは更にいたましいものに眺められた。日は珍しく晴れてゐた。遠い野末の山に輝く雪が見えた。地圖を見れば石狩岳らしかつた。

境野驛の邊から山地にかゝり、置戸驛を過ぎると二三日前に見て來た土興部附近そつくりの深山になつた。森は更に深く、紅葉あり、枯木あり、溪流あり、美しくして荒く、荒くして錆びてゐた。北見釧路の國境を成す分水嶺らしかつた。而してこの山林地帶は隨分と長く續いた。やゝ大きな河のほとりに出て下り坂を走る頃はいつの間にやら釧路をも過ぎ十勝の國に入つてゐたのだ。幾度か起したが妻は大方うと〳〵と眠つてゐた。わたしも勞れては居るが、この景色を見ぬも惜しくつまりは冷酒の壜を手から離さぬといふことになつて行つた。

本別といふ驛で軍人が多勢乘り込んで來た。師團長にその幕僚といふ一行らしかつた。第七師團の

演習が十勝平野で行はれてゐる由を聞いてゐたが今この邊でやつてゐたのだ。この分では今夜の宿など困りはせぬかと案じてゐるうち、池田着。サーベルの音に混つて我等も降りた。驛いつぱいの兵隊である。

その中に幸にも我等が社友菊池蒼村、米光澄秋、村山光二の三君を見出す事が出來た。お互ひに初對面だがお互ひの目顏がおのづからにして紹介して吳れたのである。そのほか土地の醫師で「吾妹」の同人なる中島竹雄君、帶廣町から來てゐてくれた北町夕星君などあつた。驛前には馬車が用意してあつた。いかにも古めかしいそれに搖られて例により道廣く軒低き池田の町の街路を橫ぎり、町はづれの岡の中腹なる溫泉宿淸見館といふに着いた。これみな諸君の注意深き用意によるものであつた。

溫泉宿とは云つても沸し湯であつた。が、着くと直ぐ入浴出來たは難有かつた。やれやれと手足を伸ばしてゐると家を搖する木枯の音である。いつの間にやらまた吹き出したものと見える。湯から出れば乃ち夕食、終れば乃ち歌會といふ忙しさであつたが、終に逢ふことが出來た。他に國民文學社の高津君の名を見て來たのは隨分と久しいものであつたが、天籟君もゐた。遠近に機關銃の響、家を包む木枯の音の中に、非常に呼吸の合つた歌の會となつて行つた。

十月十三日。

朝、ひよつこりと齋藤參謀長が訪ねて見えた。矢張り演習で來て居られたのだ。物凄い木枯の音を聞きながら午前揮毫。難有くもガラス戸に日の影があつた。

午後菊池君の出てゐる小學校に誘はれて行つたら何か話せとの事である。子供に歌の話でもあるまじとてこの北海道の風物とわが東海道海邊の風物との對照を先づ面白さうに話したつもりなれど諸君一向に不關焉の顏をしてゐる。あとできけばわたしの最も力を入れた梅の咲く頃桃の咲く頃の話の、梅や桃をば諸君全然知らないのださうだ。こゝの國には無いのださうだ。成程面白くない筈とて大笑ひした。

その歸路、菊池君方にて一杯御馳走になつた。夫婦に子供一人、細君は自宅で雜誌文房具を商ふといふ暮しであつた。其處を出て今度は米光君の店に寄り手布手袋などを買うた。此處は兄に妹の二人暮し、而かも二三ヶ月前に開いたといふさゝやかな洋物店であつた。

夕方宿に歸る。宿は清見が岡といふに在り、岡は全部大きな楢の木立であつた。昨夜から聞いた木枯はこの楢木立に荒ぶそれであつたのだ。今は全く凪ぎ、木はみな薄黄葉して茂つてゐた。宿の門を入らうとしてふと振返ると思ひがけない大きな景色が見られた。十勝平野が左右遙々と打開け、その末を限つて石狩境の連山が高く鋭くうち連つて聳えてゐるのである。峰の幾つかには雪があつた。そしてこれはまた思ひがけぬ夕月がその上の空にかゝつてゐた。

夜、菊池、米光、村山の三君と會食、まことに靜かな夜で珍しくも九時に寢せて貰うた。

十月十四日。

午前揮毫。十一時、書餐に招かれて中島君方に行く。少し風はあつたがけふもよき日和であつた。中島醫院には北海道に來て初めて見る泉水があつた。小さな瀧口からちよろちよろと池に落つる水の音がうら寒くもまた不思議に耳に親しかつた。締められたガラス戸の棧には赤い蜻蛉が二羽三羽とまつてゐた。中島君は鹿兒島の生れとかで、自づと九州話に落ちた。北海道生活の寂しさを彼はしみじみと語つた。

午後二時、同君に誘はれ、菊池君も加はり自動車にて町の郊外なる富士製紙のパルプ工場參觀に赴く。山積せられた木材が、割かれ、碎かれ、煮られ、洒され、終に美しい紙の素となつてゆく。順序を追うて宏大な工場の棟から棟へ見せて貰ひながらそゞろに驚嘆せざるを得なかつた。ことにわたしの感じたのは工場といへば大抵はきたないもの凄いものである樣だが此處には一切その事なく、いかにも全てが淸淨であつた。

見終つて歸らうとすれば此處の工場長宇宿氏の招待で工場の俱樂部に御馳走が用意してあつた。同氏もまた鹿兒島の人、それこれの話から同氏夫人にも座に出て貰ふと、これはこれは、紛ふかたなきわが幼な友達しなちやんであつた。しな子夫人の直ぐ上の兄さん門馬良君とはわたしは小學校から中

學まですべて同級で而かも親しい仲であつた。で、よく同君の宅に遊びにゆき、妹のしなちやんとも親しくしたのであつた。二十何年か目に斯うした所で邂逅しやうとは全く思ひもかけぬ事で、一座も共に驚き、乾盃した。

斯んな事で意外に長居をして其處を辭し、宿屋に歸り荷物を纏めて停車場にかけつけると宇宿氏夫妻は既に其處に出て居られた。惶しい裡に六時八分發車、帶廣町に向うた。途中止若驛には桑折君が出てゐてくれた。

七時、帶廣驛着、此處でもまた珍しい人に會うた。醫師神部哲郎君である。同君は沼津二瀬川の人、いま早稻田高等學院教授なる社友神部孝君の兄さんで、わたしが沼津に移つた頃はまだ沼津に居られ、いろ〳〵とお世話になつたものであつた。その後北海道に渡られたとは聞いてゐたが、この帶廣町に居らるゝ事は今度北海道に來てから知つたのであつた。夫妻して驛で待つて居られた。また社友進藤雪子さん夫妻にも其處で逢うた。その他一昨々日池田で逢つて知つてゐる北町君等に迎へられ一同して驛前の旅館北海館に入る。

帶廣町は十勝國の主都で、從つて今度の陸軍演習の中心も其處となり、北海館は司令部になつてゐた。普通ならとても入れないのだが、神部君等の世話で、辛うじて一室をあけて貰つてあつたのである。久潤や初對面やの挨拶を交して居る所へ、ひよつこり顏を出した人がある。司令部になくてかなはぬ齋藤參謀長であつた。

十月十五日。

風强けれど、晴。司令部は朝早く出立したので宿も靜かになつた。

埃のまふ中を神部君方に到り、午前より午後まで遊ぶ。歸りに床屋に寄る。

大演習のせゐもあらうが、帶廣は明るくて賑やかな市街であるらしく見えた。

十月十六日。

午前中揮毫。靜かな日で散歩したいと思うてゐる所へ雪子さん來訪、誘ふて出かけた。昨日神部君の宅で馳走になつた蕎麥がおいしかつたのでそれがし屋といふ蕎麥屋を見附け何の氣なしに入ればどうも樣子が可笑しい。考へればこれ蕎麥もあるには違ひないが、目的は別にある例のあいまい屋であつたのである。これはと驚いたが、サテ出るにも出られず、女史たちの氣づかぬを幸に簡單な食事をとることにした。斯うした家へ風變りの婦人二人を携へて入つて行つたので向うでも驚いたであらう、變な女たちが入れ替り立ち替り覗きに來た。大汗をかき、途方もなくぼられながらに早々退散。難有い事に雪子さんは終りまで氣がつかず、喜志子を相手に盛んに歌を談じ家庭を談じてゐた。

宿に歸り、また揮毫。夜は歌會。池田の人たちも桑折君も出席してゐた。

會果て、有志のみにて中田といふにて宴會、大いに醉ふ。

十月十七日。

朝よりこまやかな雨が降つてゐた。この池田帶廣に來た頃から二人とも身體の調子が思はしくなかつたが、今日など一層それを感じた。

昨夜遲く歸つた池田の人たち、今日午前來訪、北町君も加つて折柄の雨を題目に偶然の歌會となる。初め喜志子も加つてゐたが、發熱せりとて就床、神部君に來診を乞ひなどした。たいした事ではなからうが、要するに積日の勞れである。

夕方、雨の中を雪子さん宅に赴く。池田の菊池、米光、村山の三君に、北町君とわたしとである。喜志子は殘念がりながらも大事をとつて獨り宿に殘つた。

雨に手を凍らして行くと雪子さんところには幾つかの火鉢に火おこり、食卓にはいろいろの馳走が並んでゐた。席につくや否や主人進藤氏、先づお茶の代りとて盃をさされた。それを二三杯續けさまに頂いたと思ふうちわたしは瞬く間に醉つて來た。斯くて飮む者は飮み、たべる者はたべ、唄ふ者は唄ひ、恐しく賑かな席となつた。雪子さんはもう五人のお子持であるに係らず、氣も姿も若い人であつた。進藤氏も亦た頭や、禿したれども夫人同樣に極めて明るい人であつた。

十月十八日。

網走を立つ時から交涉しておいた夕張方面との豫定變更の打合せなか〳〵に捗らなかつたが、今日

電報にて承知の旨言ひ來つた。卽ち此處で五日間の靜養日が生れたわけである。

サテ、今度はその靜養の場所だ。其儘帶廣に寢てをれば、一番安心なのだが十五日に此處を立つた演習の兵隊が明日引返して來て明後日此處で觀兵式を擧けるといふので、町全體が前代未聞の騷ぎとなつてゐて到底滯在出來さうにない。さればとて遠くへ行くのも億劫なり、種々談合の末、この一つ東寄りの驛札內にあるといふ登別溫泉といふへ行くことにきめた。此處も沸し湯で、どうせ好い所ではあるまいがとのことであつた。

午後五時過ぎ、その登別溫泉黑田旅館といふへ落ついた。札內驛から三十町程の所にあつた。これはまた恐るべき溫泉宿で、どうせ初めから覺悟はして來たものゝ、宿屋全體が一種の廢屋じみてゐるのである。壁落ち、柱傾き、我等の通された八疊の部屋は、八疊づつ四室が十文字に仕切られた中の一室なのだが、部屋と部屋との間の襖がすべて充分に締まらないので何の事はない三十二疊敷の片隅に坐らされた樣な有樣であつた。而してこの三十二疊の部屋はお勝手より廻廊にてやゝ高みに登つた離室風の部屋なのである。茫然として顏を見合せてゐるところへ、ランプが點された。若し、其時進藤氏が送つて來てゐて呉れなかつたら我等夫婦はたしかに泣き出したに相違なかつた。

せめてもと炭火を山の樣に熾し、德利三四本づつを取り寄せおき自ら燗しつゝ、相酌むことにし、強ひて心を慰めた。他に相客とて無く、たま〳〵我等三人の擧ぐる笑ひ聲が異樣に家に滿ちて響いた。

十時の汽車にて帯廣に歸るといふ進藤氏を送つて門前へ出た。素晴しい月夜である。

『十三夜ですな』

さう言つて別れて行つた進藤さんの姿はいつまでも野中の徑に見えてゐた。門前を水の豊かな田川が流れてゐたが、其處にも練りつ碎けつして流れてゐる月の影があつた。霜が深いのであらう、身慄ひの出る寒さである。

十月十九日。

恐る〳〵眼を覺す。兎にも角にも無事に一夜は明けたのである。雨戸は無く、曇りガラスのガラス戸のみの縁側が晴らしい明るさを見せて居る。立つてあけようとすると此處も開閉不能である。便所に行く。落ち溜つた壁土の上に草履を踏んで用をたすのである。而して其處の破れより快晴の空を確めた。

辛うじて一二枚のガラス戸を引きあけたわたしは寧ろ呆れながらに眼を見張つた。ツイ其處の庭先から驚くべき林が起つてゐるのである。何やらの老木の立ちこんだ荒々しい林は林なりに急な傾斜の岡となり、岡はかなりの高みを保つたまゝ左右に遠く打ち續いてゐるのである。

この見ごとな林はいま丁度紅葉の盛りであつた。北海道に來て初めて知つた木の桂は既に落葉し、直徑三四尺もあらう大きな眞直ぐなその幹は干乾びた樣な枝もあらはに天をさして冬枯れてゐるので

ある。が、それに立ち混つたさま〴〵の老樹たちは、黄、樺、淡紅、眞紅、其他とりどりの色を含んで紅葉してゐるのである。朴の木は桂と同じく既に葉を落して白く太く枝を張つてゐた。

茫然としてこの不思議な林に見入つてゐると、その木の深みに何やらの鳥が啼く。啄木鳥である。一羽か二羽の聲である。やがて其處へ怪しい啼聲を先立てゝ姿を表はした鳥がある。樫鳥である。三羽、五羽、七八羽、美しい羽根を見せて悠々として木から木へまひ遊んでゐる。わたしは耐へかねて妻を起した。

今朝早々この宿を逃げ出さうかと思うてゐたわたしの考へはこの林を見ると共に消えてしまつた。そして朝食の席で、懇々として細君に轉宿の不可を說いた。

日和もよかつた。宿の前は小川を挾んだ田圃で、田圃から起つた丘陵は遠く波浪の樣に起伏し去つて限りもなく、空の果てには並び立つた雪の山脈があつた。石狩境の十勝岳石狩岳三國山などらしく考へられた。門を出て直ぐ左に曲ると道はとろ〳〵と片登りの坂となつてゐた。卽ち宿の屋後の岡の續きを横切つて登つて行つてゐるものである。この道の左右には矢張り屋後の林の續きが、其處よりはずつと疎らにはなりながら同じく紅葉の木立を見せてゐた。

妻と共にその坂道を登つて行つた。霜が解けて紅葉のつやは一層であつた。そして坂を登りつくすと其處はまた思ひもかけぬ廣々とした平野となつてゐた。野は半ば開墾せられ例の如く木の株の散在

する間にちらりほらりと開墾者の小屋の立つてゐるのが見えた。そしてそれと共に積みあげられた豆の塚があちこちに見えた。豆は大豆隱元等らしく、莢も枝葉もうす黒く枯れて積まれてゐた。

私は思うた。この平野もさまで遠くない以前までは鬱然たる森であつて、宿の裏の林などはその名殘と見るべきであらうと。而して平地の森は伐られ燒かれ、一つの平地が次の平地に切れ落つる斷崖斜面にあつた森林のみが自づと殘され、宿の裏などは宿の主人の好みか何かで特に斧を入れなかつたものであらう。さう思ふと一層わたしは彼の庭先の古びた林がなつかしかつた。

林の木はまことにいろ〳〵であつた。わたしに解る分で、楢、せん、やちはん、いたやかへで、桂、朴、あかだも、落葉松などあつた。若木もあるが、老木が眼についた。木から木の間を歩いてゐると、落葉朽葉の匂がこの鮮かな日光と共に匂ひ立つた。野葡萄の蔓は到る所の枝から枝に這ひ、實はすでに凋れてゐたが、それでも自からなる乾葡萄の味を持つてゐた。

晝寢、散歩、入浴で一日終つた。

十月二十日。

また快晴。

行事昨日と同じ。たゞ『創作』十一月號のために「創作社便」を書いた。

夕方思ひがけず北町君自轉車にて來訪、『一寸樣子を見に來ました』とのみにて直ぐ辭去。

そのあと、一時雨降りすぎた。

十月二十一日。

また、快晴。

樫鳥が實に多い。五羽、十羽と群をなしてこの岡の蔭の林を次から次へとまひ移つてゆく。

日の當る緣側に腰かけ、林に入り、部屋に坐り、敷き放しの布團に潛りなどしてゐるうちにやゝ元氣出でて「北海道行脚記」第一回分を書き始む。但し半分は眠りながらの爲事である。

妻も半ばは布團を被つてゐた樣だ。その布團極めて重く、一人で一枚を辛うじて持ちあげ得る。だから女中の手にもあまり、この三十二疊敷の一隅に敷き放した萬年床は自然と彼女をも喜ばした。食器、食物、すべて笑ひながらに親しめた。

夕方、帶廣より進藤氏、北町君及びその友人某君來訪、今日は心より愉快に談笑しつゝこのあばら家の夜を賑はした。あばら家と云つてもこの家は建つてまだ年淺いのだが、土地が凍りつ解けつするために土臺定まらず、斯う云ふ風に壁落ち、襖建具が動かぬのださうだ。少くも地下三尺を掘り、コンクリーか何かにて固めねば安全な家は建てられぬといふ。多少の差こそあれ附近の家は全てこの狀態なのださうだ。

十時の汽車にてとて三君辭去、今夜もいゝ月夜であつた。

十月二十二日。

霜深く、よき日和。

朝早く、オートバイにて神部君が喜志子の事を心配して見舞に見えた。彼女にも此處の休養はよく利いたらしく診察して頂く程の事もなかつた。氣の毒に同君は途中オートバイより落ちたとかにてズボンの膝の所破れ、血が浸んでゐた。

喜志子はいつかこの宿の主婦と仲好しになつてゐた。年四十一二、徳島の生れとかで此處に來て十五年になるといふ。帶廣邊の人の妾としてこの宿を預つてゐるらしく、年に似氣なく朝夕に化粧してゐるのが哀れであつた。演習のせゐか、旦那らしい人をば一度も見なかつた。唯だ旦那の子供らしい初年級の中學生が友人を連れて遊びに來てゐた。この少年に仕ふる主婦のまめ〳〵しさも眼についた。主婦の外に十九か二十歳の女中一人、ほかには猫が一疋ゐるだけであつた。この女中、丁度その道の事を覺えた盛りらしく、こてこてと塗つて常に隣家に出向いてゐた。隣家といふのは川を距てゝ今一軒ある湯宿で、其處に恰好な若い者がゐるのださうだ。食事の時ごとに主婦が呼べばのう〳〵として歸つて來た。少し足りないらしい、そしてあらはに瞳を燃やしてゐる血色のいゝ、割合に綺麗な顔であつた。

午後、この不思議な、そして思ひ出の深い湯宿を去つた。おど〳〵と送つて出た主婦の眼には涙があつた。屋後の森も、門前の小川も、誠に忘られ難い野の隅の岡の麓の林の蔭の湯の宿であつた。

帶廣に歸り北海館に入つた。（をはり）

この翌日十月二十三日朝、霧極めて深かりし帶廣の町を立つて我等は石狩の炭山地方に向うたのであつた。新砂川、幾春別、歌志内、幌内等に二三泊づつ、夕張に九泊、岩見澤に一泊、札幌に九泊、新琴似に一泊、小樽三泊、函館に一泊の後、十一月二十二日漸く北海道を去つたのであつた。

讀者諸君、約に反く樣で相濟まぬが此處にて以上の紀行をば暫くさし擱かして頂きたいと思ふ。炭山地方の珍しい風物、人物、新琴似の大吹雪等、書きたい事が非常にあるがあまりにこの紀行が長くなつたし、書くのにも勞れた。いづれこれは「北海道行脚別記」とでもして、丁度その季節の頃の本誌に書き繼ぐ事にしたいと思ふ。諒せられよ。

行脚記の餘白に

◇炭山巡りは辛くもあつたが珍らしい事も多かつた。今迄旅に出て逢ふ人は大抵同趣味の歌仲間に限られてゐたのに炭山各地では全くそれとかけ離れた工科とか法科とかを出た人若し

くは地下に入つて親しく炭を掘り出す勞働者諸君であつた。それだけになか〳〵面白い事があつた。蛸人足（監獄部屋）といふものゝ、働いてゐるのなどをも見た。

◇雪に降られたは十月二十三日上砂川が初まりであと一ヶ月間殆んど毎日降られた。

◇前に書いた小川丑麿君や宇宿しな子夫人の樣な奇遇にも度々出會うた。夕張では九日間甲斐猛一君といふものゝ宅に厄介になつてゐたが、この男とも小學中學を同級で過して來た仲であつた。

◇東北地方に入つても面白い事があつた。これも斷片的に書いて見たいと思うてをる。

◇行脚記に度々出て來た旭川師團の齋藤瀏大佐は「心の花」の同人であるが先頃少將に陞任、熊本の第十一旅團長となられた。

◇網走中學が先日燒けた。全燒ではないさうだが、誠に惜しい事をした。

北海道雜觀

わたしが北海道に行つて見たいと思ひ始めたのは國木田獨歩の小說『牛肉と馬鈴薯』や同じく『空知川の岸邊』を讀んでからであつた。前者には北海道を一の理想實行の境地として、まだ現世の汚濁にけがされてゐぬ清淨な處女地として痛切な憧憬が書いてあつた。後者には作者自身がその理想實行を志して北海道に渡り、空知川沿岸の森林中にわけ入つた經驗が例の筆致でみづ〳〵しく書いてあつた。これらを讀んで胸を躍らしたのはわたしのまだ學生時代であつたとおもふから今より二十年も前の事であつた。

わたしは旅行が好きでよく出かけるが、あちこちと廣く見物して廻るといふより、一度好いと思つた所には幾度となく出直して行つて獨り自ら樂むといふ癖で、所謂見聞は廣くない方である。で、もう日本中で御覽にならない所はないでせう、といふ質問にもよく出會ふがこれに對してはみづから自分の習癖を知つて居るところから一向何の感じも起さないのが常であるが、若し誰かに、北海道へはまだですか、と訊かれると、舊い負債をあばかれた樣な氣持で、いつも少からぬ衝動を起した。そし

て、これは早く行つて來なくてはいかぬと一種意地になつてすら思ふ樣なこともあつた。

その癖、其處に對するわたしの知識といふものは實に怪しいもので、本州を挾んでゐる釣合の概念からか、自分の生れた九州と同じ大きさとしか北海道を考へてゐなかつた。而して今度實地に出かけてみると九州はおろか更に四國臺灣を加へたものよりもう少し大きいといふので呆氣にとられてしまつた。

北海道の噂をばわたしは注意して聞いてゐた。そしてその多くが言つた、北海道の自然は雄大である、北海道の景色は實に雄大である、と。

成程、その雄大說にわたしも異を稱へるものではない。いかにも雄大である。が、單に雄大であるとだけで片附けてしまはないで、わたしはこれにもう少し附け足したい。曰く微妙である、曰く複雜である、曰く單調である、と。單調であつて複雜であるといふのは可笑しい樣だが、其處にいひ難い微妙さがあるのである。若しまたこれと同じい反語式口調を用ふるならば、もう一つある、曰く微妙であると同時に甚だしく粗野である、と。

單に雄大であると觀る觀方は其處の山や野や河や海を殆んど死物扱ひにしての觀方ではあるまいかとおもふ。それらのものを單に一つの『形』としてのみ觀てゐるのではなからうかと思はれる。山や河の間に動いてゐる雲や霧や、降り注ぐ、雨や雪や、日の光空の色星の輝き、夏過ぎ秋來る、さうし

てそれらのものに包まれた斷えず生きて動いてゐる山河の姿、さうした事柄を忘れての觀方ではなからうかと思はれるのだ。

其處でわたしはいふ、北海道の自然は內地のそれに比し雄大であり、單調であり複雜であり微妙であり粗野である、と。といふとひどく褒めあげる樣であるが、強ちさうでもない。世にいはれて居る雄大さよりずつと型を小さくした雄大さをわたしのは意味して居るのである。

實際今度の北海道で、雄大とか單調とかを感ずるより前にわたしは先づ眼まぐるしい樣な複雜さ微妙さを感じた。これは主として、雨風、雲、日光、溫度、斯うした氣象方面の變化の烈しさから來るとおもふ。ぱつと日光が窓にさしたかとおもふと、もうばら〳〵と雲がガラス戶に音を立てゝゐる。珍しくほくら〳〵の暖かい日和だと喜んでゐると、いつかしら木の葉を吹きまくつて凩が荒んでゐる。

初めて經驗するわたしにはこれが甚だ珍しく、且つ樂しかつた。が、同伴した妻などにとつては寧ろ少からぬ脅威であつたらしい。初めはわたしと同じく、珍しく面白かつた樣だが、あまりにそれが續いて繰返されるのでしまひには恐ろしくなつたらしい。無理ならぬこと、わたしは微笑した。微妙と粗野との交錯は斯んなところにも見られるとおもふ。

然し實によく降られた。九月廿四日に函館に着いて十一月廿五日に函館を發つまで北海道に居るこ

とかつきり二ケ月間、その間一日のうちに雨か霙か霰か雪かに降られぬ日とては恐らく十日となかつたであらう。降られぬ日は、大抵吹かれた。あちこちと思ひ出して来て十勝國帶廣在の登別溫泉といふに滯在した五日のうちの三日間が不思議とよく風いで晴れて吳れた。紅葉は照り樫鳥はまひ啄木鳥は啼き遠山の雪は輝き、忘れられぬ三日間であつた。

九月廿四日、聯絡船から函館の棧橋に降り立つと、もう降つてゐた。その夜、札幌の驛から出ると其處はまさに大吹降りの時化であつた。翌朝、山形屋の暗い部屋から庭木ごしに空を仰ぐと氣味の悪い樣な藍色に澄んでゐた。やれ嬉しやと植物園に出かけて歩いてゐると如何にも時雨らしい時雨が青やかな樹木の高い梢に荒らかな音をたてゝ降り過ぎた。

天鹽國增毛港に汽車から降りたのは十月六日の夜九時であつた。そして其時もまた札幌におとらぬ吹き降りであつた。岡の上のお醫者樣の宅に一晩厄介になつて翌朝其處の診察室から見下す增毛の港から遙の沖にかけてはたゞ眞白な浪の渦であつた。近くの林檎園を見に行かうとて朝早く一人の若者が誘ひに來て吳れたが、わたしは到底歩かれる風でなかつた。やがて彼は黑いマントを被つて前こゞみになつて駈け出したが氷の玉の樣な果實を一抱持つて來て吳れた。直ぐ歌の會が開かれた。めい〳〵が考へに耽つて居る部屋の板葺きの屋根にすさまじい音をたてゝ降過ぐるものがあつた。窓さきの落葉松に降りつけて庭にまろぶそれを見れば驚くべく粒の大きな眞白な霰であつた。庭はまたゝく間に

白くなつた。

『昨夜のもこれだつたネ』

とわたしは妻をかへりみた。昨夜幾度か我等はこの不思議な荒々しい屋根の上の物音に眠りを覺されたのであつた。

遠山に雪を仰いだは九月三十日岩見澤のもろこし畑の間からであつた。身に降りかゝるそれを見たのは十月廿四日の夜石狩新砂川炭山に於てゞあつた。しかし夕張炭山では一尺以上も積つた白雪を踏むことになつた。十一月六七日ころの事であつたらう。そして後に咫尺を辨ぜぬといふ吹雪に出會つたは十一月十四日、札幌から新琴似村に行く宵闇のなかであつた。幌をかけた自動車の中で我等の膝掛毛布は忽ち白くなつた。ふと見ると傍らの妻の髮が眞つ白になつてゐた。オヤ〳〵と思つてゐるうち自動車はバンクし立往生した。止むなく足袋跣足になつて歩いた。一夜を土地の郵便局長である我等が歌仲間の宅に過ごし、翌日は特に仕立てゝくれた馬橇といふものに生れて初めて乘つた。

人間の乘るのはまだ用意が出來ないとかで石炭や大根を積む無蓋橇であつた。煙の樣な雪は涯もない野原の西から東から吹雪いて來た。鼻の頭に積つては消えてゆく雪の白さを面白く見詰めながら約一時間半を搖られて札幌の街に入つた。ちやんらん〳〵とひゞく鈴の音はまだ札幌の人たちにも珍しく振返られながら北大通西何丁目といふ友の家の門口に着いた。友の家の門口の生垣の何やらの木も

重さうに雪をかづいてゐた。

北海道の景色といふうちに、渡道前先づわたしの想像に上るものは森林であつた。次いで原野であつた。而してこの想像は當つた。矢張り北海道の美を成すものは森であり野である。勿論、海あり河あり山岳あり、それ〴〵に特色を持つてをるが、特にいふならば矢張り野であり森であらうと思ふ。

札幌に着いた翌日、月寒の牧場に案内せられて初めてわたしは北海道の野らしい野を見た。この野は、否、北海道の野は案外に柔かみを持つてゐた。札幌あたりよりずつと奥にわけ入つてから見た諸所の原野にも何處といふことなくこの柔かさ優しさの籠つてゐるのを感じた。とりあへず思ひ出されるのは野付牛あたりの平野、狩勝峠から振返つて眺めおろした十勝一帯の平野、すべてにそれが感ぜられた。焼け残りの木の切株の並び立つた所など、いかにも荒涼としてゐるわけだがわたしは寧ろ上州信州境の六里ヶ原、信州甲州境の野邊山が原念場が原あたりの荒涼さに較べて遙に優美に眺めたのである。

森に就いて思ひ出されるのは、たしか天鹽と北見の國境になつてゐたかと記憶する一の橋驛から興部驛あたりにかけての森、北見釧路の國境だとおもはれた置戸驛から小利別驛間の森、下富良野驛から野花南驛あたりのそれこそ空知川沿岸一帯の森、これはや、樹木のこまかいのをば感じたが夕張炭山に新設せられたといふ汽車から眺めた森、同じく夕張から追分驛に出やうとしてなにがし川を挟んで見て來た森、すべてがわたしの心を惹いた。興部、置戸附近の森は非常に山が古いらしく、立枯の木や倒れて朽ちた幹や、山火の跡らしく枝も幹も眞裸體に黒々として立ち並んだ有樣や、すべてが寧ろ凄壯といひたい位ゐの美しさを持つてゐた。若し今度わたしが用事を持つての旅行でなかつたならば以上の各驛あたりでは恐らくそれ〴〵に飛び降りてこれら『時』の流れのあはれさ強さ美しさを噛みふくんで茂つてゐる森林たちとゆつくりと瞳み合つて來たであらうと思はる、。それを思ふと野幌の森を見残して來た事と共に今でも殘念でならない。

それにしても北海道の森林の上に『亡び』の影がかなりあらはに漂ふてゐるのを感ぜざるを得ないのを悲しむ。ろく〳〵田にもせず畑にもせず、たゞ伐らむがために伐りつくしたといふ森林の亡骸の隨所に横たはつてゐるのを見て通りながら、わたしは實にいたましい氣がしたのである。

森林の亡骸といふた。その亡骸のうへに巢をくうてゐる蟲のゐるのを見た。

或地方の北海道の百姓たちに斯ういふことをいふのは非常に失禮な不當なことであらうか。

北海道の自然は雄大である、そして北海道の人間は濶達であり大膽であるといふことを聞いてゐた。雄大はまだ可なり、人間の大膽濶達はよくわたしには解らなかつた。寧ろ普通より小膽で神經質で、徒らにひとの眼顏を讀むのに苦勞するといつたところがありはしないだらうか。それがまた妙に運命を肯んじて小成に安んずる、さう云つた所がありはしないだらうか。

山や河の姿は一目見れば解る。が人間は生きもの故、さう簡單に見通しがきかぬのかも知れぬ。

北海道でたべて來たもので何が一番おいしかつたらう。

林檎か、然り、林檎はおいしかつた。丁度その熟れどきで、それこそ飽くまでたべて來た。時期といへば鮭もそのしゅんであつた。いはゆる秋味とかいふのださうで到る所殆んど毎日これを膳の上に見た。本場だといふ網走では宴會の席上にわざ〳〵その鍋までしつらへて下された。が、不幸にもわたしはあまりこれを好まない。嫌ひではないが、三度四度と續くともう苦しくなるのである。恰も信州甲州に行つて鯉攻めに會うて弱るが如くどうもこのあぶらつこい魚はわたしには向かない。（妻は大いに喜んで貪つてゐた樣だが。）かといつて鮮とかおひやうとかいふ白肉のさかなはまたこれ大味にすぎて、所謂噛み足りないのを覺えた。わたしは魚の小味のあるのを好む。曾て相模の三浦半島の漁村に住んでゐたことがあつた。其處は東京灣の入口に當る所で、所謂入江もの、小ざかなが澤山とれた。またその種類が非常に多かつた。色や形も美しい。小舟の歸つて來るのを濱に待ち受けてあれこれと舟底から選み出し、持ち歸つて自ら料理してたべたあの味は忘れられない。もつとも其處の小魚は評判ものなのださうで、日本橋の魚河岸でも其處の魚だけは普通の肴屋の手には渡らず、大抵東京一流の料理屋が自ら買出しに來て買ひとつてゆくのださうだ。わたしのいま住んでゐる沼津千本濱は駿河灣に臨んで居る。此處でもまた種々の小魚がとれるのである。

やまべを何處かで御馳走になつた。これはおいしかつた。前言つた森の停車場奥部と狩勝峠の清水であつたか落合驛であつたかとでやまべ鮨を賣つてゐた。ふた所とも買つてたべたが、惜しいかな米粒が各自分離運動を起してゐてまづかつた。

野菜、さうだ、野菜がある。これはおいしい。五升薯、玉葱、きやべつ、とまと、たうもろこし、すべておいしかつた。それに我等に珍しい茸も幾つかあつた。岩見澤の友人の家に泊つてゐた時はわたしは毎朝門口にたつて荷車を引いて其處を通る野菜賣のねえさんをばさんたちから色々なものを買ひ込んで新婚早々のその友人の細君に嫌はれた。夕張の友人のうちでは納豆賣を呼び込んだ。札幌ではこれは一二度我慢したのだがこらへかねて棒鱈賣を呼んで買つて貰つた。其處の友人の阿母さんは笑ひながらいつた、斯んな安いものがお好きならそれこそおやすいことです、と。鱈のすゞ子も流石においしかつた。

もう一つある。おかうこである、漬物である。各地とも、何の漬物でもみなうまかつた。わたしは刺身やお椀より殆んどこのおかうこでのみ酒を飲んで來た樣に思ふ。これは野菜のよいのと、一つは長い雪ごもりの好伴侶として自然その漬かたに工夫を凝らされたものかとおもふ。

サテ、それでは酒はどうか。

これがわたしには少々意外であつた。定めしひどいのを飲まされるだらうと覺悟して行つたに反し

各地ともみなお酒がうまかつた。ことに、地酒にいゝのがあつた。旭川で面白いことがあつた。其處では七師團の或大佐殿の宅に四五日厄介になつてゐた。既にわたしの酒ずきは知られてゐて所謂灘の生一本といふのが多量に用意されてあつた。其處へ出入の商人か何か、これもわたしの噂を聞いてゞもゐたか、わざ〳〵土地出來のものだがお口に合ふかどうかと斷つて小さな一樽を持つて來た。どうせ駄目だらうが、一杯飲んでみますか、とその樽の口をあけて見たところが、どうも、灘の生一本よりその土地出來の地酒の方がずつとうまいのであつた。それからわたしがその方ばかり所望するので、少からず大佐殿の御機嫌をそこねた傾向があつたのである。その後ずつと經つて、旭川出來の酒が全國品評會で一等賞を得た、本道では初めての事であるといふ記事を本紙（北海タイムス）だか他の新聞だかで見た。ともするとわたしの舌鼓を打つたそれではなかつたかと私かに微苦笑したのであつた。

岩見澤のも、夕張のも、ともに地酒であつたが、共にうまかつた。ことに岩見澤のは秀れてゐた。

サツポロのなまがおいしかつたといふことも一言書き加へておかずばなるまい。

右のほか、何彼と思ひ出さるゝもの〳〵數々。

月寒の緬羊と秋の夕暮。岩見澤の農學校で見た高山植物。旭川の夜の霧。旭川春光臺の柏の木立。春光臺から見た遠山の雪。神居古潭雨中の紅葉。深川町の追分。名寄町の夕時雨朝時雨。其處富士屋旅館風呂番の老爺。其處で夕方獨り出て雨に濡れながら買うてたべた栗の實。紋別附近の海の色。其處の砂濱に唉き遲れてゐた一輪のはまなすの鮮紅。網走三眺山の紅葉の眺望。其處のあきあぢの山と沖にかけられたその網。幾春別の貝の化石と露頭。夕張炭礦で頭に巻きつけられたエヂソン式キヤツプランプ。歸りかけてみた雪の駒ケ岳。

其他、いろ〳〵なストウブ。圍爐裡の上に吊られた自在鍵。其處に熾す木炭の豐けさ。鴉。各停車場に積まれてゐた大根の山。炭山坑夫長屋の煙突の行列。菊の花。家のゆがみ。風によつて向を變へる氷柱の鼻。

いざとなるとなか〳〵思ひ出せぬものである。

最後に少々臭い話を書きつけておく。

ことに宿屋などでそれを感じたが、便所の外部に面した方の窓は寒さのせゐであらう必ず密閉してある。さうして人の出入する內側の方の戸は多くの場合殆んど完全にしめてない。用をたしながらあけ放してゐるのをも幾度か見た。だから其處の臭氣はそのあいてゐる所から悠々として屋內座敷の方面に向つて侵入して來る。ことに便所はよく階子段の下に在る物である。乃ちこの臭氣は、恰も石炭の煙が煙突の筒先に急ぐが如く、この階子段の穴から二階三階に勇んで上昇してゆく。或る町の或る立派な旅館で或る朝わたしは或る咽せる樣な氣持で眼を覺した。滿室の香氣、鼻まさに歪まむとする光景である。廊下に向いた欄間から階子段下の臭氣氏がい、氣持で忍び込んで來てゐたのである。わ

たしは一種の嘔吐を覺えつゝその臭氣氏の故郷に向つて急いだ。
また、普通の家にはよく手洗鉢が置いて無かつた。

朝鮮紀行 葉書日記

五月四日。

午前十時五十分、長倉、田中、鈴木、自宅の人々、其他おもひがけない人たちに見送られて賑かに出立、いつもは『イツテラッシャアイ』と元氣のいゝ一方のヤカマヤ富士人（註、ヤカヤマを幼兒の廻らぬ口にてかく言へばなり。）君が今日はやゝ哀愁情緒であつた。

いま四時半、東海道でもわたしの好きな美濃近江の高原を走つてゐる。時が少し遅れてゐて、柿欅などの若葉が漸く萠えたばかりである。道理こそ、伊吹山のてつぺんにはまだ雪が見えた。天氣快晴。車中こみあひ、假睡なりがたく、頭やゝ重し。急げ、急げ、汽車。（東海道柏原驛附近にて）

（この間中絶）

五月十六日。曇。

下之關川卯旅館を出で、午前十時乘船、船は昌慶丸、割合にすいてゐた。玄海のうねりは黑く長く

且つ硬げに見えた。搖る、ともなく、船搖る。妻は註文しておいた晝食をもようとらず乘るから降りる迄横になつてゐた。妻ばかりではない、大抵の人がさうであつた。小生は久し振に見る沖のうねりがなつかしく人氣もない甲板に風に吹かれて立つてゐる時間が多かつた。

午後六時半、釜山着、土岐哀果の舊い作に白い衣がうろ〳〵歩いてゐるのが船から見ゆると歌はれた事があつたとおもふが正にその通り、而してその白衣が案外に明るく美しかつた。

社友氷室潔、松山連、平山斌、岡本民雄の四君及び數名の新聞記者諸君に迎へられて下船、其處で思ひがけない人に會うた、小中學を同級で過して來た小曾戸俊男君である。同君はいま土地の役所の産業方面のい、お役人をしてゐるのださうだ。高女三年、尋三年の令息令孃を連れて出迎へてゐてくれた。新聞記者諸君のうち、釜山日報の野入君とはこの前福岡の安河内君の宅で逢うた事があつたのだが、此處に來てゐることをば知らなかつた。社友四君とは初對面であつた。惜しいことに、釜山中學教諭社友德政龜一君とは小石川の金富町時代からの知りあひなのだが、丁度滿洲地方に生徒を連れて修學旅行に行つてゐた。

釜山日報社に立寄り、荷物を預けおき、社友四君野入君と共に電車にて東萊溫泉に向うた。途中、月朗らかに江上に在り、山影甚だ深きを眺めた。小酉行長の城址など、その低い山の中の一つにあつた。

鳴戸旅館に入る。一番奥の離室に用意がしてあつた。浴室も附屬してをり、靜かで、難有かつた。初めて大陸の一端を踏んだこの夜を、大いに樂しく醉うて更かした。十二時すぎ野入君は泊り、他四君は自動車で歸つた。

五月十七日。快晴。

朝寢坊の妻の方が先に起きてゐた。そして結ひかけた髮の手をとめて小生を呼ぶ。郭公が啼くといふのだ。耳を澄ませど聲者小生には聞ゆる事なし。たゞ黒紫の岩山が指ざさる、方に朝日を浴びて聳えてゐるのみであつた。

が、郭公はとにかく何といふ美しい五月の朝であることぞ。空も澄み、山も澄み、草木日光、すべてが瑞々しく光り輝いてゐるのである。庭の若葉の中に異樣の鳥の聲がする。信州松代で聞いた尾長鳥の聲によく似てゐる。よく見れば黒白相半ばした羽色の、鵲であつた。

『ホウーイ、ホウーイ』といふ聲が聞ゆる。緣側から見ゆる所に十坪ほどの苗代田があり種を蒔いてある。而かも眞白な袖を飜しつ、男二人女一人の三人がかりで追うてをる。女は畦に赤んぼを寢かしておいて追うてをる。男は間が隙がな裸體になつて鳧をとつてゐた。そしてその間には煙を吹いてゐた。

やがてまたボツトン〳〵といふ音が聞えた。庭に降りてみると庭先に落ちてゐる溫泉の湯尻で洗濯

をしてゐる女の兩手の棒の音であつた。

午後の散歩には更に不思議な光景を見た。今朝郭公の啼いたといふ岩山の方へ溫泉場を離れて歩いてゐると其處にほそ〳〵と水の流る、溪があり、到る所で女たちが洗濯をしてゐた。その溪を少し離れた森の蔭に葭簀張をめぐらした小屋の樣なものがあり、その中から泣く樣な唄ふ樣な、多勢の聲が聞えて來る。何の氣なしに近寄つてみて驚いた。十五六人の朝鮮の女が腰部に僅かに布をまとうたのみの素裸體で、四五人は立つて踊り、四五人は寢ころんで頰杖し、四五人は手を叩いて唄うてゐるのである。中に唯だ一人の女は箱樣のものを伏せて、それを叩きながら調子をとつてゐる。湯上りか酒に醉うたか、すべての身體は眞赤であつた。眼を見張つて歩をとめてゐると一齊に手眞似であちらへ行けといふ。一種の恐怖を感じて小生は早速に立ち去つた。妻はなほ暫く見恍れてゐたが、妻には立ち去れといはなかつたさうだ。宿に歸つてこれを訊いたが、宿の者も何の事だか知らなかつた。天主教信者の何かではないかといふ人が後であつた。

夜、岡本君と氷室君とが迎へに來て吳れ、釜山の金剛寺といふ寺の歌會に赴く。

五月十八日。快晴。

今朝の空もよく晴れた。その紺色の空を背景にして立ち並んでゐる禿山の姿は實に靜かである。今朝は辛うじて郭公を聞きとめた。鵲はよく庭に來た。

可愛らしい鳥だ。

東萊溫泉には櫻が多く、その葉櫻の蔭を白衣の人たちが歩いてゐる。朝鮮人は男も女も實に勇ましく歩く。着てゐるものは割にきれいだし、內地に來てゐる所謂鮮人などとは非常に異つた印象を受けた。

迎ひに來てくれた岡本君と共に東萊溫泉を立つた。淸くしてぬるい離室のお湯もアル中にはあつらへ向きだし、女中から主人まで、親切にしてくれたので、もう一二日と思はれたが「日程は變更せず」の規定を初日から亂すわけにもゆかなかつた。午前十時五十分、釜山發、野入君は三浪津までとて同車。

洛東江といふ大きな河に沿うた。流る、が如く流れざるが如く、河までが實に悠々としてをる。山には松や楡やポプラが植ゑ込まれて、しかもまだ幼い。鮮人部落が車窓に見える。まんまろくして小さい藁屋根の下に出つ入りつしてをる彼等の姿も悠々そのものである。但し車室に入るや否や、口を開いて眠らうとする筆者そのものもまた彼等と同化してをる形があつた。（五月二十日朝忠淸南道儒城溫泉鳳鳴館にて）

朝鮮紀行

その一　珍島

朝鮮全羅南道珍島なる福島勉君は永い間の我等が歌の仲間である。ツイ一昨年までは神戸の或る會社に勤めてゐたが、今はその珍島なる島に赴いて郵便所の所長をしてをるといふ。そして頻りにわたしに來遊を促して來た。單に遊びに來いといふでなく、この一二年間或る必要から催して來たわたしの揮毫會をも朝鮮で二三ヶ所開いてはどうかといふことであつた。行きたさは行きたし、近來ひどく弱つてゐる自分の健康は氣になるし、暫く迷つたが、介抱役に妻を同伴することにして愈々出懸くる事にきめた。

早速朝鮮の地圖を買つて來て先づその珍島を探したが、おもひの外の邊鄙な、そして澤山の島のごたごたしてゐる中に漸くそれを見出した。福島君もたいへんな所に住みついたものだと思ひ、また自分自身もたいへんな所まで出かけて行くことになつたものだと思うた。

ずつと大田まで出迎へてゐてくれた福島君と共に光州、羅州、木浦と廻つて、いよ〳〵五月廿七日

の午後二時木浦港を發動汽船で出て、珍島に向うた。木浦の坂本喜一郎君も同行する事になつた。なるほど島の多い海であつた。港を出るとから直ぐこの小さな汽船は島より島の間を縫うて進んだ。大きな島、小さな島、木のある島、裸體の島、多くは無人島らしいそれらを右に左に眺めつつ進んだ。このあたりは潮の干滿の著しいので有名な所だとうで、その差は十五六尺にも上るのださうだ。昔、豐公の征韓役の時、日本の水軍（加藤嘉明等であつたか）がこの地理を知らなかつたゝめ散々に敵に惱まされたのも此處だつたさうである。で、今でも餘程潮の時間を計つてでなくては船はやれないのだといふ。

夕方、船着場海倉（ヘチヤン）里に着いた。其處には福島君の兄さん福島二郎氏が出迎へて居た。そして導かれて同所の同氏宅に赴き、一泊する事になつた。

二郎氏は同島に移住した内地人の極く最初の人々の一人ださうで、今は專ら干拓（かんたく）事業に當つて居らるる樣子である。干拓事業といふのは初めて知つた事であるが、陸地に深く入り込んだ入江の干潮時に乘じてその口を封じ、中の干潟を田畑とする事業なのである。前に言つた樣に潮の干滿が烈しく且つ海岸の屈折が强いので、この事が出來るのだといふ。

然し、何を云ふにも動搖烈しい大海を相手の爲事であるため困難は云ふまでもなく、幾度か失敗し、絶望し、いま漸く安定を得る所まで漕ぎつけられたのだといふ。珍島だけに三個所の工事を起し、二

ケ所は完成し、一ケ所だけ今なほ工事中とのことであつた。然し、出來上れば何十町歩といふ大きな田畑がひよつこりと海底から浮き上るわけである。

同氏が工事を起された當初は單に工事が困難であつたのみならず、まだ土地の鮮人たちに不穩の氣の漲つてゐた頃であつたため、いつどういふ事が起るも知れず、内地人同志相警めて夜も眠らぬ樣な時日がかなり長く續いたのであつたさうだ。現に今日我等の乘つて來た發動汽船なども今は普通の交通機關となつてゐるが、最初は單にさういふ意味でなく、萬一事の起つた場合に内地人だけそれに乘つて逃げ出すための用意であつたのださうである。

それこれの耳新しい話を聞きながら夜遲くまで馳走になつた。

五月二十八日。

朝、眼が覺めてゐると頻りに雉子の啼く聲が聞える。お天氣らしいと起き上つてみると見ごとな日和である。雉子は家の背戸から續いた入江沿ひの小松山で啼いてゐるのであつた。庭に出て見ると潮は殆んど庭先の道路の緣を浸さうとしてゐる。そして何の魚だか、豐かな平らかな潮の上に頻りにぴちく〳〵と跳ねてゐるのが見えた。その豐かな入江の奥を限つてがつしりした石垣の土堤が築かれてあつた。それが卽ち干拓事業の第一歩をなす潮止めの土堤であるのだつた。

食後、その土堤を見に行つた。一つの入江の袋口になつた場所を堰いたわけだが、それでもかなり長い土堤であつた。滿潮の頃の潮の壓力に耐へ、折々起る風浪に耐へるために、土堤は隨分と岩疊に築かれてあつた。それでも一二ケ所、まだ不備な所があつて、其處から内に向つて凄じい勢ひで潮水が迸つてゐた。迸り出た水の深い淀みを爲した所には何やら細長い魚がいつぱいに群れて泳いでゐた。鯖だといふ。

やがて二郎氏方を辭して邑内なる勉君方に向うた。一里近い道であつた。邑内とはその地方での主都を意味するらしく、例の土饅頭の樣な鮮人家屋のひし〳〵と群り合うた大きな部落であつた。

その部落を拔けた山の根寄りの所に勉君の家はあつた。昔、然るべき兩班でも住んでゐたかと思はれる四方の廂のもの〳〵しく反りあがつた家屋の玄關に珍島郵便所の木札が揭げられてあつた。古びた屋根の上にはこの邊に珍しい松の古木が枝を張つてゐた。

五月二十九日。

この朝、珍しいものを見た。木浦から一緒に來た坂本君は慶應義塾の出身で、もと同校劍道部の選手、四段の腕前なのださうである。それを知つてゐるこの土地珍島警察署の人たちは、同君の來た事を聞くと無理にも一本稽古を賴むといふことで、朝早くから同君を引つ張つて行つた。更にわたしを驚かしたのは身のたけわたしにも及ばぬ小男の勉君がまた同じく二段の使ひ手だといふことで、揃つ

て出かけて行つた。オヤ〳〵と思ひながらわたしもそのあとについて行つた。

稽古は凄じいものであつた。血氣さかんな十四五人の人を相手にわが兩君は悠々として稽古をつけて行つた。後には稽古を通り越した眞劍さで、精盡きて倒るる者二人三人と相次いだ。見てゐるわたしすらいつか知ら四肢固く、涙はおのづと眼に浸んだ。一種の必要からか朝鮮一帶に警察官の尚武熱、就中劍道の熱は盛んだとかで、此處の警察にもなか〳〵の使ひ手がゐるのださうである。坂本君が來たといふのを聞いて昨夜直ちに附近二三里の間に在る駐在所在勤の人たちにまで使を走らせ、その人たちはまた夜道を踏んで今曉此處に集つたのだといふ。

夕方、思ひもかけずこの邑内在住の内地人諸君から招待されてお酒をいただいた。會する人二十人あまり、男ばかりではあつたが老いたる若き、これで此處の内地人全部なのださうである。わたし先づ醉ひ、諸君も醉うた。或る人はわたしの腕を拉へて、時々斯うした事が無くては寂しうていけませぬと言うた。九州出身の人多く、わたしの生國日向の人も三人あつた。また、現在わたしの住んでゐる靜岡縣の人も一人ゐた。

五月三十日。

酒を過した時のわたしの癖で、朝は必ず未明に眼が覺め、覺めたらば寢苦しくて寢てゐられない。

今朝もそれであつた。ひそかに床を出で、一枚の雨戸をあけ、戸外に出た。

戸外はうす蒼く明けてゐた。鵲が二三羽、けたたましく附近の木で啼いてゐる。その聲に混つて聞えるのは例のポッタン〳〵と布を打つ洗濯の音である。しかもツイ近くから聞えて來るのでぶら〳〵とその方へ歩いて行つた。

幾らか傾斜を帶びた麥の畑が廣々と家の横手にあつた。音はその中から起つてゐるのである。露の小路に足袋を濡らしながら行くと、畑の中の一個所に小さな凹みがあり、周圍には野茨など茂つてゐた。其處は自然にあつたものか掘つて作つたものか小さな泉となつてゐた。泉から流れて出る小さな流を堰きとめて洗ひ場を作り、いま二人の女が手に手に棒を持つてせつせと布を叩いてゐる所であつた。一人のやや年とつた女は既に洗ひ終へて立ち上る所であつた。雫の滴る布を瓶に入れ、瓶を頭に載せて立ち上つた。ぢつと見てゐるのも面伏なので、わたしも小路を引返した。そのあとから彼女はすべての彼女等がする樣に姿勢ただしい恰好なり足取なりで歩いて來た。

畑の一方がまろやかな岡となつてゐた。頂上にだけ樹木が茂り、その裾は青い草原であつた。瓶をいただいた女はその草原に登つてゆき、瓶から取り出してその白布を乾すのであつた。斯うして岡の中腹などに干しひろげられた布をば今まで到る所で見て來たのであつたが、現在干しひろげるのを見るのは初めてで、濕つてゐるせゐか青草の上のせゐかとりわけてもその布が白い樣に眺められた。そ

していつもながら思ひ出されるのは持統天皇の『春過ぎて夏來（きた）るらし……』の一首であつた。折も折、その季節でもあつたのだ。

乾し終へた女はまた悠々と瓶をいただいて岡を降りて來た。歸つてゆくうしろ姿を見やりながらわたしは行くともなくそのあとに從うた。鮮人部落の中を一度通つて見たいと思うてゐたからである。

思つてゐた以上に彼等の小さな家居はこんでゐた。殆んど壁つづきの樣にして、その丸やかな草屋根を並べてゐるのである。屋根の下の部屋は極めて狹く、日本流に云つて四疊半に二疊か三疊の小さな部屋をくつ着けた二間ほどのものである。その中に出入りする彼等の、ことに子供たちの騷々しさは見てゐられないものであつた。ただ、老人だけは大概長い鬚を垂らし、ともすれば小さな冠をかむり、手に長い煙管を持つて部屋の隅か出入口の柱に背をもたせてぼんやりと膝を立ててゐるのであつた。

部落の中にも井戸があつた。一坪ほどの廣さに湛へた水を、高さ一間か一間半の石段を降りて行つて汲む樣になつてゐた。丁度髪を結んで長く垂らした娘たちが汲みに來てゐた。めい〳〵瓶をいただいて來てはそれをおろし、中に入れて來たバカチ（丸い瓢箪を半分に割つたもの）で水を汲み滿たしてはその上にバカチを浮かし、また上手に頭に載せて歸つてゆくのである。漸く朝日がさしそめて、その井戸の中を照らした。清水とは云つても濁りに近い何やらのごみ〳〵しいものがその日光に照ら

し出されて見えた。

魚市場らしい所にも通りかかつた。道ばたに板またはアンペラ樣のものを敷き、それに魚を置き並べて賣るのである。賣る者も買ふ者も、何といふ喧しさ、口ばかりか手を振り足を踏んでおらび立ててゐる。斯くすること多時、漸くにして一疋の魚なり蟹なりを提げて歸つてゆくのである。手交される錢の額を知りたいものと思うた。

何處へ行つたかと言ひ合はされてゐるなかにわたしは珍しい散歩を終へて歸つて行つた。朝食を濟ますとこれから五里ほど離れた竹林洞といふ所にある福島家の別莊へ出かけることになつてゐたのだ。

既に四人のチゲ（チゲとは元來內地の田舍にて薪を負ふに用ふる道具に似た類をさす名であるが、それを負うて爲事をする鮮人を稱しても直ちに斯く呼ぶのださうだ）が食物や寢具を負うて出かくる所であつた。チゲとは云つても髮を結び鬚を垂らし、中にはまさしく我が朝の武內宿禰を見るごとき堂々たる骨格の老人もゐた。

チゲ達を出しておいて始めた朝酒がかなりに永びき、待たしてあつた自動車に催促されて漸く出かくる事になつた。道路とても少なからうこの島に自動車のあるといふ事が可笑しく思へるのであるが、とにかく一臺だか二臺だかあるのださうだ。勉君、坂本君、我等夫婦のほかに一疋の犬が乘つた。犬

をばその別荘の番をしてゐる男に曳れてやるために連れて行くのだといふ。ところが、この犬先生、忽ちに自動車に酔つてきたない事をした。止むなく下におろすと、長い赤い舌を垂らしながら遅れじものと車のあとを追懸けて來るのであつた。

三里も走つたか、小さな部落で止つた。そして其處には先發の下男の世話で馬が四疋用意されてあつた。いづれも丈の低い朝鮮馬で、首には鈴をつけ、赤や黄の布地で化粧してゐた。

馬に乘るのが大騒ぎであつた。勉君を除くほかは三人とも馬が初めてなのである。ただわたしは一二度乘せられた經驗が無いではないが要するにそれも荷物として載せられたに過ぎなかつたのだ。先頭が勉君、次が坂本君、妻、わたしといふ順序で、兎にも角にも出立した。鈴の音ばかりは賑かだが、乘つてゐる當人たちは甚だ穩かでない。第一、その小さな馬にめい〳〵力いつぱいにしがみついてゐる恰好と云つたら、何とも云へぬ滑稽なものであつた。わたしは殿であるだけに、そのめいめいの乘り振りを見て行かねばならず、何かと云つては笑ひ出した。

『それなら一つ先生の乘り振りを見てあげやう』

と、勉君が馬をかへしてわたしのあとになつた。

『いや、これは不思議だ、先生のはどうやら型に入つてゐる』

といふ。一度なり二度なり乘せられた事が役立つてゐたものと見える。どう見ても可笑しいのはあ

との二人である。劍道四段も此處では一向役に立たない。第一、しがみついたその五體の大きさが馬の背恰好より大きい位なのだからあはれである。妻の姿と來ては更に見もので、下手な競馬の騎手を見る樣に自分の顏を馬の頸に當て尻をばぐつと高くしてしがみついてゐるのである。

しやんらんしやんらんと鈴の音ばかりは明るくも賑かである。道は小松山と小松山との間を行くので、折々は首をちぢめねば小松の枝に引つかかりさうであつた。雉子がよく啼いた。一羽が一方で啼けば向うの松山で一羽啼く。非常にこのあたりこの鳥が多い所ださうである。路ばたいつぱい春龍膽の花の咲き亂れてゐるのも珍しく且つ美しかつた。妻の最も好む花なので、どうだどうだと呼びかけても返事どころの沙汰ではなかつた。相も變らず首は頸に、甲斐々々しく裾を端折つたお尻のみはともすれば鞍を離れて天上せむずる氣勢を示してゐるのである。こつくり〳〵と運ばれながら、何ということなく無性にわたしは可笑しくなつた。何を見ては笑ひ、彼を見ては笑つた。やがて勉君にもそれが傳染つた。二人の馬鹿笑ひの間にはしやんらん〳〵と鈴の音、間近の茂みからはけん〳〵、けん〳〵と啼きあげて雉子が幾度もまひたつた。高麗雉子といふので、雉子のうちでも最も美しい種類なのだださうである。

峠の樣な所を越ゆると海が見えだした。青やかに凪ぎ渡つた春の海である。

『此處らでお晝にしませう』

勉君が呼んだ。

馬をとりかへるなどの事あつて、程なくまた出立した。握飯と共にあふりつけた冷酒が意外に利いて、今度はこつちの尻も怪しくなつた。ことに登りより降り坂は乘りづらかつた。自づと笑ふ勇氣も抜けてこつくり〳〵と歩ませてゐると、今度は睡氣が出て來た。が、用心せねばならなかつた。今までと違つて路の左手は嶮しい傾斜となつて直ちに海に臨んでゐた。

睡氣ざましにわたしは大きな聲を張りあげて歌の朗詠を始めた。勉君もこれに和した。それ〴〵に馬の口をとつた四人の鮮人たちも初めは默つて聞いてゐたが、終には浮れてか何やら唄ひ初めた。恐らく土地の俗謠であらうが、殆んど鼻音ばかりから出來てゐる樣なその單調の節廻しを聞いてゐるとわたしはいつか眞面目に耳を傾けてゐた。しやんらん〳〵可笑しいなかにも自づと哀愁が催されて、わたしはいつまでもその節廻しに合つた。

その頃であつた、わたしは不思議なものを見出した。路の左手は崖となつて居る。崖の根は白い浪の鈴の音もよくその起りつ消えつしてをる磯であるが、磯の盡きた所は弓なりに灣曲した白砂の濱となつてゐる。そしてその向うは直ぐまた崎山で岩の黑々しい荒磯となつてゐた。磯と磯とに圍まれた入江の濱は小さいながらに美しい濱であつた。折しもいま引潮と見え、遠淺の眞砂の上にはだんだら折りに白々と波が寄せてゐた。その濱の手前、丁度わたしたちの通つてゐる岨路の下に當る磯の岩にわたしは不思議な

ものを發見したのである。

初めは人だともおもうた。が、どうも可怪(をか)しいと歌をもうたひやめて見てゐると、これはまたどうであらう、その岩の上に立つてゐたものは俄かに大きな羽根をひろげてまひ立つたのである。

『鶴！』

わたしは叫んだ。

と同時に更に驚いた事は、まひ立つた一羽につれて今まで氣のつかなかつた其處等の岩から一羽二羽と、終に三羽の鶴の鳥が豐かに豐かに大きな羽根をうちのして海の方に翔ひ出でたのである。

『鶴だ、眞鶴！』

勉君も叫んだ。

四人は馬を停めた。しやんらん〳〵の音もやんだ。鶴は暫く海の上を翔うてゐたが、やがてまた相引いてまひ返り、今度は磯つゞきの干潟の砂におり立つた。

朝鮮に鶴のゐることは聞いてゐたが、現在斯うして眼の前にまひあそぶそれを見やうとは思ひがけぬことであつた。

『これはこの邊に巢ごもりしてゐる鶴ですね、今時珍しいことです』

と勉君が說明した。

馬の頸から漸く首を離して妻もわたしの方を振返つた。顔は眞紅である。

しやんらん〳〵と一列はまた動き出した。

先刻の酒がまた出て來たか、異常の出來事に心が醉うたか、わたしは茫然と昂奮してゐたが、終に口から出まかせに卽興の歌をうたひ出した。

潮干潟ささらぐ波の遠ければ鶴おほどかにま
ひあそぶなり
遠干潟いまさす潮となりぬればあさりをやめ
て鶴はまふなる
うちわたす干潟のくまの岩のうへに眞鶴たて
り波あがる岩に
おほどかに一羽の鶴はまひたてり三つ並びた
るなかの一羽は

三首四首と出來るに從ひ聲をかぎりに歌ひあげた。いささかは聲自慢のわたしの聲が見苦しく慄へて出た。何事ぞ、と馬をとどめ海に向うて歌ひ直せば、更にも亂れた。歌を覺えると勉君がまたこれに和した。

二人して相歌ひながら、いつか崎山の崖を過ぎ、鶴の遊んでゐた白濱の緣にかかつて來た。鶴たちは早や我等の一行に氣づくと共に悠々と羽根をのべて白浪の立つてゐる背後の方の崎山の鼻へまつて行つた。歌をもうたひやめたわたしたち二人が漸くその濱に降りて來ると、其處にはまた異樣な光景があつた。坂本君と喜志子女史の二人は其處で競馬を始めてゐたのである。しやんらん〳〵と轡を並べてひた走りに走らしてゐる。而して坂本君の背は愈々平たくつぶれて馬背を掩ひ、喜志子女史のお尻はいよ〳〵高きを加へて太さまたこれに添ふべく見えた。

勉君が大きな聲を出してその二人の馬子を呼びかけたが、聞えぬのか言葉が通ぜぬのか、しやんらん〳〵とひた走りに走り續けた。我等二人の馬子はそれを見て何やら言ひ合ひながらげら〳〵と笑つてゐた。

漸く我等二人が追ひついて見ると其處は例の土饅頭式の家の十か二十も集つた一つの宿場となつてゐた。其處で馬からおろされた妻は半泣きの顏をしてぼんやりと一軒の庭先に立つてゐた。それを見ると我等の馬子も馬をつないで、妻の前に行つて何やら言ひながら頭を下げて、其處の家の中に入つて行つた。

『奥さん、あなたはヨボどもに何かおやりぢやなかつたですか』

勉君が訊いた。

『え、先刻お晝の時に一人に五十錢づつやりましたわ』

『それで解つた、彼奴等はそれで急に酒が飲みたくなつて夢中で馬を走らせたのですよ、御らんなさい、其處は酒屋です。』

且つまた五十錢といふ金は彼等にとつては並ならぬ大金なのださうである。現に今日一日の彼等の日當がほぼそれ位るのものだといふ。普通一日十錢そこ〳〵の錢で彼等は生活してるのださうである。

大きな椀で濁酒を啜つてる彼等に勉君は何やらきびしく言ひつけておいて、サテ我等だけぼつぼつと歩き出した。馬の腹を締めつけてるたせるか、皆の足どりが大分痛さうに見えた。

それ〴〵に顏を赤くし、しやんらん〳〵と四正の馬を走らせながらそれでも案外早く彼等はあとを追うて來た。いや〳〵ながらにそれに乘ると、また小松山の登りにかかつた。今度は隨分と嶮しい登りで、もう歌をうたふ元氣もなく、ひとの乘り振を見廻す餘裕もなかつた。ただ落ちまい一心に馬につかまつてるるのみであつた。見るともなく見廻す路傍の松林の小松には殆んど葉といふものが無かつた。今年、松毛蟲といふ害蟲がわいて、手のつけやうがないのださうである。

漸く峠に出た。思はず知らず大きな聲をあげたほど、其處の眺めは大きくまた美しかつた。紺碧に晴れ渡つた大海はやや傾きかけた太陽に向つてうち開け、海のところ〴〵に浮んでるる大きな島小さな島はすべてほのかに煙らひながら光と影とを含んで浮んでるた。

峠から少し下りかけると崎山と崎山とに圍まれた僅かの平地に例の土饅頭の家の四五軒ほどかたまつてるるのが見えた。其處が目指す竹林洞であるのださうだ。我等の馬の鈴音が聞えたか否か、家々から走り出て數人の人が一團になつてこちらを仰いでるるのである。

漸くに下りついてその別莊といふのの砂地の庭におり立つた。二郎氏は早や既に此處に先着して待ち受けてであつた。別莊とは云つても同じ樣な鮮人家屋に僅かに手を入れたもので、部屋は二つ、部落の一番高みに在つた。この竹林洞はこの家を入れて全てゞ六軒しかないのださうである。それ等の家屋を初め附近の土地、土地を圍んだ此處等一帶の松林等、全て二郎氏の所有に屬するものださうだ。

二郎氏かたの下男某、同じく勉君方の金朱述（チュスリー）等も先着してるて何彼と準備を整へてるた。やや驚いたのは今朝我等より僅か前に出立したチゲたちが早や此處に到着して荷物一切をおろし置き、既に歸り去つてるたことであつた。もつとも、近道もあるのだといふ。

部落中の女子供が庭先に集つた。立つ者、砂に坐る者、すべてしげしげと我等の一擧一動に見入つてるるのである。妻はこれらの子供たちに何か土產を買つて來てやればよかつたとくやんだ。それは今日これから歸る二郎氏方の下男に托して買ひ求め、明日また邑内から來る事になつてるると いふチゲに持たしてよこして貰ふことになつた。五軒の家に、數へたてて見れば二十人からの子供が

あるのださうであつた。

やがて庭に集つた此等の中から上衣は純白、裳(すそ)は黄色の絹の晴着をつけた三十歳あまりの小柄の女が一人出て來て叮嚀に我等に挨拶した。聞けばこの部落の差配をさしてある朴義千(パクイチョニイ)といふのの妻女であるのださうだ。言葉が通ぜず、唯だ笑顔をかはし合ふほかはなかつた。やがてその主人の義千(イイチョニイ)も殺した鶏を提げてやつて來た。妻女の二倍もある大男であつた。彼は怪しき日本語を知つてゐた。場所が場所であるせゐか、その日の晩餐は誠に興味深いものであつた。二郎氏初め我々まで立つて火を熾し、魚を料理し、持つて來た皿や茶椀を洗ひなどしてその席を作つた。

松葉焚く厨のけむり匂ふなりまだ灯ともさぬ

酒のむしろに

二郎氏は前にも云つた干拓事業其他、この島に渡つて以來幾多の困難に出會ひ、幾度か蹉跌し、はては自ら死をおもふ樣な場合に一再ならず遭遇した。さういふ場合、彼は家族をも除けて唯だ一人米と鹽とを持つてこの竹林洞のこの小さな家に籠つた。籠つて徐ろに自分の心を鎭むるのを常とした。半年から一年、この家から一歩も出でず、誰にも逢はないといふ樣なこともあつたといふ。

さう聞けばこの小さな家が一層なつかしいものに見廻された。夕方からはぱら〳〵と雨が來た。窓をあけると松原ごしに海が見え、靜かに寄せてをる小波の音も聞えた。

五月三十一日。

朝から靜かな雨であつた。

午前中、手傳つて貰つて二三十枚の揮毫をした。斯ういふ所に來て斯ういふ拙い字を書き散らすことかとそぞろに悲觀しながら、半裸體になり、コップの酒をあふりつけつつ片附けた。また、雨の間を見ながら磯に出て小さな貝を拾つたり、岡に啼く雉子の所在を探したりした。

部落のヨボたちがいろ〳〵のものを持つて來て呉れた。魚や（名を忘れたが內地に見られぬ種類があつた）蟹や、貝などを。前に云つた樣なことからか、二郎氏はこの竹林洞のヨボたちを大變に可愛がつて、家も畑も無料で借してやり、燃料なども附近の山のを自由にさしてあるのださうだ。で、氏が此處に來れば斯うして歡迎の意を表するのだといふ。

妻の註文の菓子が來た。金朱逑(チュスリー)が大きな聲で呼び立てると五軒の家から子供は勿論大人までもついて出て來て庭に集つた。子供だけでまさに二十人からゐるのである。目分量で一人々々に分けて行くとあとではや、不足を感ずる位ゐであつた。

夜はまた靜かな酒、ヨボたちの贈物で御馳走も豐かであつた。

六月一日。

晝も夜も、何といふことなく夢の樣に暮してしまうた。不意に斯うして珍しい所へ來てゐる事を考へて見るとまつたく夢の國に來てゐる樣なものであつた。

雉子頻りに啼き、背戸の松には鵲がかしましかつた。

六月二日。

今日は歸る日である。舟をしたて、それに乘つた。あはれであつたは朴義千かたに勉君のやつて來た犬のシエリーが我等の舟の出るのを知つて聲を限りになきたてたことであつた。あとを追ふだらうといふので豫じめ義千の家に固くつないでおいたのであつた。

二艇の櫓で漕ぎ出して一つの崎の鼻を廻るまで濱には五軒の人が總出で立つてゐた。そして終にこの夢の樣な村も見えなくなつた。一時間あまり漕いで金甲里といふ部落に着くと打合せてあつた自動車が來てゐた。

邑内の勉君方に歸り、明日出立の用意などした。夜は警察署長の宅に招かれて馳走になり、醉うて歸れば勉君方にはまた先日來顏馴染の數人の人が酒を煮て待つてゐた。

六月三日。

竹林洞を夢の國だと言つたが、更に考へて見るとこの珍島全體がまたそんな感じのせぬでもなかつた。地圖の上でもなか〳〵に見出しかぬる樣なこの島に緣あればこそよくも來たものだと思ひつゝ、多勢の見送りを受け、海倉里から先日の發動船に乘つてこの島を去つた。

左樣なら、珍島。

左樣なら、珍島の人々。

その二　金剛山

六月十三日。

もうこれから此處の驛に行つてゐたのでは間に合ひますまい、いつそ二驛先の清凉里まで此儘自動車で飛ばしませう、それが確かだと市山盛雄君は言ひながら運轉手にその樣言ひつけた。一週間の京城滯在を終へ、けふこれより我等夫婦は金剛山登りに赴かうといふのである。

清凉里驛ではゆつくりと間に合つた。市山君夫妻に滯在中の禮を述べ、折柄の好晴を喜びながら乘車した。丁度午前九時であつた。

汽車の左右に一帶の細長い平地があり、それを挾んで二つの山脈が連亙してゐた。山はこの國特有の岩山であるが、やはらかな日光を受けて峰から峰にかけ、奥深くうち煙つてゐる樣に見えた。うとうとしてゐると或る驛でわたしは呼び覺された。そして一人の婦人から正宗の一升壜を手渡された。婦人は昨日京城の歌の會に出席してゐた人で、この汽車で我等が今日此處を通ることを妻から聞いて待ち受けてゐられたのださうだ。此處の驛の驛長夫人であつた。驛は東豆川と云つた。

鐵原驛下車、午前十一時四十分。二三驛前からすつかり四邊の高原風になつたのを感じてゐたのであるが、此處に降りて見ると一層それが明らかになつた。うち渡す野原、それを限る山脈、ばら〳〵に散在しながら地にくつ着いてゐる樣な家屋、すべての感じが高原である。乘換の時間を急ぐので、驛で賣つてゐる辨當二つを買ひ、ふところにねぢ込んで次の電車に乘つた。

走り出した電車のなかで辨當を開いたが、近來の癖で一向に食慾なく、唯だ東豆川驛々長夫人の贈物に今更ながらに感謝してそれをのみ嘗め味はうてゐると、わたしとさし向ひに乘つてゐた一人のヨボが、ヨボの齡は誠に解りにくいが中年過ぎに見える立派なヨボが、膝の上に置いてあるわたしの辨當を指ざして突然何やら言ひ出した。にや〳〵しながら頭を下げてゐる姿にやや驚いたが、これがほしいのかとわたしは反問した。双方とも言葉は通じない。『左樣です』とそれを傍から見てゐた年若いヨボが笑ひながら通譯した。わたしは辨當を渡した。それを見ると今度は一人の女のヨボが、いきな

り妻の前に出て來て同じく辨當を指ざしながら何やら言つた。我等は相顧みて苦笑したが、妻も同じくそれをその女に遣つた。妻はまだ自身で箸を動かしてゐたところであつた。

電車は炭甘里といふ部落で終點になつてゐた。降りると直ぐ驛前に金剛山行の乘合自動車が待つてゐた。幸ひ我等夫婦のみにて發車、快き速力で走り出した。これより二十二里の山路を走らねばならぬのだ。

この附近で幾つか通り拔けた部落は何やら古風で物寂びてゐていかにもこの國土着の人たちの生活を見る思ひがした。京城や釜山附近のそれとずつと變つて感ぜられた。ことに內地ならば居酒屋とも云ふべき店に、多くはみな狹苦しい緣側に飮みものなり喰べものなりをてんでに持ち出し、顏を眞赤に染めてゐるあたり、わが德川時代の道中記を思はすものがあつた。

途中で二人ほど同乘者が出來、車はひた走りに走つた。上手なのか亂暴なのか、隨分と膽を冷やす走りかたをやつた。橋の落ちた所が一二ケ所あつた。そんな所をば彼は構はずざんぶ〳〵と突き進んで徒涉した。そして遂に鳥道里とかいふ部落にさしかかつた時、故障を起して止つてしまつた。

それを直すのになか〳〵手間取つた。小用をたすとてか二人の相客が先に降り、我等も降りて背を伸した。丁度部落の眞中あたりから向う地にかかつた橋の上で二人の子供が釣りをしてゐた。行つて見ると岩魚（いはな）に似てそれでもない樣な斑（ふ）の美しい魚を四五匹ほど釣つてゐた。わたしは試みに十錢銀貨

を出して、その五匹の魚と替へようと言つてみた。にやにや笑つてゐたが、やがて橋の袂の煙草屋から一人の大人が出て來て、子供に何やら言つた。子供は木の枝を折つて來て魚をつなぎ、わたしの方にさし出した。わたしは喜んで十錢銀貨を彼の掌に置いた。

魚をさげ、自動車に歸つてみると二人の相客は既に乘り込んでゐたが、妻がゐない。車の修繕もほぼ出來たところである。困つて其處等を見廻してゐると、車のめぐりに集つてゐたヨボの中の一人が何やら言ひながら向うを指さす。行つてみると、例の土饅頭式の、土を塗りかためた樣な一軒の家屋の中に入り込んで何やらやつてゐるのを見出した。

中では一人の若い女が機を織つてゐた。機は內地の田舍に今でもまだ殘つてゐるかと思はれる形の、足で下の板を踏み、手で杼を投げて織るものであつた。半ば織られてゐるのは純白の麻であつた。機にかかつてゐる女も美しかつたが、その側に立つてゐる十歲位ゐの娘の上品な美しさは全く意外であつた。そしてその娘の手には妻が手提の中から取り出したに相違ない西洋菓子が握られてゐた。言葉の通じない三人は唯だにこ〳〵と笑ひながらさうして向ひあつてゐるのであつた。

勇敢な自動車は更に勇を鼓して走つた。そして一つの峠のやうな所を越すと、やや思ひの外の賑かな部落に出た。末輝里と云つた。はや夕方で、うす赤い日光がこの谷間の宿場の屋根を染め、立ち昇る煙を染めてゐた。わたしは何やら身に浸みて來る寂しさを感じながら、自動車にまで持ち込んで來

た先程の一升壜を口うつしに飲み始めた。酒は髭に滴り、襟に流れた。それでもいつかわたしの眼は明らかに澄み、心は爽かに冴えて來た。

木立の立ち込んだ中の長安寺ホテルに着いた時は七時を夙うに過ぎてゐた。六時間ほど乘つてゐたわけである。やれ〳〵と背伸びしながら通された部屋は、これはしたり、西洋間であつた。和室はないとの事である。浴場も、便所もすべてそれであつた。

サテ、これで食堂に出かけて食事をとるとなるとわたしには大いに苦手であつた。洋食も好きでなし、第一、其處では落ち着いて飲めないと思うたからである。幸ひわたしは京城の知人から此處のホテルの伊藤支配人に宛てての添書を持つてゐた。斯くして夕食だけは自室に運んで貰ふことになつた。

ホテルとは云つても山中の、謂はば登山客のために設けられた簡易なものである。二つのベッドを置いたほかは、身をそばめなくては歩くにも困るほどの室內の狹さである。その狹い間に小さなテーブルを置き、膳を載せた。さうした後、一人分はどうやら椅子が置けるが、一人はベッドの端に坐るか腰かけるかせねばならなかつた。

電燈が——よくも斯んな山の中に點つてゐるものと思はれた電燈が——たび〳〵暗くなり明るくなつた。窓のガラスに、ガラスのそとの樹木にあたる風の音が、何やら雨氣を含んで居る樣に聞きなされた。

わたしはベツドの端にあぐらをかいて、サテ徐ろにコップを取つたが一口二口と飲んでゆくうちに何か知ら可笑しさがこみあげて來た。樂しいと云ふか、寂しいと云ふか、やれやれ疲れたといふか、何か知ら馬鹿々々しいといふ感じか、先づそれらが一緒くたになつた笑ひであらう。自分の眼の下に、ベツドは椅子より高かつたから——しよんぼり椅子に腰かけて、ぼそ〳〵と何やらはさんでたべてゐる妻の姿を見ると、耐へかねて吹き出した。妻の姿ばかりでなく、電燈も可笑しければ、ベツドも可笑しく、部屋の隅に窮屈に取りつけてある洗面臺も、その上の水さしも、何も彼も可笑しかつた。苦しいばかりに笑つてゐると、せうことなしに妻も笑ひ出した。但し、半分は泣いてゐたのかも知れない。

六月十四日。

おもひのほかの天氣であつた。賴んでおいた案内人が來たので、二人とも草鞋に足を固めて發足した。

溪沿ひの路を登つて行くと、案外にこのあたりは樹木が深い。樅の落葉を踏んで歩いてゐると、不圖「朝鮮」を離れて心は信州か上州あたりの面影を思ひ浮べるのであつた。

朝鮮に樹木乏しいことをば噂に聞いてゐたが、それは豫想以上であつた。これにはいろ〳〵理由があるのださうだが、單にわたしの見た事のみでも或る所では女が漸う伸び始めた松の木のしんをせつせと摘んで煮に入れてゐるのを見た。これを喰ふのださうである。出るから出るからしんを摘まれたのでは松も育ちやうがないであらう。しんばかりか、しんが無くなると幹の皮を剝いで喰ふのださうである。皮を剝がれて、脂の出てゐる哀れな松の木を幾所でもわたしは見たのであつた。また、漸う伸び立つた畑の麥が葉と莖だけ青やかに立ち茂つて肝心の穗のみは摘み去られてゐるのを見た。あと五日か十日も待てば立派に成熟する麥を待つことをしないで、未熟の青い穗を畑から摘みとつて喰つてしまふのださうである。斯うした國民である。電車のなかでひとの喰べかけてゐる辨當をねだつて平氣で喰ふのも無理はないと思うた。吳れと云つてねだるのはまだしも、わたしは僅かな朝鮮旅行の間に二度の盜難に遭うた。一度は危ふく未前に防いだが、一度はうまくやられた。而かも殆んど眼の前に見てゐてやられたのである。

程なく長安寺に着いた。伽藍はなか〳〵に大きく、大雄殿の額を掲げた本堂のほかになほ二三棟の堂宇が立ち並んでゐた。寺の山門とも見るべき梵王樓といふのの階上には十人あまりの僧侶だか俗人だかがいぎたなく寢亂れてゐた。美しいのは庭に咲いてゐる芍藥の花であつた。庭の土が殆んど眞白なこまかな砂利なので、一層この花が浮き立つて見えた。

咲き盛る芍藥の花はみながらに日に向ひ咲け

り花の明るさ
長安寺の庭の芍藥さかりなり立ち寄ればきこ
ゆ花の匂ひの
芍藥のなかば咲きたるつぼみたるとりどりの
花にあそぶ蟻蟲
長安寺梵王樓のたかどのに寢亂れたりな眞晝
を人は

長安寺を出で溪に沿うて登ること二十町ばかり、表訓寺があつた。長安寺よりは規模やゝ小さく、やゝ古びて見えた。長安寺も此處の寺も今より千四百年前、新羅時代の創立で當時は金剛山中に一百八ケ寺が建つてゐたのださうである。山全體を一個の靈場と見做したものでもあつたらう。但し現存するものも既に當時のままのものではないといふ。

表訓寺の庭も芍藥の盛りであつた。

表訓寺御堂の裏に廻りたればこは眞盛りの芍
藥の園

それから正陽寺といふへ登つて行つた。其處への途は急に嶮しく、爪先登りの急坂であつた。十町あまりに大汗をかいて、漸くに着いた。

長安寺、表訓寺、ともにその寺の在る位置が秀れてゐた。背に奇峰を負ひ、溪を隔てゝ秀嶽に對するといふ風であつた。が、正陽寺はやや趣きを異にしてゐた。この寺も山を負うては居るが、前面が遠くうち開けてゐた。其處からは內金剛に於ける秀れた諸山嶺を居ながらにして展望することが出來た。

遮日峰、白馬峰、望軍臺、日出峰、月出峰、毘盧峰、其他あれこれと案內人が指したが、わたしはたゞ半ば茫然とそれ等の峰から峰を眺め渡したに過ぎなかつた。峰から峰は、この快晴にほのかな霞を帶びて見えた。

寺は前の二つよりずつと小さかつた。人の居る氣配もしなかつた。たゞ本堂の片隅に一人の人並はづれて大兵の坊さんが坐つて、せつせと何やらやつてゐたが、我等の案內人が聲をかけると、フイとこちらを振り向いた。それを見てわたしは思はず眼を見張つた。その坊さんの顏はまさしく血みどろに染つて見えたからである。

坊さんはいま獨りで造花をつくつてゐるところであつた。そしてその花を染めるところであつた。その手の赤繪具が汗を拭くたびに顏や頸にくつ着いて血と見えたのである。案內人の聲に應じた坊さんの聲はまたまさしく破鐘（われがね）の樣な聲であつた。何やら言つてしまふと今度は獨りでかんら〳〵と打ち

笑うた。我等も連れられて笑うた。案内人の言ふ所によるとこの坊さんはもう八十幾つとかの高齢であるのださうだ。それで平氣で此處の山坂を登り下りしてゐるのだといふ。

乏しいながらに此處にも芍藥の園があつた。僅かの違ひで、麓の長安寺、表訓寺等の花は滿開であつたに、此處まで登つて來るとまだ蕾んだままであつた。

麓なる寺々の芍藥咲きたれど正陽寺のはいまだ蕾める

正陽寺から下ると路は全く溪に沿うた。といふより一つの深い峽谷に入り込んだ。所謂萬瀑洞八潭なる景勝が其處から始まるのだ。

丁度その入口に當る大きな一枚岩の片隅に一人の鮮童(チョンガー)が一人して茶店を出してゐた。案内人の言ふままに其處でお晝をつかふことにした。案内人も鮮人であつたが眞面目なよき青年であつた。

其處で麥酒をとつて飲んでゐる間に妻は早や食事を終へ、廣い岩の上に出て遊んでゐたがやがて何やらを見附け、頻りに興に入つてゐる。行つて見れば岩の凹みに湛へた水の中に澤山の蛙が遊んでゐるのだ。その蛙、大きさは先づ人の親指位ゐで、背は青く、まだらの黑い斑を帶び、その腹同じく斑を帶びながらも色は眞赤なのである。それ等が浮びつ沈みつ、口と口とでつつき合ひ、背に乘りして遊んでゐるさまは如何にも可愛いいものであつた。案内人に訊けば鮮語でキヤグリと云ふと答へた。

此處の岩ばかりでなく、少し大きな岩となると殆んど悉くに何やらの大きな文字が彫つてあつた。大きいのは一文字で一坪二坪位ゐの大きさに刻み込まれ、刻み込まれた深さも隨分と深いものがあつた。中には何々仙人が天より降つて刻んだといふものなどもあつた。我等素人の眼に見てもなか〳〵優れた書體と見ゆるものがあつた。

所謂何々潭(なになにたん)がその邊から始つた。黑龍潭、琵琶潭、碧波潭、其他みな名前ばかりの至極下らぬ小さな瀧と淵との連續であつた。その潭を二つ三つ見て過ぎたあたりで溪を渡り、普德窟といふへ登つて行つた。

この登りは先の正陽寺の登りより更に嶮しかつた。唯だ、半分ほどの近さであつた。辛くも登りついた斷崖の中腹にその寺はあつた。庫裡と本堂との二棟が斷崖に沿ひ上下二段に分つて建てられてあつた。庫裡の前の岩の上には蕗の葉に似たものが一杯に乾してあつた。それを踏まねば通れぬ岩の狹さであつた。

庫裡には痩せてたけ高い僧が唯だ一人ゐた。着てゐる白い法衣はうすぎたなくよごれてゐるが、氣品のある僧であつた。庫裡と云つても僅かの岩の襞の樣な所に建てられてあるので極めて狹いもので あつた。狹い中に何やらごたごたと押し込んであつた。

本堂は一段下になつてゐた。そしてこの本堂は僅かに一方の礎を斷崖の岩に置き、半分は斷崖から

はみ出し、一本の大きな柱で支へてあるのである。本尊は觀音樣であつたかとおもふ。お經を上げて貰ふて居ると、蠟燭の灯のまたたきがいかにも寂しいものに見えた。本堂から庫裡に歸らうとして嶮しい石段を登りながら不圖振返つて見ると、いま通つて來た萬瀑洞の峽谷が眼下に見下された。溪間に樹木の深いのが、周圍がすべて岩山であるだけに一層眼についた。

寺を出でて嶮しい坂を降り、また溪に沿つて登つた。今までにも一二度眼についたのであつたが、この邊には栗鼠が甚だ多かつた。縞の斑のある、可愛い姿である。ちよこ〳〵と路を横切つては木にのぼり、岩にかくれた。

登ること數町、また一つの寺があつた。摩訶衍といふ。構への大きな寺であるが、古び荒んでゐた。此處の庭にも蕗の葉に似たものが乾しひろげてあつた。僧たちの肝要な食物の一つなのであらう。寺の庭に立つて見廻すと四方の空を限つて聳えてをる岩骨の山々が幾つとなく折重なり、又は相伴ひ尾を引いて西に東に走つて居る樣にも見え、その間に醸し出される山氣がひし〳〵と、身に迫つて來るのを覺えた。

萬灰庵といふ小さな尼寺の庭を通りすぎると、本堂に一人の病人が、寢せてあつた。こちらを向いて伏せつてをる顏の何といふ靑いことであつたか。一人の尼が枕許に坐つてゐた。麓の村から祈禱に來てゐるのであらうとのことであつた。

いよいよけふの日程の最後である白雲臺の登りにかゝつた。初め疎らな森の中を登つてゆくのであつたが、路極めて嶮しく、兩手をかけつつ攀ぢねばならなかつた。而していつかその木立も盡き、路も盡きた。一面の岩壁に突き當り、其處からは其處に垂らされた一條の鐵鎖に縋つて頂上まで登らねばならぬのであつた。

我慢しい〳〵其處まで隨いて來た妻も一二度は鎖に手をかけてゐたが、遂に諦めて、其處の岩の根にしやがんで眼を伏せてしまつた。そして其處で待つてゐるといふ。

案內者は先に、わたしはあとに、鐵鎖につかまつた。僅かな距離ではあつたが、充分に膽を冷やし終つて辛くも登りついた。其處は極く狹い尾根となつてゐた。尾根づたひに右にとろとろと下ると、其處はその尾根の、卽ち白雲臺の峰の一つの絕端となつてゐた。其處からは急に嶮しく切れ落ちた斷崖となつてゐるのである。

丁度、夕日の時であつた。いま登つて來た萬瀑洞の峽谷は早やとつぷりとかげり終つて冷たく澄んだ色を湛へてゐた。斯うして見下せば愈々木深い峽谷であつた。峽谷の向う、毘盧峰から月出峰望軍臺にかけての內金剛第一の大きな山系もまた悉く陰影を含んで薄墨色に、淡紫色に、空を限つて連り聳えてゐた。高山に登つて高山を知る、これらの峰々が一層高いものにうち仰がれた。

不圖振返つてわたしは思はず大きな聲をあげた。其處にはまた今まで豫期しなかつた秀麗無双の一

高山が滿面に夕日を浴び、我等に臨んで聳えてゐたのである。年若い案内人はわたしの驚きをうち笑うて見やりながら、

『これ、衆香城峰です』

と教へた。成程、地圖にはあつたのだ。唯だ、これほどの山とは知らなかつた。

案内記には斯う書いてある。

（前略）金剛山の主要岩石は花崗岩であると斷定出來るのです、此等の花崗岩は主として粗粒狀をなしたる黑雲母花崗岩に屬し外觀は極めて堅さうでありますがその石理が割合に粗いために比較的風化作用を受くる事が易く、（中略）彼の變幻極まりなく端倪すべからざる怪奇の岩體が現出したのであると考へられます。（後略）

花崗岩から成つた山といふことの最もうなづけるのがこの衆香城峰である。滿山殆んど白く見えるが、眼に見えぬ小さな山襞などの關係か、その白色にかすかな光が宿つてゐるのである。ところ〴〵に松など生えてゐるらしく、それはほのかな文（あや）となり影となつてゐる。

わたしは我知らず帽子を脫ぎ、山に向ひうち振つて、敬禮した。前面の山、背後の山、光の山、影の山、その間に自づと流れ出でて空に滿ち山に滿ち、更に山から山の間に落ち沈んで居る幾多の峽谷に滿ち、油然として天地に湧き動いて居る自然の靈氣は自づからわたしに眼を瞑らしめた。

まなかひに聳え鎭もりたふとけれをろがみ申す衆香城峰

幸ひ、腰には二合瓶を提げてゐた。山、山に向うて先づ數滴の神酒を捧げ、さてみづから打ちあふつて心を鎭めた。眼を瞑づれば心の奥には一切の山の姿が光を帶びつゝ來り宿つてゐるのである。

岩角につかまつて慄へてゐるであらう人をおもふと、さう永く其處に留つてもゐられなかつた。もう一度、前の山うしろの山、全ての山河に頭を下げて其處を去つた。

歸りは步みは速かつたが森蔭の宿にはもう電氣がついてゐた。今夜は流石に笑ふ勇氣も無かつた。」

六月十五日。

朝、わたしは不幸にもひどく勞れてゐた。昨夜中烈しい下痢に襲はれてゐた、めである。昨日、溪沿ひを步きながら水好きのわたしは無闇にこれを掬つて飮んだ。それがあたつたものらしい。

昨日の案內人が來たが、詫びを言ふて歸つて貰つた。今日は實は昨日正陽寺や白雲台から溪を距てて、正面に望んだ諸山嶽を經巡る筈であつたのだが、これはどうにもならなかつた。妻も寧ろそれを喜んだ。

晝近く、大分元氣が出て來た。さうなれば狹苦しい部屋に寢てゐるのも辛かつた。散步のつもりで

獨りして出かけた。昨日の路を長安寺よりもう少し登つた所に對岸の山から出て萬瀑洞の溪に落ち入るいま一條の溪のあるのを見ておいたので、岩づたひに萬瀑洞を渡り、その小さな溪の方へ入つて見た。

これもまた岩山の間を穿つて流れてゐる溪である。路とてもないので、人の往來もなく唯だもう靜かであつた。とある岩蔭に休んでゐると、偶然か故意にか、ツイわたしの近くまで例の栗鼠がやつて來た。あとを追うて、もう一匹やつて來た。岩の頭から岩の蔭へ、または木から木へ、敏捷に走り廻る。自づと微笑まねばならぬ可愛いい姿である。其處へ、いま一つあらはれた。鵲である。これはまた例の聲で啼きたてながら、二疋の栗鼠のあとをせつせと追うてゐるのである。

栗鼠ふたつ溪間の岩に遊べれば鵲も來て戯れむとす

此處等の溪間にいろ〳〵の花が咲いてゐた。をだまき、野ばら、うつぎ、其他。なかで最もわたしを喜ばしたのは山木蓮の花であつた。木蓮とはいふが、形小さく、寧ろ辛夷（こぶし）の花に似てゐた。辛夷に木蓮のふくらみを持たせ、そのいづれよりも淨らかに且つ白かつた。ことにその匂ひの高さは木蓮にも辛夷にも無いところであつた。この花が咲いてをる所に通りかかるとあたりの木の間がほのかに匂ふた。

自づと遊びすごして、夕方宿に歸つた。

夕食は伊藤支配人の馳走で、裏庭の溪に臨んだヴエランダに座を作り、珍しく牛鍋をつつくことになつた。溪を距てた向うの山には月の光が洽ねかつた。

六月十六日。

朝の食堂はわたしも嫌ひでなかつた。流石に朝は例の飲物をも簡單に濟まし、麪包の輕いのもよかつた。いまこのホテルには一組の西洋人が滯在してゐた。英國人とかで、老母に廿四五歳の息子、その妹の三人連れであつた。母も、兄も、妹も、みな上品で快活であつた。折々兄と妹の擧ぐる笑聲にはこちらも自づと微笑を誘はれた。

九時、ホテルの人々に別れを告げ、自動車にて新豐里といふに向うた。先日通つた末輝里に出で、其處より右に曲り、十一時頃新豐里に着いた。其處には豫ねて打合せてあつたので溫井里の宿屋嶺陽館より番頭岩佐君が迎ひに來てゐて呉れた。

其處より徒歩、溫井嶺の登りにかかつた。頂上にて晝食、やがて下る事十町ばかり、道を折れて左に入り、岩を穿つて作られた小徑を登つてゆくと程なく山の尾根に出た。

尾根に出ると共に俄かに眼前が打ち開けた。尾根の向う側は思ひがけぬ大きな峽谷となつてをり、

峽谷を距てて例により不思議を極めた幾多の峰巒が相競ふが如くに峙ち聳えてゐるのであつた。この山塊が有名な萬物相であるのださうである。萬物相の名は前から聞いてゐて、金剛山卽萬物相の様にも想うてゐたのであつたが、やや落膽した。怪奇は怪奇であつても山々の形が、山と山との間に醸し出さるる空氣が、何となく乾いて見えた。崇厳幽邃の氣に乏しいのを思うた。わたしにとつては一昨日の白雲台の眺めの方が遙かに親しいものであつた。

此處は舊萬物相、新萬物相はまだこの谷の奥に當ると聞いたが勞れてゐるし、行くのをやめた。尾根を越えて溪に下り、更に溪を下つて道に出た。道は溪に沿ふた。寒霞溪と云ふ。夕立に追はれながら溫泉地溫井里に入り、嶺陽館に草鞋をぬいだ。

宿の溫泉はよく澄んで、溫度もよかつた。永い間、深山の中に在つた様なおもひもほぐれて自づと心の明るむを覺えた。

六月十七日。

今日は一日休息することにきめておいたのでゆつくりと休む。きめておかなかつたにせよ、今日のわたしには草鞋は履けなかつた。烈しい下痢のあとにとつて昨日の一日は隨分と無理であつたのだ。運わるく、風邪氣も出て、熱を覺えた。

なほ運わるく明日よりこの土地にこの江原道小學校敎師の講習會が開かれるとかで、われ等の宿にも二三十名の敎師たちが泊り合せてゐた。年輩などから見て相當幹部どこの人たちと見受けらるるに、その酒の上の馬鹿騒ぎ一方ならず、悉く閉口した。

六月十八日。

もう一日休むことにした。

宿の部屋からやや左手前面に水晶峰といふが聳えてゐた。日光の具合などでは本當に水晶の山かとも思はるる位ゐにうす紫に霞んで見えた。思ひがけなくその山から郭公の聲の落ちて來るのを聞いた。

うち仰ぐ岩山の峰に朝日さし起りたるかも郭公の聲

筒鳥も啼いた。

敎員連の騒ぎ、いよ〳〵きたなし。

六月十九日。

奮發して草鞋を履いた。番頭の岩佐君、わたしの健康を氣遣うて自から案内に立つて呉れた。幸ひ

に好晴である。病人のつもりで、ゆつくり歩いた。

半道も歩いたかと思ふころ、一つの峠に出た。極樂峴といふ。峠を降りつゝ、見下すと其處に一つの大きな峽谷が見えて來た。卽ち九龍淵の峽谷である。谷の奥は霞んでゐた。

降りつくした所に神溪寺があつた。長安寺、表訓寺などと共に金剛四大寺の一であるといふ。庫裡の前の庭に三四人の僧たちが寄つて何かしてゐる。見ると岩茸といふ干乾び切つた茸を席の上に積み、頻りに水を注いで揉んでゐるのである。また、庭に一本の菩提樹があつた。堂も庭も乾いてゐたが、そのなかに不思議な寂びがあつた。

更に普光庵といふ寺に寄り、それを過ぎると路は全くの溪沿ひとなつた。右も左も、同じやうな岩山が並び走つてゐるのである。既に集仙峰彩霞峰世尊峰觀音峰普賢峰等の諸峰を見て過ぎたわけだが、何しろ一萬二千峰と號せらるゝそれらに一々觀察と記憶とを持つことは困難である。たゞわたしは二並びの屛風の樣にこの峽谷を挾んで並行してゐる山嶽の嶮しい姿と、その嶮しい中に云ひ難い明るさと愛らしさのあるのを眺めつゝ歩んだ。嶮しい山に愛らしさといふのは可笑しいが、確かにさういふ所がある。これは金剛山全體に對して言へる言葉かも知れない。

此處の峽谷にもまた山木蓮の花が咲いてゐた。そして度々栗鼠も出て來て、首をかしげ瞳をくるめかして我等を迎へた。山木蓮の花は全く好い、花の姿も、その匂ひも。

たぎつ瀨のたぎち流るる水のたま珠より白き
山木蓮の花
この淵の靜けきにものの浮びたれ枝のままなる山木蓮の花

例により仰止臺、金剛門、玉流洞、其他の名所があり、やがて左手に飛鳳瀑を仰いだ。

この飛鳳瀑は變つた瀑であつた。何十丈といふ高さであらう、溪の岸に聳えて居る廣やかな大岩壁の頂上のまんなかどころより迸り出た水は初め眞白に輝きながら一團々々となつて落下して來るのであるが、餘りにその頂上の高いためか、水の量の乏しいためか、途中で右に左に折れ靡きつゝいつしか岸壁の面に迷ひ動く狹霧となり、終にはほの〴〵と姿を消してしまふてをるのである。末廣がりになつて、ほの白くその末を消すあたり、まさしく鳳の舞ひ立たうとする姿に似てゐるのである。

妻はこれを香の煙にたとへた。また、然りである。彼女の歌。

たち昇る香のけむりかひとすぢにありとも見えで降りくだる瀧

其處から九龍瀑は近かつた。我等の登りつゝある峽間の迫り極つた正面の岸壁にそれは懸つてゐるのであつた。

流石にこれは好かつた。高さ百七十餘尺、水量もまた豐かで、いかにも瀧らしい瀧であつた。瀧と相對する懸崖の裾、やゝ小高き所に掛茶屋が出來てゐた。其處に登り、この瀧に對した。

瀧の上、瀧の落ち口の上流をなす溪間に相次いで八つの深い淵があつて上八潭（かみはちたん）と云ふ。昔、その淵の一つ〳〵に、而して九龍瀑の瀧壺をも加へて九つの淵に、それ〴〵龍が棲んでゐたのだといふ。岩佐君、上八潭に登りませうかと誘ふ。わたしたちは各々兩脚を撫でつゝ謝辭した。

この溪の岩の面にも到るところ大小さまざまの文字が彫つてあつた。ことに九龍瀑の落下してゐる斷崖の面にまで、仰々しくいろ〳〵と彫り込んであつた。そゞろにうち眺めつゝこの俗惡なる趣味の我が日本に傳はらなかつたことを感謝せずには居られなかつた。

食事を終へ、我等はその瀧壺の側まで行つて見た。藍の色深く湛へて、底も解らない。瀧の飛沫が冷やかに面を撲つた。

感心に妻もさほど弱らないで、夕方宿に歸り着いた。往復六里の山道であつた。

六月廿日。

もう二三日此處の溫泉には滯在するつもりでゐたが、折惡しく講習會と落ち合つた。いろ〳〵と氣を揉んで呉れる宿の人たちにも氣の毒なので、日取を繰りあげ、今日海金剛（うみこんがう）を見、そのまゝ元山の方へ赴くことにきめた。忙しいなかをまた岩佐君が案内かたゞ〳〵長箭（ちやうせん）まで見送つて呉れることになつた。

午後一時、自動車にて溫井里を立つ。道もよかつたが、非常な速さであつた。途中、三日浦といふに寄つた。丘とも小山とも云ひたい巨巖の列にとり圍まれた湖水で、周圍三里、見た所は小さいが、そして四邊に樹木とてもないのであるが不思議におちついた靜かな湖水に感ぜられた。何とかいふ仙人たちが此處に來て歸るを忘れたとの傳說があるといふ。

高城といふ宿驛に市がたつてゐた。例により鮮人たちのおめき叫ぶ賑かさを珍しく見やりながら通り過ぎて海金剛に着いた。

內金剛（うちこんがう）、外金剛（そとこんがう）、海金剛（うみこんがう）と並稱されてゐるので多少の期待をば持つて來たのであつたが、悉くがつかりした。海珍しい山地の人ならばともかく、我等には何處が果して海金剛だかわからぬほどであつた。

引き返して、途中から長箭港に折れた。或る宿屋に寄り別盃を擧げむとしたに岩佐君靴をも脫がず、その自動車にて溫井里に歸り去つた。

そのあと、汽船の出るまでの三時間が無聞に淋しかつた。妻に强ひて共にこの佗しい漁師村を散步したり、酒をとり寄せて飮んで見たりしたが、身ぶるひの出る樣な淋しさがどうしても拔けなかつた。急に泣きたくなつたり笑ひたくなつたりするのはまさしく身體の疲勞を語るものだと思ふと、またそ

れが寂しかつた。六時近く出帆、獨り甲板に出てゐると、海には意外に浪があつた。雨を含んだ重苦しい空模様であつた。

吹きつくる風に身をそばめつゝ、早や暮れかけてうす暗い叢石亭を見て通つた。此處の海岸はわたしには海金剛よりまだましだと思はれた。

甲板から室内に入つて見ると妻は烈しい船暈で、身をうち曲げて苦しんでゐた。

岬の若葉と雨

庭さきから松林を横切つて濱へ出る。其處の駿河灣を距て、眞向うに見えるのが伊豆の大瀬崎である。空が晴れて風のある日など、崎のはなに立つ浪の見えることがある。濱から三里ほどの沖に當るさうだ。沼津の狩野川の河口に在る丘陵、牛のねてゐるのに似てゐるといふので牛臥と呼ばれてゐるが、その牛臥とこの大瀬崎とが相對して、奥に靜浦、江の浦の奥深い見ごとな入江を圍んでゐるのである。この入江沿ひの海岸をぶら〳〵歩いてみたいものだと思ひながら、なかなかよう果さなかつたが、ツイ先日、一巡りめぐつて來た。例により草鞋ばき、急に晝から出かけた。ひとつは病後の脚を試してみる氣もあつた。

門を出ると直ぐ千本松原のなかの路にかゝる。この路は狩野川の河口から起つて、富士川の河口に終り、そのあひだ長さ四里、幅二三町を沿つてゐる見ごとな松原を縱に貫いてゐる路である。昔はこれを甲州街道と呼び、東海道より以前に出來てゐたものださうである。『伊賀越道中双六』で、沼津の平作が悴の重兵衞に河合又五郎の行衞を訊いて自殺したのがこの甲州街道であつた。

松原のなかの若葉が美しかつた。楢、櫨、樗、玉樟等の若葉が、むき〳〵の色を湛へて萌えたつてゐた。大きな老松の、しかも黒松ばかりの茂つてゐる間だけに、一層眼立つ。

松原のなかの徑が盡きると狩野川の河口である。砂の上に坐つて渡し舟の來るのを待つてゐると、三人づれの少年が來て、同じく其處に寢ころんだ。三人とも、青薄と青蓬の束を持つてゐる。なるほど、丁度端午の節句であつた。そして薄は菖蒲の代りと見ねばならぬ。軒にさすのだらうと訊けば、さうだといふ。

御用邸の前の松林を通りすぎると、靜浦の往還に出た。通りがお祭ででもある樣に賑つてゐる。裾長の着物を着た若者たちに、娘連もまじつて遊んでゐる。お節句もあるであらうが、ひとつはこの風のせゐだと思つた。沖に出なければ斯うして遊ぶよりほかない漁村であるのだ。小料理屋がみなそれ〴〵に賑つてゐた。靜浦を拔けて江の浦、此處の狹い濱にはいつぱいに漁船が引きあげてあつた。押し並んだ舟の姿はいかにも靜かで、また淸らかに見えた。

いつもは小波ひとつ立たぬ入江であるのに、今日は沖から岸にかけて白々と騷立つてゐた。ところによると一二間の高さを打ちあげて道路まで浪の散つてゐる場所もあつた。そして終に雨が落ちて來た。洋傘をば手に持つたまゝ、急ぎ足に歩いてゐると、橫降りの雨と打ち上ぐる浪のしぶきとが顏に當つて、寧ろ心地よかつた。

折よく三津で、乘合自動車に乘ることが出來た。木負、久連、平澤と海岸沿ひに走つて、終點の古宇に着いた。今日は此處泊りときめて、村に唯だ一軒の宿屋、大谷屋に寄つた。何年振かでその廣い土間に入つて行くと、いかにもひつそりしてゐる。

この老人はわたしを見忘れてゐた。沼津の若山だと言つても思ひ出さなかつた。一晩泊めて貰ひたいが、といふと、おあがんなさいとばかりで、案內に立たうともしない。途方に暮れ、あがり框に腰かけて煙草を吸つてゐる所へ、主人が歸つて來た。內儀も來た。山の畑にでも行つてゐたと見え、蕗を澤山抱へて入つて來た。

彼等はよく覺えてゐた。そして、

『浪花節に階下に降りて貰へ』

と、主人が言つた。

『ウム、さう言つて來べえ』

と內儀は直ぐ上つて行つた。

此處の二階には部屋が二つしかなく、一方には小學校の先生がもう四年間とか下宿して居り、あとの一室には二三日前から浪花節かたりの夫婦が泊つてゐるのださうである。

『階下で結構ですよ、ほんの一晩だけだから』

といふと、親爺は例の口調で、

『いけねえ』

と言つた。この人も何だか急に年をとつた様に見えた。髪も白く、頰もこけた。

暫く圍爐裡ばたに休んで、やがて二階に上つて見ると、矢張り此處の部屋に來てよかつたと思つた。欄干の眞下から海で、居ながらに大きな入江全體が廣々と見渡された。その大きななかで、この古宇だけの小さな入江を爲す眞向うの岬には頻りに海から風がふきあげてゐた。大方楢らしく見ゆる一山の若葉木が、ゆさ〳〵と搖れ立つて、蒼白く輝き、其處へ大粒の雨が降り注いでゐた。宿の眞下あたりは、それでも一向に風は無く、唯だ雨の作る波紋が音をたて、いちめんにひろがつてゐた。風は吹きながら、雨は降りながら、入江の隅々まで何とも言へぬ明るさが漲り渡つてゐた。眞白な雲はむく〳〵として入江向うの空に湧きあがつてゐるのだが、その雨雲のあひだには藍鼠(あゐねず)ともいふべきみづ〳〵しい色を含んで、入江を圍む山から山の低い峰をも、あちこちと入りこんだ襞々をも明るく見せてゐた。

『やれ、やれ』

と云つた氣持でわたしは部屋から座布團を持ち出し緣側の欄干に肱を持たせながらこの久し振の、六年振の、入江の景色に見入つた。

大正十二年九月一日の、あの大地震にわたしはこの部屋で出會つたのであつた。その夏、わたしは妻子を連れてこの二階を借り受け、みんなして泳いで暮してゐた。そして八月の廿七八日に子供の學校の事があるので彼等を連れて、妻だけが先に沼津に歸り、わたしはその數日前から始めてゐた磯魚釣りに未練を殘し、獨り其處に殘つてゐた。

その九月一日、やゝ早目にたべた晝飯の後でわたしは一人二階に晝寢をしてゐた。主人も老母も子供たちも宿の者はみな蜜柑山の草とりだかに出かけて、宿に殘つてゐたのは病氣でねてゐた內儀とわたしの二人だけであつた。其處へグラグラッと來たのであつた。

『お二階の旦那ア！』

と叫ぶ內儀の聲を聞いたか聞かずか、わたしは階子段を二足か三足で飛び降りて、庭に立つてゐた。そして却つて內儀を庭に引き出した。

其時には既に庭先の石塀は壞れてゐた。そして音を立てて海沿ひの道路の石垣が壞れつゝあつた。軒端からは瓦が落ちて來た。元來が磯山の根つこの波打際の僅かの平地を利用して建てられた家なので、庭が極めて狹い。其處で屋根からの瓦に注意し、次第に浪にくづされて來つゝある石垣に注意しながら壞れ落ちた石垣の上に立つて刻々と襲つて來る震動に耐へてゐねばならなかつたので、實をいふと早や茫然自失の形であつた。

其處で更に恐るべきものをわたしは見た。滿潮の時でも四五尺高さに波の上に出てゐる巨きな岩が二つ三つ宿のまん前に在つた。ふゝと其處を見ると、それらの岩がいつの間にやら隱れてしまつてゐた。そして、何事ぞ、その眼の前の海いちめんがぶつぶつと泡をふいて濁りかけて來てゐたのである。宿の前の狹い道は既に壞れかけてゐる。のみならずもう少しで浪に浸さるゝばかりである。

『こりァ、いかん！』

幸に宿の背戸口から山の方に登つてゆく作場路のあることに思ひ當つた。

が、この病身な內儀は、早やもう腰が立たなかつた。二三度、叱る樣な聲を出してみたが、駄目であつた。しかたがない、引つ擔いで行かうとしてゐる所へ、どや〳〵と同じその裏口の道から宿の家族が馳け降りて來た。

老母が一番しつかりしてゐた。そして直ぐ山に逃げ登らうとする一同を制して、この家の下は大きな岩になつてゐるので地震には大丈夫である、安政の地震にもこの家一軒は大丈夫であつた、津波もまだまだこの分ではたいしたことはない、唯だ、用心だけはしておけと男たちに言ひつけて疊を二三枚持ち出させて庭に敷き、自分は鍋を持ち出して飯をたきにかゝつた。

わたしは今度は沼津の家族の事が氣になりだした。其處に居合せた一人の青年が氣の毒がつて一緒に行つて呉れることになり、駄目と知りつゝ、郵便局の在る隣村まで出かけて、電報を打つことにした。

此處等海岸の村から村をつなぐ唯だ一條の道路はずつと海岸に沿うて造られてゐた。その道路が村はづれのとつぱなの所で土煙をあげて海の中に壞れ落つる樣をば現に庭から眺めてゐた。

『山越して、舊道を行くといゝ。』

誰かゞ言つた。

舊道は掘割りになつてゐた。そして其處も諸所くづれてゐた。ことに高い兩側から石が、いまなほ頻りに落ちて來るのであつた。

其處を走り拔けて郵便局に行つて見ると、土地の舊家か何かで庭の馬鹿廣いまんなかに、長い丸太を組み合せ、その上に疊を敷いて、家族の老人たちが坐つてゐた。無論、電報どころの話でなく、唯だ一種の嘲笑を買ひに行つた樣なものであつた。

夜になつた。箱根の山の上の空が、どす赤い色に染つて見えた。小田原か、橫濱か、其處らの燒くる焰の色であつたことをあとで知つた。

可笑しかつたのは、心を鎭むるために、宿の親爺と兩人して村の酒屋に酒を買ひに行つた。戶もあけつ放しのまゝで、誰一人居なかつた。みな、山に逃げてゐるのだ。棚に並べた酒の壜が殆んど悉くころげ落ちて、土間は壜のわれた酒の匂ひでいつぱいになつてゐた。辛うじて落ち殘つてゐた一升壜四本を兩手に一本づつ提げて歸つて來た。あの晚、酒を飮んだのはお前たちだけだつたづらよ、とあ

とで村の者が口惜しがつたさうである。

夜が明けた。津波も來ず、搖り返しも次第に遠くなつた。

丁度、村の有力者の一二軒の家族が沼津の病院に入院してゐた。それを見舞に行かうとする人たちと協力して嫌がる發動機船を口説き落し、最大速力で、沼津に走らせた。

自宅に馳せ歸つて見ると、庭に二張の蚊帳を吊つて、みなそのなかに小さくなつてゐた。そして其處では早や所謂鮮人騷ぎといふものが起つてゐた。

さうした大地震の時にあれほどしつかりしてゐた宿の老母が、いつの間にか老耄して、わたしなどは無論のこと、極く近しい人の顏をも見忘るゝ樣になつて居るのだと聞いて、不思議の樣な、また可笑しな樣な氣もするのであつた。

其處へ內儀が自慢のネーブルを山もりに盆に盛つて上つて來た。宿の主人はその後一二度、沼津のわたしの家に寄つて呉れたことがあるが、內儀とはそれ以來初めてゞあつた。話はまた自づと六年前の地震のことになつたりした。

雨はいつか大粒がやんで、次第にこまかく、はては煙る樣な降りかたになつて、夕闇となつた。其處へ近い沖合から大勢して網をあぐるかけ聲が聞えて來た。

この邊の海岸の網はすべて海中に掛けつ放しになつてゐるのである。頃あひを計つては舟で漕ぎ寄

せて締め、またもとの儘に掛けておく。宿屋の二階から見ゆる所だけにも、ノリアガリ（これは鰯專門ださうだ）、ネコサイ、及びダイボウの三種の網が張つてあるのである。いま聞えて來た掛聲はダイボウ網を締めるのであつた。宿の主人は早速手網を提げて、魚買に出かけた。

それを肴に一人でぼつ〳〵飲み始めたところへ、高島友次郎君がやつて來た。この人はもう永い間の我等の歌の仲間で、初めこの古宇に海水浴に來たのもこの人の紹介であつた。家に病人があると聞いたのでこちらから行くのを見合せ、使を出して呼んだのであつた。

雨はやんだ樣だが、夕闇をふくんだ大空の雲の色は暗かつた。却つて海が明るく、それにもまして入江向うの山の若葉の方は、更に明るかつた。暮れかけた海へ、二艘三艘と漕ぎ出してゆく小さな舟があつた。麥烏賊釣りに行くのださうだ。麥烏賊とは麥の穗の出始めるころに釣れるからいふのださうだが、麥烏賊の名もやさしく、形も小さい。現に我等の膳の皿のうへにもその煮附が何疋となく載つてゐた。

翌朝、今朝もうこれで八十八夜の籾蒔を濟まして來ましたよと言つてやつて來た高島君も大瀨崎の方に行つて一緒に一日遊ばうといふことになつた。道は昨日と同じく右の崖下に海を見下しながら山の中腹を行くのである。途中、足保、久料など十軒か二十軒ほどづつ家のある小さな部落を過ぎた。

昨日通つた多比、木負、久連などもさうだが、この邊の村の名はみな可笑しなものばかりだ。

二時間足らずも歩いたかと思ふと目的の江梨村に着いた。其處の宿屋富士見屋といふに寄つて、直ぐに釣舟を仕立て、貰はうとしてゐる所へ、まだざあつと降つて來た。諦めて二階に籠り、歌の話などをして暮した。

此處の二階から見える海沿ひの山の若葉も實に鮮かなものであつた。此處の山には山桃が多く、それらしい若葉が楢か櫟の林の傾斜の中に幾つとなく茂つてゐた。また、この附近、樟が多く、現に今日も路ばたに煙をあげてゐる樟腦小屋を見て來たのであつたが、この樹のわか葉は他のゝ樣に綠でなくて強い茜色である。それがむく〳〵と茂つて萠え立つてゐるので、まことに眼覺しい感じがするのである。

幸に晴れて呉れた。他に漁師を賴まず、宿の主人親子が案内してくれるといふので、感謝しながら用意の小舟に乘つて漕ぎ出した。昨日から賴んであつたので、餌の用意もちやんと出來てゐた。餌は鰯、鯖、烏賊など、つまり共餌といふのである。ことに鰯鯖の靑みを帶びた魚肉をよしとする。

樂しみにして來た大瀨崎のはなに漕ぎつけ、大急ぎで針をおろした。例の地震の年以來、初めて釣糸を手にするので、心配と樂しみで、心は子供の樣になつてゐた。

因果と波が惡かつた。所謂ばしや〳〵波といふ奴で、妙に眼に反射し、延いて指先の感覺を鈍らせるといふのだ。深いところになると二十尋三十尋と糸をおろす。そしてほんの指先ひとつの感覺でその深さの底の魚のあたりを知らうとするのだから、このばしやばしや波を嫌ふ言葉を單なるまけをしみとするわけにも行かぬのである。

兎に角、あたりは極めてわるかつた。四人ともやゝあせり氣味で、場所を代へ〳〵、手んでに糸を握つてゐるのだが、誰のにも一向にあたらなかつた。たま〳〵あたつたと思つて勢ひこんで引きあげようとすると、針は魚ならぬ岩にかゝつてぷつりと糸が切れるのである。元來我等の釣らうとしてゐるのはその附近で呼んでゐる根魚の種類である。根とは磯の岩の意味で、卽ち磯魚類を釣らうとしてゐるのだ。磯魚であるが故にすべて寄り合つた岩の蔭に棲んでゐる。その岩の蔭に針をおろして釣らうとするのだから、魚の代りに岩を釣る結果になるのも止むを得ぬのである。

『飛んだことになつた、おひるのおさかなにさしあげるものも無いといふわけで……』

主人は悉く恐縮して言つた。舟には一升壜はもとより鍋、七輪、刺身皿等の用意がしてあつて、釣つたものを早速料理しようといふわけであつた。

それでも十一時近くまでには、カサゴ、メバル、ハズ、ウミウナギ、クシロダイ、などといふのが一疋二疋と釣れて來た。其處で賑かな晝飯の席となつた。クシロは刺身だ、カサゴは煮ろよ、お客さ

ん濟みませんがお燗番をお願ひ申しますよ、といふ風に。

他の三人とも酒は先づ駄目であつた。い、氣になつて自分一人で飲んだのでひどく醉つてしまつた。飯が濟んで、めい〳〵また釣り始めたが、わたしは棄權せねばならなかつた。前にもまして岩ばかりを釣り始めたからだ。

が、舷に寄りかゝつて、波を眺め、眞近の崖山を仰ぐ氣持はまた難有いものであつた。海に幾群となく浮いてゐる小鳥があつた。何だと訊くと、千鳥だといふ。なるほど、波にすれ〳〵にまつてゆくのを見れば千鳥であつた。また、山燕をもう一層大きくした大きさで、更にそれよりも輕快な、鋭い翼を持つた、うす白い海鳥がゐた。これは群をなさず、一羽づつ二三ヶ所でまつてゐた。隨分と高い中空を飄々とまひながら、やがてまつさかさまに海に向つて落ちて來る。そしてまた直ちに中空さしてまひあがる。これは本當の名をわたしの方が知つてゐた。マミシロアヂサシと云ふのだ。ひらりひらりと身をかはしてまつてゐる身輕な姿にはまつたく光でも宿つてゐるさうに見えた。

舟は時とすると水面から殆んど直角に聳え立つた斷崖の眞下に寄つてゐる事があつた。さういふ所に限つて海が深く、魚も大きいといふのである。斷崖には藤が眞盛りと咲いてゐた。また、何やらの若葉のなかにくれなゐ深く山躑躅が咲いてゐた。それかと思ふとおもひもかけず眞柏の小さな老樹が岩の裂目に黑い枝葉を張つてゐた。そして其處らの岩はいちめんにしつとりと濕つてゐた。糸の樣な

瀧となつて流れ落ちてゐるところもあつた。

アカギといふ大きな魚を釣つた位ゐで、午後の漁もあまり思はしくなかつた。それに潮時の關係もあつたであらう、宿屋の親子は釣をやめて、突きを始めた。僅の間に、章魚が四疋、その他何やら二三突けた。

ほど〳〵で、夕方早く引きあげた。親子をも呼んだが、遠慮して來ないので、昨夜と同じく高島君と二人、相向ひで膳についた。晝と同じく、アカギは刺身、クシロダイは酢のもの、カサゴ、メバルは、煮肴、斯うして並べて見るとなか〳〵賑かであつた。とても兩人でたべきれるものでなかつた。風呂を出てその膳に向ふころ、また夕立めいた雨が來た。裏窓を開いて向ふ其處の山の楢櫟の廣やかな青やかな林のなかに混つて浮き出た樣になつてゐる樟の木、山桃の木の風雨にそよぐ姿はまつたく心を躍らせた。

『ありがたい雨だ、都合のい、時ばかり降つて吳れる。』

と言ひながら荒い音を立て、降つてゐる雨の明るさを眺めてわたしは喜んだ。そしてこの明るさは矢つ張り五月の、而して海の中に突き出てゐる岬の明るさだと思つた。

海の方を見ると、雨が強いので對岸の千本松原あたりは煙つて見えず、却つて愛鷹山のいたゞきが途方もなく高く見えてくつきりと墨色に仰がれた。その裏の富士は見えなかつた。愛鷹の中腹には深

い白雲が凝つてをり、雲のなかから出たその山のスロープが明らかな線を引いてずつと東の方に延びてゐる。其處にはまた足柄山の裾がそれを受けて徐ろに東に高まつて行く。さうした間に醸し出された大きさ明るさもまた難有いものであつた。

い、氣持に兩人とも醉つた。そして低聲に唄などうたひ出した。宿の娘が不思議さうにそれを覗きに來たりした。

實に具合がい、。日本晴である。今朝は富士も少し青みを含んだ様な眞白さで、海の向うの高空に聳えてゐた。

早朝の發動船でわたしは沼津に向つた。高島君はまた海岸の、崖の中腹の道を歩いて古宇へ歸つた。

(五月七日)

夫人宛書簡

附、愛兒宛書簡

明治四十五年（大正元年）

——以下、當時郷里信州に歸省中の太田喜志子宛——

一

四月三日、上諏訪松川屋より（手紙）

拜啓

これの方をさきに書いたのですが、第二信と致します、實本は一か二本で濟ましとくつもりであつた酒を、ツイ五本（と云つても一合か一合半の銚子です）飲みました、そして、それ相當に醉つてゐます、（叱り給ふな、今日は實際飲まざるを得ず）ですからあまり眞面目のことを書くべく不適當であるのです。

今日突然お驚かし申したことをお詫びします。あゝも云はう、かうも云はうと思つてゐたことが何ひとつ口から出ませんでした、云ひ得なかつた私もわるいが、獨りでおいでゞなかつたあなたにも確かに罪があります。

早速御承諾下すつたことを深く〳〵感謝します。偶然の樣で、決して偶然でない、我等ふたりのために今日は本當に忘られ難い、大切な日であるのです、私は何かは知らず、深い〳〵感謝の念が湧いて仕樣がないのです。恐らくあなたにも斯くあるだらうと信じます。今迄は準備の日、過去の時、我等が本當に生れるのは實に今日からだと存じます、あなたはそうは思ひませんか。

今日、お目にかゝる前とはまた別段に、私の心は實にいろ〳〵な空想に燃えてゐます、あゝもしよう、斯うもしよう、あゝなればあゝ、斯うなればあゝ、久しぶりに何のわだかまりもない、邪念のない、熱誠に燃えてゐます。私はいま本當に此處にあなたの無いことを悲しむ、面倒な紙筆をからずにあれこれ

と申上げたい、そしてあなたの批判をも聽き度いのです。

斯ういふことを思ふと、急にまたこの室がうら寂しい、そこらが切りに眺め廻はされます、事もなげに、アノ林にかくれた〳〵と云はれた家に、睡つてゐる人の姿が眼に浮びます。

あの、可愛らしいお妹さんを怨むのでは決してない、けれども、そうと察してゐながら、獨りで來て下さらなかつたあなたを、うらめしく思ひます。いゝえ、我等は、少くとも私は、もう星や菫の仲間では決してない、けれども、今日は、あまりに何だか飽氣なかつた、別にあゝだ斯うだといふことなくそう思はれてなりません。然し、私にもまた罪があるかも知れない、御免下さい。

いつごろ、東京においでになります、早くお目にかゝりたいと存じます。私は、この一兩日、東京市、市外、巢鴨村、三五一八、郡山幸男君方にゐるでせう、お便り、封書で願ひます。

汽車の中から、湯槽の中から、あゝだかうだといろ〳〵思つてゐましたが、いざとなると、何にも筆にのりません、のせたくありません、このまゝ默つて獨りで、思ひます。ツイ眼のまへにおゐでる樣にもあり、斯う手紙を書いてゐるのに氣がつけば、極めて遠き人の樣にも思はれます。嗚呼、四月二日、忘られ難き四月二日、左樣なら、あなたの夢の平安を祈ります。

四月二日、午後九時半　　若山　牧水

太田喜志樣

喜利さんによろしくおつしやつて下さい、

二

四月六日、東京市外巢鴨村三五一八郡山方より

（手紙）

諏訪を立つ日は大雪でした、富士見野あたりは五

六寸も積つてゐましたか。甲斐は櫻の眞盛り。東京に着きますと小雨の中を花見電車がイルミネーションで馳せちがつてゐました。終始無言。とりあへず此家に來ますと、切りに待たれつつありました。

その翌日から昨日まで原稿を賴みにかけめぐつて、へとへとになつてゐます、花時で大概は留守、いらぬ手間をとらせます。

お手紙、昨夜拜見しました。何とも言へない感謝と歡喜とが讀み行くにつれて心の中に湧きいでます。かくし切れなかつたので、此家の郡山君にも打明けて色々相談もして見ました。それは誠にいいことだと大變悅んでくれました。で、公然とお手紙をば三度も四度も繰返すことが出來たのです。

臀尻を立つて以來、私の心をすつかり占領してゐるのはあなたです。こちらに歸つてから一層ひどい。疲れ切つて電車の隅に坐つた時、ふとした拍子で眼のさめた夜半、もうツイ眼の前にでも在る樣にあなたの影が心いつぱいに浮んで來ます、涙ぐましい心地になつて了ひます。

何の故だか、この頃私は柄になく弱々しい感情的な男になつてゐます。人を訪ねて行つて、談話の最中、ひよつと眼についた庭の櫻を見ても急に胸のせきあげてくるのを覺えます。そして切りに何やら心細い。そして常にその末はあなたそのものと變つて行くのです。われながら可笑しいと時々は微笑まれますが、致しかたありませぬ。

早く出ていらつしやい。然しそんなことを打明けた以上、御兩親が容易く出しておよこしになりますか知ら、昨夜からまたそれが少々氣になり出しました。打明けての時の樣子をもつとくはしくきかして下さい。妹さんも、では、知つてしまひましたネ、少々きまりがわるきことです。太田（註、水穗）氏をば一昨日訪ねました、そして始終のことをお話するつもりでした所、同鄕人とかの某氏が來てゐたものですから止しました、今明のうち、また行きます。一昨日はそれから三人一緒に上野に菱田春草の遺墨展覽會を見に行きました、中々面白うございました。

感心して見巡りながら、私は心ひそかに、ああ一緒だつたら、と思ひました、尤もいづれ近々さうすることが出來るでせうけれど。

空想——を續けさして下さい。早く出ていらつしやい、そして二人して何處ぞ——私は昨今相州の三崎を心に描いてゐます——海に行きませう、海を知らない人に海が語り度い、白砂の上、岩の端、あの蒼海の上に心を自由にひろげ度い、濁つた、ひがんだ、せせこましい、數年來の心をあなたの力で清く美しく柔くして頂き度い、一緒に死ぬる樣な氣持になつて見度い、あなたの心を充分に貪り度い、泣きたく、泣かせ度い。

お歌、みな面白く拜見しました、これから毎日でも出來ただけづつ送つて下さい、一緒にして初號に出しませう、謂はば「自然」は私共のためにわざわざ出來た樣なものです。

私はあなたをまだ斧を知らず鋤を知らず、人間の足音をすら知らない處女地のやうなかただと思つてゐます、ですからこれからどんなにでも耕作し得らるると信じてゐます、私はそれを心ひそかに大いに矜つてゐます。どうです、甘んじて私に斧や鋤を入れさせますか、然しもう何と言つても許さない、あなたは私のものであらねばならぬのだ。噫、我が愛する人よ。我が者よ。

まだ數日、此家に同居します。そして附近に間を借りてそこに起臥します。郡山君は、雜誌の方が少しかたがついたら小綺麗な家を借りて御一緒におゐでなさいと言つてくれますけれど、さうも出來ますまいね。

東京は花のさかり、大變な人出です。櫻を見ても、木の芽を見ても、今年は今迄に覺えのない淸新な力強い氣がします。

信濃の一人を思ひます、ほんとにどうしてゐらつしやるの？　何だかいやに氣になる。

きり子嬢（註、喜志子の妹）によろしく。

では、是で筆をとどめます、お便り待つてゐます。

四月六日午前　　若山生

喜志様

三

四月十二日、東京市外巢鴨村三五一八、郡山方より（手紙）

拜啓

昨日あたり屹度御返事の來ることと切りにたのしみにしてゐましたに、その事無し。ひどく落膽しました。

今朝、たつた今、郡山君ところのツイ裏の頗る奇妙な、きたない二階へ身體だけ移りました、いつのまにやら僕の歸京したことを嗅ぎつけて、色々な連中が訪ねて來るので、それらから離るるべく此處に身をかくしたのです。一人で此のきたない部屋で「自然」の一號をつくります。そして、いかにきたなくとも、私はいま極端に獨りを歡びます、物を思ふ身には、矢張り獨りがうれしい、心の裡の或物と常に憚りなく對座することが出來ますもの。ほんとに可笑しい位ゐ、お別れしての後の私は柄にもない戀人めいた心になつてゐます、非常にいき〳〵とした、しかもうら寂しい、たよりなげな心地にのみ時を過ごしてゐます、死灰時に燃えざるに非ずといふ言葉にあてはまるのかと自分で笑ひながら考へますが、それは違つてゐます、死灰はひどい、私だつて、そんなに棄てたものでない、ただ一種の自棄心、反抗心からひどく誇張して斯う考へるくせがいつのまにかついてゐたのでせう、私の生命の現在のどうであるかは近づいて御らんになればよく解ります、よくしらべてみて下さい、底ひなき淵やはさわぐ、私の眞實の生活は事實今日此頃から始るのかも知れません。

昨日、太田氏を訪ねて一切を打明けました。彼も非常に喜んで、それなら早速五月に式（といつても極くかんたんで、僕の二階で一寸やつたつていいぢアないか、と言つて）をあげたら如何だネ、君等の方がそれなら、親許の方には僕からすぐさう言つてやる、屹度承諾するよ、といふ樣な話でした、そして、最初の世帶道具位ゐは僕のうちから寄附するサとい

ふ様な景氣でした。私も何だか、そんな氣持になつて、いろ〳〵と空想を肆まにしました、まだ雪さへ殘つて居る信濃の國の冷たい人はどんなことを考へてゐるだらうかとあやぶみつつ。もつとも、事實さうするつもりではありません、然し、少くともさう考へることはなかなかに樂しいことなのです、あなたの御存じのないことでせうが。

とにかく、この、こんな汚い、昔話にでもあり相な部屋に移つて來て、何はともあれこれだけ認めたことがひどくうれしい。初夏めいた雲が、空いつぱいにひろがつて、この哀れな者の棲む部屋の窓を壓迫してゐます。（十一日午前中）

いくら待つても御返事は參りませぬ、一寸外出して、非常に樂しんで歸つて來る、來てゐない、實際心細くなつてしまひます。一體どうしたのです、何か新たに事が起つたのですか、それとも先日の私の手紙で御立腹でもなすつたのですか、何かまた思ひ惑うておゐでるのですか。

「自然」の方はそれとなしに事が運んでゐます、賴んでおいた原稿もぼつ〳〵と集ります。今日は原田實君（この人と一緒に重に編輯するのです）が來て、一緒に巢鴨から池袋雜司ケ谷の方を散歩して、ツイ時間を費しすぎて、いま歸りました。郊外はもうすつかり初夏、櫻が僅かに殘つて、木、草、みなうす青くつのぐみました、歩いてゐると額からは汗がしきりに流れます。

これからまた原稿を書くのです、破れ落ちた壁、煤け果てた襖、穴のやうに座敷の一方に開いてゐる階子段、歩けばぎし〳〵鳴つてゐる古疊、日光をさけて、いま机をその中央に据ゑました。いろ〳〵、思ひが飛び歩いて何を書いていいかわかりませぬ。大概いつごろ、信州を出て來ます、いやに戀しい。もつとも、暫く斯うして離れてゐて、何彼と遠く思ひわづらつてゐるのもいいかも知れませぬ。

とにかく、これだけで、出すことにします。左樣なら。

十二日午後二時　　牧水生

きし樣

四

四月十三日、東京市外巢鴨村三五一八郡山方より（手紙）

十一日お出しになつた手紙、只今到着、これとても早い方ではないのに、六日に出したのが、九日に届くに至つては言語同斷といはねばなりませぬ、お蔭でひどく氣を揉ませられた、郵便局でどうかしてゐたのではないですか。

繰返し拜見して、ひどく私も眞面目な氣持になつてゐます。それほどに思つてゐて頂くこと、私は勿體ない位ゐ忝く思ひます、そして、靜かに自分自身を振り返ると同時に、他意なく全身をあなたの前に捧げます、あなたの自由に私を取扱つて下さい、私には柄にもなく弱いところがあります、これから永い一生の間、あなたから援けて貰ふ場合が定め し多からうと思ふのです。

斯ういふことを言ふのは、然し、何だか恥しい氣がするではありませんか、あなたも無く、私もないといふ氣持になりたいではありませんか、また私はいまその氣持になつてゐます。充分にあなたに甘えたい、自分の心の、生命の痛みつめるまであなたに甘えたい、甘えさして下さい。

何と言つてもあなたの心は、割に平かで、靜かであつたに相違ない。それに比べると私はみじめなものです、どうぞ、今少し本に立返らして、私を見て下さい、といふより、一日も早く私をもと通りの、靜かな豐かな生命に返して下さい、あなたの蔭にかくれて、しばらく日の目を見ずに睡り居、玉となすもあなた、瓦となすもあなた、私はもう一切責任をあなたに冠せます。あなたも既う今までのやうに獨りぎりの、我がままは出來なくなりました、潔く觀念して下さい。

けれども、よしそれではさうしてやるといつた樣に、角張つて、筋書き的に、所謂良妻主義を振廻されては耐りません、ままごとでもする氣持で、さうして下さい、あなたも睡る氣持、私も睡る氣持、一切を超越して、添寢の日を續けませう、ね、さうし

ませう。

嗚呼、あなたが戀しい！　あなたの胸のあたりを鋭い刀物で、さし貫き度い氣がしてなりません。

實際、私は現在、あまりに落着かれないのに愛想をつかしてゐます。只だの一日でもいいから、邪魔無しに（あなた）（わたし）を思ひ度い。私の手紙の、そわ〳〵した樣なのが、さぞ慊らないでせうね、勘忍して下さい、いま三週間もすれば、いいえ十日もすれば少しは落着かれませう。一切世間からかくれて、たつた一人あなたを占領して、占領せられて暮し度い。

さうですね、逃げ出すのも一寸考へものでせう。昨日の手紙、御らん下すつたでせう、太田氏から屹度あなたの父樣などに何とか言つてゆくでせう。さうするにはそのまま暫くおゐでた方が都合がよくはないでせうか。でも、新宿の酒屋の二階に訪ねてゆくのもいいなア、すぐ結婚（といふことを）するのは見合せませう、人目を忍び合ふ心持をも味ひませうよ、ね、その日のキスをも盡しませう。でも、私はどうでもいい、どうぞ、御隨意に！

月々三圓ぐらゐはどうにでもします、屹度私がどうにかします、それは御心配なく。

海にも是非行きませうね、初夏の海は、とりわけても青いから！　明るいから！　飛び込まうなんて言ひつこなしですよ、まだ殺し度くない、死に度くない。

もう暗くて、字が見えません。石川啄木君が今朝の九時半に死にました、私は獨りその臨終の枕もとに坐つてゐたのです。くはしいことが云ひたいが、いま手紙にかくのはいやです、逢つてにしませう。ただ默つておきます。今夜もこれから行つて通夜です。

原稿用紙も明日あたり買つておくります。

十三日夕六時　　牧　水

戀しき
喜志樣
可愛らしきわが妹
喜利子女史へもよろしく。

五

四月廿日、東京市小石川區大塚町二十五郡山方より（手紙）

あなたの手紙は常に私に沈靜した歡喜と感謝と憂欝とを覺えさせずにはおきませぬ、お手紙を見た後しばらくは、どんなにあせつても何一つ仕事が出來ませぬ。

昨日、受取つて、夕食后一二十分の散歩のつもりが、二時間あまりも郊外の星に濡れてさまよふことになりました、今日はまた晝食后默つてうちを出て植物園に入りました。

初夏の植物園のいいこと、ほんとに何と言つたらいいでせう、もうすつかり若葉です、どの木もこの木も、めいめいに芽をふいて、やはらかな濃密な日光のうちにそよいでゐます、草には初夏のころにふさふ眞紅の花があれこれと咲いてゐます、いいえ、草ばかりではない、あの椿にも花がありました、一團群つて咲いてゐる中に歩み入つて、ぼんやり永いこと立つてゐました。

ほんとにいつごろ出て來ます、出來るならこの若葉のころに一緒に居たうございますにねえ、もつともいつでもさう思はれるのかも知れませんが、それでも私はこの晩春初夏の寂寥を最も愛してゐます、それが今年はまた別して特殊の心もちでこの親愛な初夏に對してゐるのです。

どう言つて出て來ます、私の事を言つて、結婚（形式はどうでも）すると斷言して來ますか、それとも他を言つて出て來ますか、阿母さんにお打明けのことをばうれしく思ひました、それでしたら寧ろ前者の手段を採つた方がよくはありませんか、それでは阿父さん兄さんなどが駄目でせうか、どうしても駄目でしたら、破壞的手段を採るだけです、太田氏が、さう言つてやらうか、と再三言ひますけれど、先づ〳〵と止めてゐます、あまりおほつぴらにやりますと色々困ることがあるのです、困るといふより不可能のことに屬します、で、今度のお手紙の「形式上の披露などは……」のお言葉は非常にうれしかつた

のです、私も初めからさう思つてゐたのです、さうしませう、そして、ふたりだけ、遠い海の中の孤島にでも棲んでゐる様な氣持で、どこまでも内的な、たるみのない、皺のない生活を營まうではありませんか、(實は、これだけのことを手紙では今までよう言へなかつたのです、あなたの方が私より強いのを見て、悲しいと思ひました。)大體をさうきめておいて、實際上の暮しやうはいろ〳〵とあるでせう。新宿に居れとは、あなたが出て來ての上ですか、それともいまですか、よくわからない。

二三日前葉書でお報らせしておきましたが、届きましたか、十七日の夜、近火類燒で、郡山君の宅も私のゐた二階も悉くやけてしまひました、で、いま取敢へず家を借りて一緒にゐますが、どうも私は獨りでゐたい、雜誌の編輯でもどうにかなりましたら、部屋でも探すつもりでゐるのです、でなければ、折角あなたが出ておいでても、ゆつくりお目にかかれない。郡山君は極めて好い人です、けれど、戀はあらゆる第三者を拒みます。

どうも落着いて筆をとつてゐるわけに行きません御免なさい、今少したてば斯んなでもなくなります。

今夕、松本からのお手紙を受取りました、折惡しく友人が大勢來てゐましたので、すぐ返事を認めたいと念ひながら、それすらも出來ませんでした。いやで仕樣がない。時を見て、ゆつくり認めます、今夜はほんの書いただけを、とにかく出しておきませう。「素直に」つて、一體どういふ風にするおつもりなのです、少し具體的のことをきかしといて下さい、決してあせるわけではないが、何だか心細い、大概の見當もついてゐないのですか、それをきいた上で、こちらでもそれに應じての心備へをしなくてはなりませぬ、よろしう御ざんすか。

姉さんにも、もうお話だつたのですか、喜んでいただいて非常にようござんした、私からもお禮申上げた旨お傳へおき下さい、鄕里の母や姉やに身から出た錆で、せつない思ひをしてゐますので、あなたから、母だ姉だといふお話をきかせられるごとに、

なんだかねたましい様な、なつかしいやうな心地が致します。大威張りでそれらの人たちを阿母さん、阿姉さんと呼びたいものと思ひますけれど、とても駄目でせう。表面上、駄目でも内心さうでなかつたら好いと、先づしておきませうか、いかがです。

戀といふものを夢想するのをばおよしなさい、夢想するのは差支へありませんが、その夢想を眼前の實際にすぐに當てはめようと考へることをば全然およしなさい、私はあなたの失望を見るのが耐へ難い苦痛ですから。でも、あなたのそれは他のそれとはよほど異つてゐることをば能く認めてゐます、少しでもあなたのいやな顏を見度くないから、斯ういふ老婆心を起すものと思つて下さい。私も子供だが、あなたよりは兄さんだ、それだけ意地がわるくなつてゐます、いやなことをいふと怒る可からず、斯う離れてゐては、いざといつて、なだめ樣も無ければなり。

然しわれ〳〵は既うお互ひをお互ひに知り合つての上ですから、あまりたいした前後の相違はありますまい、却つて漸々好くなつてゆく位ゐのことでせう、世間の多くに正反して。ふたりして行ることの餘りに多きを想見して、獨りで笑つてゐます、眼に見ゆる事業、眼に見えぬ事業、我等はほんとにぼんやりしては居られません。けれ共、初めのうち暫くは私はすつかりあなたの蔭にかくれて自分の生命をつちかひますよ、ようござんすか、そして、ほんとに新しい私となつてあらたに生れたいと思ひます。では、これはこれで筆をおきます、まだ永く松本におゐでですか。

四月二十日夜十一時　　牧　水

我が
喜志樣

ジユリアンの話は面白く讀みました、あなたの思想と私のと非常によく似てゐます、これは前からさう思つてゐました、

六

四月二十五日、東京市小石川區大塚町二十五、
郡山方より（手紙）

倚る所のない、すがる所のない生命の寂しさ、苦しさをあなたは知つてゐますか。

夢の様にそれを見てゐた時は、寂しい苦しいといふたのしみのなかに生きてゐたのです。いま、それから突き落されて、それこそほんとに血のだら〳〵と滴る様な、イイエ、皮を剝がれても血さへ出ない様な境地に居るとしたらどうします。

私は、ごまかしてゐる。けれども實際はまつたくさういふ慘しい境地に、じいつと自分を見詰めてゐる身の上なのです。あなたには、それを知つていただけたでせうか。あなた御自身に、さうした境地に近い氣持にでもおなりになつた事がありますか。

私は、さうした身をさらして、あなたに、いま、救ひを求めて居る。寂しい瞳を見張つて、あなたを待つて居る。すくなくとも、おなじ心を持つたふたりが、精いつぱいにお互ひがすがり合つて、これから生きて行き度いといふ悲しい心を滿たして、あなたを待つて居る。あなたは、ほんとに私を救つて下さるか。私は、まことに涙をながして、斯う申します。

おもへばまことに寂しい戀、けれども、これが私どものまことの戀の姿かと存じます。蒼い〳〵おほ空に行衞も知らずに唯だひとつ浮き出でた姿、それが私共の戀では無いのでせうか。イイエ、私にはさう思はれてなりません。

ああ、斯う思ひながらもこの寂しさのやるせなさよ、如何したらこのまま獨りでじつとして居られるでせう、雨が降りながら程なくもう暮れてゆきます。

ほんとに妙にこのごろ、心細いことのみ思はれて仕方がありません。これも戀のさせるいたづらのひとつかも知れません。けれ共、ほんとに耐へ難い氣がします。

あなたの手紙にはいつも一向具體的のことが書いてない。大概、どういふ方針が立つてゐるのです。せきもしないし、むりも言ひませんが、それだけきかしといて下さい。そのつもりでこちらもおとなしくしてゐます。

双方共、時を同じくして燒けたなどは面白いではありませんか。（註、當時喜志子の潛在（なりし松本市の羅田家（姉の嫁入先）も日を同じうして大火の類燒に遇ひ避難中）何か御幣がかつぎたい様な氣もします。その知新堂といふうちへ暫く居るのですか、手紙を出していいかどうかもわからず、惑つてゐます。これだけ出してみませう。

雜誌も何だか難產です。あれこれで、すつかり身體をつからしてしまつて、ほんとうのぼんやりになつてしまひました。そしてひたすらお目にかかる時を待つてゐます。

もとの窪田氏のうちあてで、手紙二通、火事見舞の葉書一枚とを出しときましたが、手に入りましたか。なるたけ、我等のことをば誰にも語らないやうにして、出ていらつしやい。何も憚るのではないが、その方が我等に勝ち味があるやうに思はれる。

二十四日夕　　牧　水

わが喜志様

七

四月二十七日、東京市小石川區大塚町二十五、
郡山方より（手紙）
四月二十七日午後　　牧　水

我が
きし子様

ひとに見られぬ様、驚かないで、見て下さい。讀んだら、葉書でもいいから、返事下さい。

昨日、夜、印刷所のかへりに、寄れといふ電話がかかつてゐたので、太田氏を訪ねました。そして、どうするつもりかとのことでした。僕から兩親の方に申込まうかといふことでしたから、それは暫く待つて下さい、實は私はいま公然と結婚することを好みませんからと一先づ斷つて來ました。私は目下の色々の境遇から、あなたと唯つた二人きりで、日蔭者の生活を送り度いと望んで居るのです。必要上、でもあるのですが、またそれが目下の私の好みでもあ

るのです、で、ただ何とはなしにあなたにこちらに來て貰つて、誰にも默つて一緒になつて、寂しい、そして充實した生を營み度いと思ふのです。無論、大分公然となつた今日だから、出ると言つてもとてもすなほにあなたを出してよこすことをばあなたの家でしますまい。その時は、それをけつく幸ひにして、破壞的行動をあなたに執つていただき度いのです。あなたをせんどうするのでは決してありません。それがいま我等の執らねばならぬ唯一のみちであるからです。いやに、異樣な言をなすやうですが、私は寧ろあなたの背後に、あなたに關係した一切の者の存在することを厭ひます。無論、これは嫉妬の心持も、よほど含まれてゐるでせう、(言つておきますが、私は非常に嫉妬深い性です。)ですが、單にそれのみでも無い、私共二人の生を强固にし、濃密にする一方法であると思ふのです」直接に言へば、親をお棄てなさい、兄弟をお棄てなさい、唯つたひとりのあなたとおなりなさい、と斯ういふのです」

承諾しますか、私はもうまあなたに猶豫を與へません。

あなたにその決心がつけば、徐ろにそれを遂行する手段を執つていただきたいのです。無論、强ひても事を荒らだてる必要はありませんけれど、何れにせよ、擧上の私の心持をば申上げておく必要があると思ひましたので、この手紙を書きました。

勿論、私は全然孤獨です。

協同で「自然」を出す筈であつた郡山君とは、多分今度手を切ることになるでせう。私が間違つてゐました、「自然」は全然私單獨の手によつて創らねばならぬものであつたのです。初號の校正がいま殆んど終らむとしてゐます。二號は、是非私ひとりの手で出したい。資本が一文もありませぬ、殆んど問題にもならぬ難事業なのですが、石になつてもやつてみます。

「きしさん、このためにも、私の側にゐて下さい。私は、ほんとうに、あなた無しにはいま何事も出來なくなりました。なにごとも、全て、あなたを對象

にしてやつてゐるのです。

考へてみると、私はいま、自由に睡るべき自分の部屋といふものをすら持つてゐないのでした。あなたと斯うなつてから、實にこれが無限の苦痛です。あなたに、ものをもよう言へないやうに感じます」郡山君と從來の關係を絶つとすると、當然同居をも廢さねばなりませぬ。どういふ方法をとるか、まだ具體的にきまつてゐません。きまり次第、通知します。それまでは郡山君ところにゐます。多分、二三日中に、かたがつくでせう。郵便などは心配なく郡山方あてで出して下さい。

きしさん、私をしばらくでもいいから、事もなくあなたの蔭に睡らして下さい。噫、あなたの悠々たる態度が憎くてならない。あなたが無ければ、私はほんとに何ごとも爲し得なくなりました、こんなにまで意氣地のない奴ではありませんでしたがねえ。

『どんなに大きいものが落ちかかつて來ても、手を放ちますまいね、それさへなくば私はしつかりしてゐる、よろしくございますか、エ、…』とは、なんです。私は腹も立ち、悲しくもなりました。

五月半ばですつて。まだずゐぶんありますね、どうしてさうのんきにやつて居られるのでせう、私などにはとても解りつこのないお心です。どうぞ、せいぜい御ゆつくりなすつてゐらつしやい、そのうちまた夏も逝つてしまふのでせう。

ね、きしさん、いつたいあなたは何をしてゐるの。苦しいの、悲しいのつて、一向そんな風も無いぢアないか、そんなことを一寸言つてみるのでせう。おつきあひかなんかのつもりで、眞實さうなら…幾らでも法があるぢアないか。

こんなことを言ふのは、私が間違つてゐるのかも知れない。多分、甚だよくない事でせう、そのため、非常なわるい結果が眞實起つて來る樣にも思はれて仕樣がない。けれど、けれど、私はいまそれを考へてゐることが出來ないのだ、いいぢアないか、間違へばふたりで死ぬきりだ、眼の前に起きた事は眼の

前だけで、かたをつけて行けば、それでいいぢアないか、ああだ斯うだと、とても末の末まで考へのつく筈はない。

きしさん、あなたは「死」は嫌ひ？

ね、きしさん、私はいつのまにか、すつかり熱し切つてゐる、さぞ可笑しく見えるでせう、自身でも、いやだ！　このままで行つたら、どんなに、あなたを酷めるか知れませんよ、それを思ふと、何だか、涙が流れます、けれども、きしさん、もう逃がさない、あなたは私の前に極めて徐順に横はらねばなりませぬ。あなたを殺すか、私が死ぬか、問題はそこまで擴つて行くかも知れませぬ、要するに、戀は悲慘だ。いゝえ、あいてを私に選んだあなたが悲慘だ、私はあなたを悼む。

きしさん、空しく言ふのをばよして、きしさん、ほんとに早く出て來ないか、それは一月や二月のしんぼうの出來ないことはないけれど、來た方がよくはないか。僕自身の犧牲にお前をした様でもわるいけれど、出て來れば出て來たで何とか法がつきはしまいか、ああ斯うときちんと豫算をたててやる様なことは、我等が中には所詮出來ないのだから、却つて事實上にもいい效果があるかも知れぬ。

とにかく、あまり子供らしい事もしたくないから、眼の前のかただけ、あらましつけておいて、決行した方がよくはないかね、そちらの事情が一向わからぬから何とも强ひられないけれど、僕はさう思ふ。

ほんとに、どうします。出ない方がいいと思つたら、それでもよろしい、逢ひたいから、いろ〳〵のことをいふのです、可笑しいやら悲しいやら。

「晶玉のかなしみ」——と言つた様な我等が戀でありたい、我等が一生でありたい、夫婦（いやな言葉ぢアないか！）といふものを、あんなごみだらけのざら〳〵したものであらしめたくない。そして、結晶して、玉のやうなものであり了せ度い。それを汚す時、我等は我等が生命を自ら卿ち度い！

そして眞實私は、これは空想で無いと信ずる。

きしさん、あなたはどう思ふ。

戀を生命としようではないか、といふと、一時流行つた小說を思ひ起すかも知れない。けれども、事實の上に、さうしようではないか。何も、世間並みで終らねばならぬといふ規則を負うては生れなかつた。飯を喰はない様な、清い、かなしい生活がいとなまれぬといふ法もあるまい。私はいまそれについていろ〳〵と具體的の方法を考へてゐる。逢つたら相談しませう。いろ〳〵ある。

——斯ういふことは、然し、文字で書いてはだめです、意味をなしませぬ。

（この手紙に同封せし詩）

わがいとしきをとめよ
われ涙もておん身を愛す、
耐へがたきわが生命の寂しきを愛するごとくに。

かつて笑ひしことなきをとめよ、
そのさびしき胸に、
あはれ、
いかにしてひと本の花を植うべき。

ひとくれの土をにぎりて
土にこころのありなしを問ふことなかれ、
あはれ寂しきをとめよ。

ものを思ふな、
ただ、おん身を愛すといへ、
愛すといへ。

海底のあけぼのか
青苔のしめりに生ひて
幹暗く、葉こそ嘆かへ。

その葉のかげに
日にもそむきて
うすくれなゐに咲いたる。

その椿をば愛すとよわがをとめは。

地に生ふる名もなき木にも
時來れば
しのびかね、芽の萌えぬ。

我等ふたりのいのちにも
知らぬまに
うす青く、芽こそ萌えたれ。

あはれをとめよ
われらが戀の
いかばかり
いやまして
さびしかるべき。

八

四月三十日、東京より（手紙）

昨夜遲くまで印刷所にて校正に從事し、歸路一緒に友人宅に立寄り、一泊、今日また校正で、今夜も夜業させてあるのですけれど、お手紙が來てゐるやうにのみ氣にかゝりますので、先刻歸宅昨日着いてゐたものを拜見しました。御申越のこと、早速と思ひましたれど、都合のわるさには、あちこちとくめんしたものを昨夜すつかり印刷所の方へ渡してしまひ今日オイソレと效果ある目あてがありません、强ひて運動してみやうかとも考へましたけれど、よしよく行つた所で都合ではもう間に合はぬも知れず、かれこれ何だかすつかり面喰つてぼんやりしてゐます。また、なにもさう火のついた樣にしなくともいゝぢアありませんか、それならそれで、少し餘裕をおいて云ひ越して貰へば、こちらもそんなにまで面喰はないのです、若し、この手紙をそちらで御らんになるやうでしたら、さういふ手段をとつて下さい。けれど間に合はないでくれたら、といふ氣がしてならない。むろん、心もちは僕だつておんなじです。一先づ、そうです、矢張り前のところに落ちつくことにして下さい、そして、その上で何とかきめませう。

とにかくこの手紙を、とりあへず、さしあげてみます。

三十日夜八時　　牧　水

喜志樣

とうとう雜誌は遲れます、あんなに苦しい思ひをして、やつぱり思ふやうにゆかない、なんだかきちがひにでもなりさうです。

――以下結婚後、東京新宿の假寓宛（七通）――

九

五月二十九日、相模國三浦郡三崎町初聲館より（手紙）

一時間ばかり待たせられて船に乘つた。海は、初め、心地よいほどの曇りで、室にも入らず、甲板にござを布いてうと〳〵睡つたりなどしてゐたが、觀音崎を越すあたりから雨になり、風も加つて、船は大にゆれた。僕、健全。

港についた時は、それでも、土砂降りで大に弱つた。しと〳〵に濡れて、當家にかけ込んだ。

とりあえず、一杯、といふので、いま、ヨロシクやつたところ、サカナはカツヲのサシミに何々何々、……といふので、好い氣持に、いま醉つてゐる。

このうちは古いし、女中はきたないし、たのしみにしてきた離室はふさがつてゐるといふので、少々ラクタンしたが、もうあちこちと動くのが、いやだから、こゝにきめてしまふつもりでゐる。驚いたのはタカイことだ、殆ど豫想の倍額で、僕はいま一圓七十五錢できめた。每夕の一杯も危いし、第一永く滯在できないので大に悲觀してゐる。とにかく、あとから、あれをたのみます。で、ないと、大にこゝろぼそい。それとも、送つて來ない？

古い、暗いやうなうちだけに、氣はおちつけさうだ。明日あたりから、大に書く。

歌、けふの收穫をお目にかけようか。十四五、出來た。いゝのもある。

まア、よさう、あとから、しらせる、いまはまだおちついて字がかけない。一ねむりして今夜にでも書かう。

とりあえず、右、知らせのみ。

二十九日、午後三時　　牧　水

喜志君

一〇

五月三十日、相模國三浦郡三崎港初聲館より

（手紙）

雨のうちに暮れ、雨のうちに明けた崎の港の五月の一夜、御身が愛人はたひらかに、はた、うれはしくかなしく睡りを貪つた。

崎の港は、鰹の大漁で、雨のうちに篝火焚きたてゝ賑つた。御身の良人の睡つてゐる宿の眞前の島の燈臺には、かなしげに青いろの灯が夜明けまでともつてゐた。

雨は、ほんとに、油繪具のにほひのやうに、やはらかに、終夜、降つてゐた。

けれども、明日の朝は、遠い安房の岬からあらはれる五月最終の日の太陽ををがみ度い。その光線に浸つて、島の岬に、浪に濡れて、御身の良人は、太陽と、海と、人生とを歌はねばならぬ。

最愛なる妻よ、淨きこゝろをもて、御身の良人の世にも清らかなる天才なることを信ぜよ。

雨は、けさも油繪具のごとく、海もまた油繪具に似て凪いで居る。然し、海について多くを語るまい、われは御身を愛する故に。

浪より浪のうまるゝごとく、御身の良人より歌が生れてゐる、恐らく、このありさまは、尚ほしばらく〳〵續くであらうと思はるゝ。昨夜、五十幾首の收穫があつた。

わがこゝに在るごとく、そのごとく御身のともに在らむことを祈つて居る。

五月三十日午前八時　　牧水より

愛する

妻へ

ほろびゆくこの初夏のあはれさのしばしは留れ崎の港に

雲深き岬へわたる古汽船のほとりに群れてうねる青浪

青葉の岬長きなぎさをうち濡らし雨のはしれば搖るゝわが船

身搖すらば岬もともにゆれやせむ晝の月浮くさびしき海に

雲ひとひらふたひら三片浮かずもあれ岬に立ちて我が嘆く日に

さびしさは雲にかくれてあらはれぬかの太陽も海に似たらむ

一一

五月三十一日、相模國三浦半島三崎港初聲館より（手紙二通同封）

（その一）昨日、午前、あまり力んで手紙をかいたものだから、すつかり精が拔けて、一日、歌ができなかつた、だから、今日は、あつさりと用事だけ書きつける。

いま、七時少しすぎ、朝食のすんだところへ、お手紙着、速いので驚かされた。うれしかつた。そんなに、ぼんやりしてゐてはよくない、しつかり精氣を出し給い、こまつたひとだ。そんなにぼんやりしてゐるその心臟へ、青うい浪の碎けかなにかを、うんと打つ附けてやりたい、それでもまだぼんやりし

てゐるつもりか。

ぼくは、それは〳〵元氣だよ。と云つて、宿屋にゐても食事の時にすら、くち一つきかず、(こんなこと、曾て殆どなかりし現象)、眼をもはつきり開かず、飯もうんとは食はず、出歩きもせず、それは〳〵妙に沈んでゐるのだが、しかも、內には青い〳〵火が間斷なしに燃えてゐるのだ。お前などが、まごまご側へ來たら、すぐ燒き殺されて了ふ。

だから、歌は出來る。昨日も夜に入つて、八時すぎから十時すぎまでに、三十二首か、出來た。今までにない種類、と認められるゝものすら混つてゐる、無論、完成はしてゐまいが、生命のあるのはむろん、確かだ。そして、ずつと以前の無茶苦茶時代なら知らず、幾つも〳〵引續いて出來るといふ現象も曾つて無かつたことだが、なんだか氣味がわるいネ、自身でそう思つてる。

このまゝなら、まだ幾つでも出來る、なんといふことだらう!

喜志さん、ほんとうに、お前は、單に、妻、夫といふ相對的の意味のみでなく、母となり、姉となり、妹となつて、僕をはぐゝんで呉れ、僕、また屹度それに酬ゆるよ。僕は、ほんとに、今日から漸く眞の藝術家の生活に入るのだ。いまゝでのは謂はゞ素人藝にすぎなかつた。

ね、いゝだらう、え、ほんとうにいゝだらう!

金はすまないが、賴む、出來た歌を持つて歸れば、相應の金に代へられるし、その心組をもしておいて呉玉へ。歌を作つたあとなど、どうしても麥酒の一本なりと飮まなくては、心がかわいて、病的に興奮して、とても睡られない。もつとも、無理まですべからず、出來た分でいゝのだよ。

三十一日午前八時　　牧　水

愛する
　妻へ

氷穗太田へは手紙を出しといた。
信州からは、なんとも、云つて來ない?

山崎へ、こゝにゐることを云つて、よろしく云つてくれ。
手紙は、どこ〳〵から來てゐる、たいした用事は無い? しらべて、知らしてくれ。郡山君は來ない? 邦子さんをば訪ねた?
今朝ちよつと晴れそうだつたが、また降るよ、ホントに困るなア。

朝なゆふな白雲湧きて、初夏の岬の森に啼く鳥もなし
岬越え、不思議の邦にくだるごと灣(いりえ)かなしき灯の街に入る
やよ、海はあをき月夜となるものをわがねる家にひくな、木の戸を
海よ搖れよ、詩人のいのちは汝(いまし)よりつねに鮮かに悲しみて居り
汐引けば白くあらはれやがて消ゆ月夜の家に岩見てあれば
切りすてゝ海に投げ入れよ、入日さすするどき崎に古墓の在り
饌賣ると月夜の海に魚のごと人こそさわげあをき月夜に
さらさらとあをき月夜の浪ぞ寄るなみうちぎはに積まれし死魚に
あんまりに死魚うる聲のかしましきに、月夜の港、われもねられず
海より這ひも出で來て聲青く賣るにやあらむ彼等は死魚を
月蒼く海のはてより出でむとす、死魚賣る聲をしばしとどめよ
夜をこめて崎の港に入りきたる船は死魚積む船ならぬなし

歌の批評を待つてゐます、

(その二) 今朝の手紙は、少々よみづらかつた。僕はまたそんな深い意味でなく、來てゐる會費をねだるやうな氣持であつたのだ、その位ゐで濟むわけがないが、といまでも思つてゐる位ゐだから。若しか

すると、その會費が、小石川で、まごついてゐるのかも知れない。なにはともあれ、御心配をかけて、甚だ恐縮しました。ぼくは、ホンの輕い意味でゐたものだから。

然し、そんなに弱つちア困るよ、たいしたことぢアないぢアないか。

ひとりで、來て、ぜいたく云つてるから、足下或は少々御立腹のていかナ。

なんなら、一晩泊りぐらゐで、やつて來ないか、初めての船にひとりは少々心配だが、たいしたこともあるまい。もつとも、ぼくもこゝの會計の都合、また、明日あたりのぼくの氣持の都合で、明日の晩あたりは歸らうかとも思ひ出した。作が出來さうなら金などはどうでも、歸りはしないが、さうは矢張りゆかぬと見えて、昨夜あたりから少々弱つてゐる。強ひて作れば無論出來るが、いま、そんなことはしたくないからね。それなら、また、こちらにゐる必要もないのだ。

それに、實はそろ〳〵歸り度くもなつてゐる。だいぶ、永くなつた樣な、はるかな氣もしてならぬのだ。

百首の土產は、それでも、わるくないと思ふ。心細い、めそ〳〵ばかりしてゐずと、歌のわるくちでも云つてよこしたら、どういふものだらう、まけぬ氣になつて作り出すのもわるくないぢアないか。そんなにしてゐられると、急にこの岬の尖りが鈍つたやうで、はかない氣もちだ。じつさいサ。

山ざきは、どうしてるね、たび〳〵來る？　默つて來たのを、おこつてはしないか。いまになつて、少々氣の毒な、かあいさうな氣がする。

そのほか誰も來ない？　信州からは？

もう知り合ひができて、だめだ。昨夜は帝大の生徒といふのと一晩話し、けふはいまゝで、土地の少年二人と城ケ島に磯あそびに行つてゐた。裸體になつて、飛び込んで、ひどいめにあつた、貝がらで、身體幾十ケ所の手傷サ、オット、變な聲を發すべからず、ホンの蚊の大きな奴がくつた位ゐなのだから。

でも、血がさかんに出たぜ、相模の海が、眞赤になつちやつた。取れたネ、カラス貝、さゞえ、蟹、無名貝數種、みんな一緒に行つたお醫者さんとこの坊つちやんにくれてやつた。コノ坊チヤンニジツニキレイナネイサンガアルトサ。久しぶりに浪にむぐつたりなどして、へと〳〵に勞れた、これからこの手紙を出しといて、一ねいり致さむ所存だ。歌をよして、ひとつ是非書きたい散文詩が、あるのだが、どうか、その潮が來てくれゝばいゝ。

昨夜、かなりの地震があつた。十四日の曇つた月、岬、地震、まだ、まだ、岬には詩が落ちてゐる。

島では、しきりに麥を刈つてゐた。

昨日、夕方、二度目に島に渡つたとき、思はず月の出を見てネ、われ知らず、巖の上に坐つてしまつた、海が非常に荒れてゐたから、潮けぶりで、月に光はなかつた。千鳥が啼いてゝ、燈臺には、あをい、あをい灯がともる。沖の島には、寂しい火山が煙をあげてゐる。過ぎゆく船もなかつた。

三十一日、午後二時　　牧　水

わが
喜志君へ

五月の終る日、曇れる午前、遠く櫓の聞ゆ、

（封筒裏面に）

一二

六月二十日、日向和田驛前の茶屋より（葉書）

汽車の中は、殆ど、ねむつた樣にして、ひろい林、平原のなかを通つて來た、日向和田といふ驛のあまりにも寂しいのにきもをつぶした、簡易鐵道の終點で、眞蒼な山と山との間にポツンと消えてゐる、石を切り出す槌の音が、あをやかな日光の曇つたそこから響いてゐる。これから三里、御嶽は、府下西多摩郡三田村字御嶽村大倉方に多分泊るだらう、何だか、そろ〳〵いゝ氣持になりさうだ、手紙をくれた

まへ、

二十日午前十一時　　牧水生

一三

六月二十二日、立川驛より（葉書）

山からも出しといたけれど、この葉書の方が早く着くだらう。イマ、山を下りて來た。

宿を出て二十町も下りたころ、土砂降りにあつてネ、大弱りサ。すつかり勞れ切つて、且つ寒くて、蒼からうつらをしてゐる。これから八王子に指田君を訪ねて、都合では高尾に登つて、明日或は明後日、歸京する。

なんだか、秋のやうな氣がしてならぬ。

二十二日夕六時半　　牧　水

一四

六月二十二日、御嶽より（葉書）

とてもたまらぬので、今日、いまから、山を馳け下らむと思ふ。

少しおそくなつたれど、八王子へ廻つて、指田君を訪ね、明日か或は明後日、歸京することになるであらう。

あまりの寂しさに、まるで、化石のやうになつてしまつた。霧が、いまのいまも、この通りに降つて居る。嗚呼、早く、人間にかへり度い！

二十二日午後二時　　若山　牧水

一五

八月廿五日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より（手紙）

宮崎に來て、六日たつた、職業を求むるために來てゐたのであつた。

ところが、矢張り、早速に無い、そこ此處に履歷書を出しておいて、今日、これからまた歸らねばならぬ、しばらく村の方で待つてみて、いゝ返事が來ぬやうであつたら、どうにでもして、また上京を遂行しようかと思ひ出した、よし、當地にあつたところで、こゝにつとめることは、そちらで、どんな貧乏をし

ても、鄉里に少しづゝ送金して、仕事をして居る方が、いゝと思ふ、とても、こちらでは、耐へられないと思ふ、君をこちらに呼ぶのも矢張り氣が進まぬ、君はいづれを採るか、

それこれ、いやな事で飛び歩いてゐる間、どうしても筆をとる氣にならなかつた、君の健康及び生活狀態は昨今どうであらう、くはしい手紙を坪谷宛に待つてゐる、齒は痛まない？

事を行へば卽ち悔となり、ものを言へば卽ち悔となる、全然空氣を異にした雰圍氣中に在つては一切が生を狹めるのみである。

これから十一里馬車、都農といふ町、姉の家に泊る、翌々日、坪谷へ歸るべし、

二十五日、午前五時半　　宮崎に於て

喜志樣　　牧水生

——以下、信州宛——

一六

十月十日、日向東臼杵郡坪谷より（手紙）

十日ほど前から、惡性の風邪に冒されて、弱りぬいてゐる、熱が八度九度四十度の間を朝晩に昇降して居る、

君は健康か、

家を出たとかいふ葉書、どういふ事情なりしにや、僕のやうに、神經を麻痺さしておく方が、この場合、必要だと思ふ、

つんけんすることは、するだけ、自分を馬鹿々々しく見せる昨今の狀態に在るではないか、

うちでも、もうそろ〳〵持てあましかけて來た、出られる時期も、あまり遠くあるまいと思ふ、

僕は却つて、東京に行くといふことが、今では恐し

くなつてゐる位ゐだ、
出て行つて、どうして暮すことだらうなどゝ思つてゐる、

然し、今度で、これからの僕もよほど變ることだらうと、苦笑してゐる、

君にいろ〳〵の目をみせて、まことに濟まない、
一種の天災みたやうなものだから、あきらめてゐてくれたまへ、まつたく、しかたがないのだ、

東京では、何だか、奴らがさかんにいゝ氣になつてゐるやうだ、
前田君の「陰影」、富田の「悲しき愛」などが送つて來た、
「詩歌」も、めつきり大發展だ、
内藤晨露の「抒情詩」といふ雜誌も出るさうだ、

僕は、眞面目に心で今度の歸郷を僕の藝術のために

感謝してゐる、
歸郷といふことが、何も關係があるのではない、
たゞ、斯うした境遇に在つて、ごく〳〵稀なひまひまに考へ出す藝術といふものが、どんなに嚴肅で、どんなにかけ離れて尊いものであることぞ、

いまゝでの自分の作などが、實際、はづかしい、
そして、これからの自分の藝術にどうして手を着けようと、思ふと、あまりにその所の高くして、ひたすらに畏れ縮まるばかりである、
僕は、もう何も作れないのでないか、などゝも思ふ、

才乏しく、天分うすき者の悲しさよ、

瞳冴えて、脚、腕しびれたる者の苦しさよ、

久しく逢はざる妻よ、
僕は「孤獨」が「妄想」の巢となることを、ひたすらに恐れて居る、

山の秋は、しだいとよくなる、
君の方は、どうだらう、アノ、高い山々に雪が來ただらう、

とにかく、靜かなれかしと祈つて居る、
各自の存在をさへ、みだされずば、他は問題でない、

十月十日

繁

喜志子樣

君が送るといつたので、キモノを、待つてゐるが、
一向來ない、よこされぬのなら、さう云つてよこしてくれたまへ、洗はなくともいゝのだ、セルのひとへものもあつたらほしい、小包先拂でもよろし、

一七

十月三十一日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より
（手紙）

お手紙、くりかへし拜見、
「現在の生活に感謝して居りますの」といふ一句が、まことに心に留つて居る、
僕も、まつたくさうである、寧ろ本當に感謝していいことだと思ふ、

來るべき事實、
それも甘受しなくてはなるまい、
甘受すべく用意せなければならなかつたのだ、

たゞ、
君に實に濟まないと思つて居る、
ほんとに可哀さうだと思つて居る、

手紙も書かず、さぞ不安に思つてゐるだらうが、僕は案外靜かな心になつてゐるのだ、
無論、無論普通の靜かな心では決してない、
ぼんやりを極めたなかに何かしら生きてゐるところがあると思つてくれたまへ、

戸籍のこと、承知した、
昨日今日、くだらぬことで、母と暫時の喧嘩をやつてゐるので、すぐには話が切り出しにくいが、その用意をしておいて、三四日うちには屹度話をしてみる。
多分、押問答のする、僕の言分を通してくれるだらうと思ふ、さう、安心してゐて充分である、
然し、戸籍と一口に云つても、結婚のこと、出産と同時に出來るものかしら、君の方に少しも説明がなかつたから、どうかしらとあやぶんでゐる、
結婚には双方の親の承諾がいる、君の方はいいのかね、
それで、
お産をするとなれば、何處でするね、
僕は斯う思つてゐる、多少我がまゝのところもあるやうだが、よくあとさきを考へた實際を主にした立案だと思つてゐる、
お産をば、君のうちでする、
丁度そのころに僕は東京に出て、身體の直つた君等を迎へとる準備をとゝのへておく、
それは、
第一、その君のうちでお産をすることは君の非常な苦痛とするところだらうが、此の際、感情をば一切馬鹿にしておかねば駄目だ、その方が安心して出來ると思ふ、
東京へ出て、お互ひ變な顔をしながら、馳け廻つて、生むといふことは、あまりに悲慘だと思ふ、
何とか、話の工風をしたら、少々ぐらゐていさいのいゝうちに、其處でお産が出來はしまいか、
それが、どうしてもいやならば、お互ひそれより少し前に東京に出かけるのだが、東京に出ろといふことが、實に僕にとつて至難な事なのだ、
いまは僕自身、東京に出る、うちを離れるといふことが非常に苦しい心になつてゐる、うちでは無論出

すつもりは少しもない、
けれども出なくてはならぬと思ひ立つてゐるので、それにはいろ〳〵の準備がいる、借金のかたや、親の養育法や、
それらを、來年の四五月までに、どうなり一時のがれでもいゝから、みちを立てゝおくつもりなのだ、多分つくだらう、
無理に出れば、お産前に出られるやうにしなくてはならぬ、
然しそれは君にとつてもよほど苦しいことが多からうと思ふが、どうだらう、
君は、いづれを採るか、
僕はいづれでもいゝ、
よく具體的のこと考へて、御返事を待つ、
「わたしは悲しいのであります」とか何とか、いま云つてゐたつて、何の效にもなりはしない、感情を抒べたり理屈を云つたりしてゐる手紙は、現在の我等の間に、もう何の役にたゝぬことになつてゐるのだ、
ものは思ひやうでどうでもなるものだと思ひ給へ、みづから求めて思ひあがつたりなどすることは、矢張りもう我等の圈内に要のないことゝなつてゐる、實際上の問題に關してゞある、
よく、前後を考へて、いづれかの御返事を待つ、
もつとほかにいゝ方法があるなら、それもきゝたい、
こちらに君を喚ばうかとも考へぬでもなかつたが、それは、到底よろしくない、不可能ではなからうが、お互ひのために、大によろしくないと思ふ、説明はめんどうだから略く、
もつとも君はそれを欲するか、
欲するとすれば、また考へ直してみなくてはならぬ、
とにかく、
僕に對して、怨むこと、憎むことがあつたら、先づ

それを明かに打出してもらひたい、
そして、それはそれとしておいて、實際上の前後策をたてゝ貰ひたい、
今のところ、僕は同情して貰つたりなどより、憎まれ恨まれてゐる方が、はるかに快い、
よく、この手紙を讀み、僕のこゝろもちをも察してくれ、そして、うろたへぬ返事をきかして貰ひたい、
結婚だの、お産だのについては、もつと何か必要條件がありそうだが、思ひつかぬ、女の方がよく知つてはゐませんか、あつたら、みな知らすること。

～～～～～～～～～～

東京に出ることだけは、この前から、僕の心でだけは決つてゐるのだが、表面では、それを否定してゐるのだ、
だから、右の戸籍云々の話を出したときには、それも打明けねばならぬ、
どうも、無事に行きそうにはない、
けれども、云ひ分をば立てる考へでゐる、

とにかく、
すつかり今までと態度を變へて、東京にも行かなくてはならぬ、
第一、少しでも金をこの鄕里へ送らねばならぬ、
父のごときは、このごろ、すつかり安堵して、急に失心したやうな風になつた、今まで行つてゐた近いところの病家へももう行かぬ、
わが側にこゝろぬけたる姿してとすれば父の來て居ること多し
この善き父のことを思ふのが、もう、何よりの苦しい傷手であるのです、
母は勝氣だから、今でも僕を敵として見て居る、敵はひどいが、とにかく氣をば少しもゆるさぬ、
そして老衰してゐるのは、彼女もまた同じである、

よく話をした一番上の姉、商賈人の細君になつてゐたの、
その姉もこのごろ家に歸つて來てゐる、
同じく勝氣の人だが、それでも自身の昨今の苦勞やら何かゝらだらう、たいへんにやさしくなつてゐる、
ものごとに對して多少の同情は持つやうになつてゐる、
けれども、母は永い貧乏の苦しみから、姉はそれを知つて居る上に永い間の商賈人氣質から、ともに金錢絕對主義者である、
二人の姪にすら、僕といふものはこのごろ僕のうちに下宿してゐる十圓どりの小學代用敎師にすら劣り劣つてゐるものとして、受取られてゐるのだ、
永い間の貧乏が、氣もなかつた僕の家族を甚だしい下品な下等なる物質欲主義者たらしめたことを、まことに〳〵あさましく、悲しく思つてゐる、
十年間ばかりの變化だ、恐ろしい事實である、

姪に養子でもとり、この家を殘して、僕は離れてゆくつもりでゐる、
憐れむべき人たちに、實に僕は心で詫びてゐる、

然し、
今度の歸鄕は、實に僕にとつて、有意義のことであつた、
それは、實際生活の上に於てよりも、寧ろ、我が藝術の上に於てゞある、是は、自身にも意外だが、君にもおかしいだらう、
どういふ影響？
曰く、云ひがたし、けれども、大なる事實である、これのみ、よろこんでいたゞきたい、

君も、その現在の生活に心から感謝するやうになりたまい、
實際、自然は何ものをも空しくは與へない、

～～～～～～～～～～

僕は、はづかしいが、君のそのおなかの子どもが可愛くてならぬ、
僕自身が、そこにゐるやうにのみ思へる、
君を戀しく思ひ、その子をかはゆく思ふ、

青いいのちの芽ざし、
我等はまことに新しい生命の日に入るのである、

君の健康を祈る、
いろ〳〵結ぼれた物思ひも、ひよいと眼を代へることによつて、實に案外にたやすく思ひなされることが、多いものだ、
のんきなことを云つてるやうだが、君はさうは思はないか、

君のお父さん、お母さん、兄さん、その他の家族たちに、適當な機會があつたら、よろしく申上げたく思つてゐることを、つたへてくれたまへ、

あらゆる機會を善用して、心をゆたかにするやうに努めねばならぬと思ふ、君にも、この心を分ち度い、

着物は、讀賣からの五圓と、新小説の歌の選五圓とのなかゝら、上と下とあやしきものをこしらへた、實に獰猛なる嘲罵、辛らつを極めた好奇心のまんなかに於てサ、ハ、、、、
今月の讀賣ので、褊衿を作るつもりでゐる、
君も小づかひに困るだらうが、をんなだからとかなんとかで、阿母さんにでもあまえてゐてくれたまい、これから少し張り込んで、上京費用その他をこしらへねばならぬ、書くつもりでゐる、
君が着物を送つてくれゝば、先づ幸ひであつた、然し、むりにそうしなくともよろしい、着たきりで、足りるから、
うちの貧乏も極端だが、あれこれで、葉書代も自身で出すやうにしてゐるのです、ヒサンですかね、

終りに、一句云つておく、
どういふことがあらうと、一づに思ひつめて失望してはいけない、
まだ〳〵恐るべき不如意のことが、現に我等の上に落ちかゝつてゐるのかも知れないのだ、

心を、ほんとうに靜かに持ち玉へ、
身邊の人及び世間に對しては、禪寺の老僧のごとく心を持ちたまへ、
自分自身に對してのみ、ほんとうの女となりたまへ、

君はいまは君ひとりの君ではないことにも、可哀相だが、瞳をとめなくてはならぬ、
僕は健在である、君の健在をいのる、
左樣なら、安らかに睡りたまへ、

十月三十一日

牧水より

喜志さまへ

三四日うちに、「死か藝術か」を送れるやうになるだらう、
讀めるなら、雜誌も送つてあげようか、

急ぐから、讀みかへしてみないから、わからぬところがあるかも知れぬ、よく讀んでくれ、そして、返事、待つ、

福永は、とう〳〵、ほんとうの生活をするといつて伊豆の大島に移つてしまつた、彼をおもふことは、なみだである、

一八

十一月九日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より（手紙）

拜啓
小包は、一昨日來たさうだ、小生は三日ばかりうちを留守にして、昨日の朝、歸つた、そして、アノ行李をあけた、

いろ〳〵、ほんとに、ありがたう、
鴨は、少々くさくなつてゐた、けれども、強ひて姉に料理させて、骨と、はらわたとをば棄てゝ、小がらく煮たところ、けつこうにたべられた、父と僕とは、晝もそのために、銚子をつけさせた、
いつたい、この近所ではあの鴨はまことに珍らしいのだ、だから父などは先づそれを珍重した、
着物もありがたう、おかげさまで、着がへが出來た、身體のせゐだらう、今年は、何だか、むやみに寒いやうだ、

戸籍のことは、大方、承諾を得た、
戸籍のことのみなら、實に易々として、濟んだのだ、ところが、それがもとになつて、僕の上京問題が、急に烈しく火の手をあげてね、そのため、僕はカンシャクを起して、三日ばかり、となり村の叔父のところに行つてゐたのだ、若し、あまりむつかしいやうになつてゐるなら、またそれだけどうでも法をとらうと歸つて見たところ、案外に、無事らしい、

戸籍のことは、はつきりと、きめるには相違ないが（何を云つても父が既に承知ゆゑ）その手續がわからぬ、どうしたらいゝのだらうと、今日もまごついてくらした、
どうすればいゝのだらう、君は知らないか、こつちで、解つたら、わかり次第、かたをつけるやうにする、

上京問題は、僕自身心苦しいのだ、
この間、提出した條件は、毎月、今後十圓づゝ送る、何か、用事があつたらいつでも急激に歸國する、といふやうなことだつたのだ、
それがネ、矢張り、いろ〳〵あるものだから、實際、どつちもつらいのだ、
併し、どうしても上京しなくてはならぬ、
都合では、右の條件のほかに、父だけ、一緒に上ることになるかも知れぬ、父は無條件に僕に初めから同意したものだから、他の人々の罪のない、乾れた反感を買つてゐるのだ、

いづれにしても、君は心配しなくて、いゝ、たゞ、右の戸籍手續を誰かにきいて知つてでもゐるなら（知つてゐさうな手紙のくちぶりなりしゆゑ）早速知らせたまへ、兩方の親の印形がいると思ふが、君の方はいゝのか、否か、

僕は今夜、父と飲んだゝめ、醉つてゐる、
眼の皮などは破れさうだ、
とにかく今夜書くのは、
止さう、あすにする、（七日夜）

どうも、頭がわるくて、いかぬ、燃えつかぬ薪みたいだ、
何か、書き足すつもりで、一昨夜書いた手紙をまだ、出さずにおいたのだが、何も、あれ以外に具體上の用事はないやうだ、思ひつかぬ、
「死か藝術か」に雜誌を二册入れて、小包で、一日か二日かに送つておいたが屆いたらう、雜誌は何かしら、これからも送らうか、僕のかいたもの、僕に關する記事のついてゐるものをば、保存しておいてくれたまへ、
何かありさうでしやうがないが、何も書けぬ、
九日朝　牧　水
喜志様

身體はいゝかい、だいじにしなくてはだめだよ、自分で自分の身をだいてるやうにしてゐなくてはわるい、
この間、出した長い手紙を、讀んだらすぐ返事くれたまい、

一九

十一月十四日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より
（手紙）
父、けさ、急にわるくなり、
ものをいふひまもなく、

十時四十分、
終に永眠致し候、

然し何も、もはや、御案じ下さるまじく、
靜かに事後を處理致すべく候

十一月十四日　牧水生

喜志様

二〇

十一月二十三日、日向東臼杵郡坪谷より(手紙)

父の死は、あまりにも突然であつた。
十四日の朝、二階から降りると、(私は二階にひとり寢るので)臺所に父がねてゐる、朝からどうしたんですと訊くと、昨夜の飲過ぎだらうと他の者が代つて答へた、飯を食つて、私はいつものやうに、うしろの山へ散歩に出た、二十分も歩いてゐたか、姪の泣いて呼ぶのに驚いて馳けつけると、もう事が切れてゐた。

電報を打たうと思つたが、あまりに急激な驚きを與へたくないと、手紙に代へた、それを書きながら、お前に一目でもこの好き父を見せたいと落涙した、

君からの電報は、意外であつた、萬朝でゞも見たことだらうとあとで思つた、萬朝にはいま福永の代りに佐藤が入つてゐる、彼に打電した故、

十里、十五里のところから、親族がみな集つた。
葬式は村としては極めて盛大であつた、故人の性質に對して、うそで泣いてゐた者はたゞの一人もないと思つた、みな〳〵惜しみ悲しんで泣いてゐた、

昨日の朝、漸く全然親族の者も歸つてしまつた、
昨日は、村への禮歩きであつた、
母も今日、この前から歸つてゐた姉をつれて、その緣づき先へ行つた、久しぶりにいま机に向つて居る、机をも二階からおろして、奥座敷にすゑた、

如何にすべきか、途方にくれてゐる、
來年の春は父をつれて、上京する筈であつた、葬式の時に集つた人のうちの話によると、父はそれを非常に樂しんでゐたさうである、

出て行かうと考へ、留まらうと思ひ、實に惱んでゐる、

出來るなら、君にこちらに來て貰ひたいと思ふ、そして、あとで出るにしても、當分でもこちらに留りたいと先づ思ふ、
母も親族もみな君を呼ぶことを私にすゝめた、その時は何とも返事しなかつたが、矢張り來て欲しいと昨日今日私も考へてゐる、

來ても、君の豫想ほどつらいことは決してない、それは私がたしかに受合ふ、母も實にものゝ解つた人であるのだ、一種の意地から私をば苛めてゐた、けれど、父の死は私よりも寧ろ彼女に烈しく影響した、

意地も何もなく、私にたよつてゐる、これよりは彼女も父のごとく、父よりも濃かに好き人となるであらうと思ふ、他の家族は問題でない、

どうだらう、來てくれる氣があるだらうか、

ふたりして、斯んなところに、濃密な緊張した生活の一斷片を創作ることも、また意義あることだと思ふ、

それにも、勿論、いろ〳〵の苦勞がある、
第一、私には收入の法がない、東京からの稿料が、七八圓もあるか位ゐのものだ、そして、純然たる一家の經營者と私がなつてゐるのだ、くるしいにはくるしいが、まさか、饑えもせぬと信ずる、どうしても行けぬときには、小學校の敎師なり、村役場に出たりなり、どうなりと法をつける、稿料も多少增加し得やうかと私かに計畫してゐる、

第二に、私の文壇に於ける地位問題である、これは然し、いま、云はなくともいゝだらう、全然信念のないことなら、問題にしはせぬ、

くよ〳〵してゐても、實際、しかたがない、

どうだらう、

多少、くるしいに相違ないが、來てくれる決心がつくであらうか、案外に來てから悦んでくれるだらうとは私の樂しんでゐることなのだ、

とにかく、この返事をきかしてくれたまへ、

それによつて、また考へを直さねばならぬ、

くはしい返事を待つてゐます、

身體は、ほんとうに達者にや、お前が、くしや〳〵のあまり、何かわるい病氣にでもかゝりはせぬかと、氣になつてならぬ、いつもやはらかな春の光のやうな氣持でゐてくれ、無理だと云ふか知れぬが、無理でもいゝ、そうしてゐてくれ、

お前をこちらに呼ぶのも、心からの私の希望ではないが、いろ〳〵その間にも心苦しいことがある、けれども、他と比べて、それがよりよき處置である、しかたのないことであると信ずるが故である、私の心をも酌んでくれ、

平靜な心と、滯りなき健康とを祈つて筆をおく、

こちらにゐる期間は、母を見送る迄か、母の心をやはらげておいて、おとなしく許しを得て出て行くまでか、の二つだ、

十一月二十三日朝

繁

喜志へ

先日送りし小包、(死か藝術か)は届いたらう、

あとから、また雜誌を送る、

二一

十二月四日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より

(手紙)

▽また、先日、云ひ送つた問題について、書き足す。

▽君をこちらに喚ぶことは、矢張り、よくないと思ふ。

僕のこちらにゐるのもよくないことだと思ふ。

▽先々回、云ひ送つてあるやうに、僕はやはり上京する。

時季は、これも同じく、その時云つておいたころ、多分來春四五月になるだらう。

▽君の籍は、急にこれも手續することにする。多分、この十四五日前後になるであらう。

▽それまで、君にも、君からのこの前の手紙のやうに、苦しくとも其家に、がまんしてゐて、くれたまへ、僕も、そのことは甚だ苦痛に思ふが、どうにも他にやりやうがない。

▽上京の期は、或は右の月より早くなるもしれぬ。二月ごろだ。この家に養子をして、全てを譲つて、全くの單身となつて上るつもりでゐるので、そのあての男が、そのころ(二月か四月)でなくては村に歸つて來ぬのだ。

▽たび〳〵、君の心をわづらはして、まことに恐縮する。然し、今度は、間違はない。家族には、まだ默つてあるが、その方面にひそかに手を着けてゐる。

▽君の心、君の身體の健康は、完全であるだらうか。自身の起臥の影に、必ず君のそれが伴つてゐる。どうか、このこゝろを諒としてくれたまへ。

▽「死か藝術か」は屈かなかつたのではないか、そうだつたら、もう一册あるから送る、返、待つ。

▽新年の雜誌に百八十首ほど出る。みな、今までと違つてゐるかと思ふ。

▽東京に、新たに生れたい。

▽まことに、我等の子供が生れるのでない、我等自身が生れるのだ。

▽東京の新生活の幻影を描いて、樂しんでゐる。初めて逢ふ人々のやうに、我等は相逢ひたい。より若く、より生々せる御身を擁せむことを念ふ。どうか、強くあつてくれ、どうか、元氣であつてくれ。われを信じてくれ。われを愛してくれ。つねに君をおもはぬ時はないのだ。彷徨しながら、君を眺めて、つねにわれに歸つてくる。

▽君をよぶやうに云つてあるので、母は君を待つてゐる。

都合では、つれて行くかも知れぬが、多分、一人である。

十二月四日

牧水

喜志樣

おつ母さんその他みな樣へよろしく。

二二

十二月二十九日、日向東臼杵郡東郷村坪谷より

（手紙）

手紙に代へて、三葉の寫眞を送る。一葉は、東の道路から撮つた我が家、

もとは、道路沿ひに塀やら中門やら立つてゐたのだが、水や何かで、壞れたまゝだ、向つて右のはづれの葉のある木が枇杷の木、いま花が咲いてゐるのだけれど、よく見えぬ、枇杷の木の幹の向ふに小さな木がある、これは佛手柑、枇杷の左手やゝ奥に見える落葉樹が梅、梅の前にあるのが雲州蜜柑と金柑の木、便所のさし出てる前にあるのが、柚子に雲州、家の角、戸袋のところにある小さな落葉樹が桃（これは僕のゐたころは非常に大きな老木であつたのを風で仆れて、今のはそのあとの芽生）その左手に蔑つてゐるのが梔子と、雲州、その左に高く葉をつけてゐるのが梅檀、それから向ふにも家のうしろにも蜜柑や柿や梨があるけれど、よくわからぬ、二階の軒に柿がつるしてあるだらう、この柿は父と僕とでつるしたものだつたが、父はその甘くなるのを待たずに逝つてしまつた、梅檀も今はきれいにおち葉して、くちなしの實が眞赤になつてる、多かつた蜜柑は父の葬式の日に一つも殘さず接待に出してしまうた、

一葉は、家の庭、いまはそこを小さな野菜畑にしてあるところから撮つたもの、左手の上の方にそよいでゐるのが、右の寫眞に出た梅檀だ、下の川は洪水のあとで、——僕が國を出て、しば〳〵大洪水があつたのださうだ、現にこの秋もあつた、その時も家の石垣まで上つた——石原が出來てゐるが、僕の遊んだころは、殆んどみな岩の底のみであつた、枯れはてた冬枯の溪の寂しさを見給へ、向ふに家が見える、その家の手前の所に廣い畑みたいなところがあるだらう、此處にはこの四五年前まで深い廣大な官有林が茂つてゐたのだ、いまでも官有林だが、杉の苗の養成所と代つてゐる、ずつと向ふの峰が尾鈴山の連峰だ、これは家から東々南の景、これと反對の西と南の方に、これと同じ程度で、川が折れて眞直ぐに見渡されることになつてゐるのだ、月の夜と、雨の日とが、特にいゝ、

一葉は、家の寫眞のずつと向ふに厩があるだらう、（今は牛も馬もゐないけれど）その向つて右の橫の方でとらしたのだ、少し動いたらしいし、光線の具合がおもしろくなかつたので、だいぶ可笑しい、左手の角の明るいのは日光だ、

おもしろい旅寫眞師が來てね、それに、こちらにゐる中に出來た作を一册にまとめ、その口繪に入れたい希望もあつて、此等を撮らしたのであつた、

お前の眼にふれ、肌に觸れむこと——月並で似つかはしくないが、これもわが痛き希望である。

お前の、健康だ、ときくごとに、安堵と感謝とをおぼえぬことはない、僕よりもお前の方が、よつぽどしつかりしてゐることを考へて、いつも苦笑をする、こんど逢つたとき、大に讃美せむ樂しみを所有して居るのだ、

こんど逢つた時、
ほんとに、どうして逢ふだらう、
毎晩、眼がさめてはそれのみ空想してゐる、

蜜柑を送り度いが、近所にあるのは、雲州蜜柑といふので、いやにあまいのみの蜜柑であるし、それでは目下の君の嗜好に反くだらうと思ふので、まごまごしてゐる、丁度、この正月を濟まして、海岸に行くことになつてゐるので、そこには例の夏蜜柑の出來るところがある、そこから間違ひなく送る、この一日が父の四十九日になる、それを濟ませて、やゝ遠方の親族廻りに出ねばならぬのだ、

金、
僕もいつもそれを思つてゐた、心のみ苦しめてゐた、二月の初めまで待つてくれないか、二月號に何か書く、その金を全部君の方に廻すことにする、一月號のが一寸來ることになつてゐるけれど、これは既に用ひみちが豫定してあつて、動かされないのだ、濟まないが、そうしてくれ、二月には十圓か十二三圓は出來ると思ふ、

戸籍のこと、これも度々遲れてすみません、役場が三里位もあるので、それにそこに出てゐる奴が、みないやな奴ばかりでネ、かと云つて誰に賴むわけにも行かず、そう思ひながら、思ひ切つてよう行かないのだ、これも、今度、右の海岸行の途中に用を濟ましたく思つてゐる、
間違ひはない、といふことだけで、延引をば許して

おいてくれ、
僕はほんとに、一種の、氣拔になつてゐるのだ、

僕の健康がよくない、と云つて、しかとした病氣ぢアないが、神經衰弱なのだらう、睡眠、食欲、ともに進まず、それはいゝが、人間が半分バカのやうになつてゐる、第一、思考力の衰へたのに畏れてゐる、母もたいへん氣づかつて、海岸にでも行け、姉のところにでも行つて遊んで來いといふのだ、それでも、まだ、詩が出來るやうだから、死にはせぬのだらう、

よそに出るのは、來月の十日ごろ、十日ほどゐて歸つてくる、

例によつて、荒筋要用のみ、
だつて、默つてたつて、いゝぢアないか、
僕はそうも思つてるのだよ、

東京の友だちが、僕をひどくいぢめる、お前のところには、どこから通信があるか、くにえさんは、どうしてゐる、
寫眞と一緒に古雜誌を送る、お前は、柿の村人氏から、アラ、ギを貰つてはせぬか、見たし、
僕は、はづかしいことを考へてゐる、漏らそうか、アカンボの名を、あれならあれ、あれならあれと、もう、ちやんときめてゐることだ、名は、もらされぬ、
僕が、然し、可笑しい氣がする、

十二月二十九日

もう、年もない、大變だつたねえ、今年は、

牧　水

喜志樣

御許へ

大正二年

一

二月九日、日向東臼杵郡坪谷より（手紙）

また御ぶさたして、まことに濟まなかつた、

一週間、ひまを貰つて出かけた旅行が——筑後の大牟田から、旅費滯在費を出すから、來てくれと二日に云つて來たので。その日に家を出て、そこに行つた、所がそれをきゝ傳へた近所のそこ此處から同樣に招かれて、廻り〳〵、とう〳〵北部九州を廻りつくして、鹿兒島まで行つてしまつた、そして、歸つたのが、この三日の夜、

寢てゐるのは、いやに氣がゝりだ、ほんの風邪か知ら、氣を腐らせずに用心してほしい、

ハラオビは、そう思ひながら、これもとうとうだめであつた、それに多少滑稽を感じてゐたしするもんだから、とう〳〵、失敬した、然し、そつちで新しいのをやつた方が却つてきれいで、よかつたらう、金を送るつもりで歸つてきてみると、大あて外れで、すつかり弱つた、讀賣新聞に變動のあつた話はきいてゐたが、僕の選もやめられたらしい、十二月分も一月分も選料が送つて來ないし、今日の新聞を見れば土岐の選が出てゐる、それから、「新日本」と「中央公論」に送つておいた歌が、沒書になつた、それこれで、今月は少しも收入がなかつたのだ、僅かに來てゐた一枚の小爲替券を、とりあへずこゝに封入しておく、笑はずに受取つておいて貰ひたし、然し、入山一年にして、斯うまで侮辱を受けやうとは、全く意外であつた、牧水葬るべしの叫聲がヘタをすると、實行せられるかも知れぬ、苦笑と憤怒とが、いやに身に燃え立つ、

戸籍のこともあるが、旅行の歸りに役場のある所を通つたので、その時に方式だけでもきいて來ようかと思つたけれど、どうにも寄るのがつらく、これも

またにした、子供の生れるまでには、それでも、かたをつけるであらう、

家の方にも、その樣な、ごた〳〵があるとすれば、一層氣が腐るかも知れぬ、つとめて、それを避け給ふべし、われみづからの小さな世界を守るに、いま、しくはないと思ふ。

手紙にかいてあつた歌、まことにいゝと思つた、でも、まだ例のくせのわる固いところがぬけてゐない、

そうサ、いま、歌でも、しつかり作つてゐたらいゝだらう、のんきなことを、と思ふかも知れぬが、上策だと思ふ、

「アラヽギ」は、歸つてみたら、よそからも、發行所からも、君からも、三册來てゐた、二月號も發行所から送つてよこした。あとも續いてくるのだらうと思ふ、

「劇と詩」の一月號を送る、「東北」も、

僕も、だいぶ、しよげてゐる、旅行など、以前ほどちつとも面白くない、くだらぬことのみ、考へてゐる、泥酔も出來なくなつた、不景氣なことだと思ふ、實に、いろんなことを考へる、そして、おまへを、いつも氣の毒に、可哀相に思ふ、僕はなぜ斯う、いくぢなしなのだらうと、思ふ、そうでない〳〵と考へてゐたに、全く病的なところがあるのかも知れぬと思ふ、

寒いのは氣の毒だねえ、こちらも今年は大變寒いのだそうだ、でも、日のうちに、どうしたはずみかのときに、オ、寒いと思ふ位ゐのものだ、三月になると、山に櫻が咲く、それを子供のやうにして待つてゐる、梅はもう遲い、めじろがたくさんそれに——家のそばに、群つてくる、これからめじろを飼はうかと考へてゐる、

鹿兒島には、櫻がさいてゐた、寒ざくらとかいつて

淡紅ゐの八重だ、驚いたね、九州の青年歌人は、然し、僕の歸つてゐるのをたいへんに喜んでゐる、流人をよろこぶ島の人の心地だらう、

最も悲しいことに、僕にはこのごろ、非常に信仰心が薄くなつた、自分の生、自分の藝術、そんなものにまで妙に暗い瞳を向けるやうになつた、恐しいことだと思ふ、

まだ生れる子の、男か女か、わからないの、女なら、「みさき」といふ名をつけようぢアないか、男なら——、まだ考へてゐない、僕は女の子が、いゝと思つてる、美人がほしい、

お前にも、永く〳〵逢はないやうにも思ひ、昨日にも逢つてゐるやうにも思ふ、不幸なる人よ、

山崎斌から、手紙をよこしてゐた、今は村に歸つてるらしいね、相變らずの樣子だ、

佐藤も、あまり氣勢があがらないやうだ、〇〇のあの女は、横濱とかへ、かたづいた由、當人は、まだ〇〇にゐる樣子だ、斯う友人一黨が、振はなくては心細い、邦枝さんは、何か集を出しはしなかつたか、中原しづ子さんの歌を、アラ、ギ二月號でみて、なつかしかつた、病氣はいゝ方だらうか、平賀は、飛驒の高山中學の先生になつた、太田さんにも默つてゐるが、何か、たよりがあるかしら、

いまは、旅行のつかれ、それに歸つてくるとすぐ大晦日、お正月（いんれき）の騒ぎで、すつかり頭をわるくして、何一つ、具體的のことが考へられぬ、たゞ、ぼんやりしてゐることのみを、お知らせしておく、

阿母さんたちに、よろしく申上げてくれ、さぞ、不思議に思つておゐでるだらうと、苦笑せらるゝ、

早く、春になるがいゝ、春になれば、また、うんといゝ事にも出逢ひそうだ、

とにかく、健康をいのるよ

二月九日

おん身の

牧水生

喜志さま

二

二月二十六日、日向國東臼杵郡東郷村坪谷より

（手紙）

梅が散つて、うらの山に、うぐひすがオカシな口調で啼いてゐる、考へてみれば、アノ、奈良井川の岸で出會つた時が、めぐつて來るわけだ、

×

屆書とか何とか、そんなことが、むやみにめんどうな僕は、もてあまして、一寸遠方ではあるが、アル村役場につとめてゐる友人に、訊合せてみた所、別紙のやうな返事が來た、

僕は、いづれを採るもさしつかへなし、

君は、三つのうち、どれを採るか、

矢張り無事なのは、第三番目の婚姻屆だらうが、子供の出來るのが、少し早すぎる、多少、出生無屆にしておくことが、その地方の關係上出來るだらうか、どうだらうか、出來れば、それにしておかうぢアないか、（もつとも、アトが追驅けて出て來てはしやうがない）出來なければ、第二だ、

いづれをとるや、至急返事待ちます、一人で、思案にあまれば、家族の人の智惠をかり給へ、私生兒などゝいふのは、みな困るだらう、

そして、いづれにしても、別紙にある通りの、君の方の戸籍とう本がいる、送つてくれ玉へ、自身でとりにくかつたら、君から君の方の役場に宛て、僕の名で、とう本下附申請書を出して、直接僕あてに送つてくれたまへ、願書と返送料とを、こゝに封入しておく、

そうすれば、どうとか、やつかいな仕事のかたはつくだらう、斯んなナンのやくにもたゝぬことにいかい苦勞をすることだ、あきらめて、早くかたづけやうではないか、（誰か曰く、アンマリ、早くもねえ）

×

からだは如何にや、天晴れな詩人か天晴れな美人かを產む自信ありや否や、專心そのいづれかに努力すべし、（誰か曰く、勝手なネツを吹くねえ――）

（コ、にわる口がかいてあつたれど、發賣禁止に會ひて、抹消、）

×

母が、近來、非常に弱つてきた、
そして、
三四日前、
僕に上京の許可を與へた、
實に、くるしい立場である、
然し、いづれにせよ、たいした變化のない限り、旅費が出來たら上京したいと思ふ、それにしても、どうせ、五月ごろになるであらう。
母の健康を祈つてくれたまへ、彼女は今日も床についてゐる、

×

先日送つた四圓は屆いたかしら、
金を送りたいと切りに思ふけれど、どうにも（東京にゐるときより）ゆうづうがきかぬ、お產までには少しでも、どうにかしたいと思ふ、さぞ、君も困つてゐるだらう、今月になつて、また、歌も少しもできぬ、
お產は一體いつなの、四月？三月？

僕も頭がひどくわるい、實に、ぼんやりを極めて居る、酒で、わづかに、時々發作的に元氣を恢復する、
今日の今のごときその一つ、
右、とり急ぎ、用事のみ、

二月二十六日、午后

牧水

きし樣

三

三月二十六日、日向東臼杵郡坪谷より（手紙）

昨日と今日と、いやに冷えると思つてゐたら、前の

尾鈴山が、鹿の子まだらに染つてゐる、不思議な現象だ、
まだなのかい、いつそのこと、早く出發させてしまふ方が、いゝぢアないか、いやに容體ぶつて、扣へてゐるものだ、
名前は、男なら旅人（たびと）としろと云つておいたが、幼な名の呼聲に、タビちやんは少々振はないから、牧人（まきと）としてもよからうかと思ひだした、二つのうち、お前のいゝのを選ぶがいゝ。
戸籍の屆書は、もう太田氏（註、太田水穗）から、お前の方に廻つてるだらう、こちらに送り返してさへ貰へば、それで事濟みだ、ずゐぶんうるさい思ひをさしやがつた、然し、これでいよ〳〵若山喜志子夫人になつたわけだね、あんまり、なりばえも致しませんか、ハ、、、

○○氏の手紙、僕の歌に對して云つてあるのは、いつものあの人の調子で、別に氣にとめる心も起らせない、僕の作を、たゞ人氣とりか、目先き變への藝當かのやうに思つてるところなんぞは、お甘いもんだ、そんな「心の餘裕」があるのなら、僕も斯う苦しまなくともいゝわけなんだ、然し、いまの僕の作に缺點のあるのは、ひと一倍自身で知つてゐる、寧ろ、缺點そのものゝ如くに眺めてゐるのだ、もう少し心がおちつかなくては、いゝものは出來る筈がないのだ、その意味に於て、僕は實に烈しく自己の健康と時間と、生活狀態とについて、腐心してゐる、もう少し少し、純詩人の生活裡に入らなくては駄目だと思ふ、東京に出たらばといふ氣もその底にひそんでゐるのだ、歌を見せたいと思はぬでもないけれど、見せねば氣の濟まぬ程度には進んでゐない、
お前の歌を見ていつもそう思ふ、なぜ斯うわる固いんだらうと、マルで、しん粉細工（ざいく）のやうなものばかりぢアないか、新味も生氣も、いろもつやも何もありはせぬ、もう少し、自分の心持を開け放つたらどうだらう、もとは多少の鋭氣があつたが、それすら近來あやしいぢアないか、もつとも、いま、お前は歌どころぢアないのだ、もつと、大きな創作にかゝ